
マジカルハイテンション！

アカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジカルハイテンション！

【Nコード】

N3222B

【作者名】

アカ

【あらすじ】

ある日、自称『麗しき美女』の元に一人の魔法使いの男の子がやって来た。

その日から一年間、二人の慌ただしい日常が始まるのであった。

第1話：突然の訪問者

築三十年のボロっちい木造のアパートで、名前は『よくもえ荘』。
最悪なネーミング。そのとある一室に私は住んでいます。

表札には『ももぐりあきこ桃栗秋子』と書いてあります。私の名前。スーパーで働いている麗しき二十歳の美女です。

えっ、私ってうざい？ ふふっ、大丈夫。もう知ってるから。

今日は仕事は休み。今、お昼のランチタイムとしてカップラーメンを食べているところです。うゝん、美味！ 『イタリアン味噌 pasta 風焼きそば』だって。よくわからないけどなかなかやるわね、カップラ業界。

ピンポーン。

あらあら、この麗しき美女の私に客人ね。あいにく食事中だから華麗にシカトしましょ。

ピンポーン。

……………。

ピンポーンピンポーン。

ピンポーンピンポーンピッピンポーン。ピピピピンポーン。ピンポッホォーン。

「はいどなた？」

やかましかったから、つつい出ちゃった。うざいから早く帰ってもらわないとね。

宅配便かと思ったけど違った。おとぎ話に出てきそうな魔女の帽子を被った少年（推定十五歳）がゴルフクラブのアイアンを抱えながら立っていた。

ガラスのように透き通る蒼い瞳。外人さんみたいな金髪。そしてシヨタコンは放っておけないような綺麗に整った可愛い弟系って感じの顔。まあ私はシヨタコンじゃないけどね。

ところでこの子は私に何の用があるのかな？ 魔法使いみたいな格好をしているから、もしかしてハロウインのイベントとしてお菓子を貰いに来たのかな？ あらやだあ、ウチにはにぼしかきゅうりしかないのにい。っていうか、今クリスマスだし。

「ちょっと待ってね。今にぼしかきゅうりを持ってくるから」

「えっ？ いや、その……いらないです……」

「あらま。もしかして納豆の方がよかった？」

「そういう問題じゃないです」

まったく、最近のガキンチョは贅沢ねえ。その蒼い目はアレでしょ、カラーコンタクトでしょ。やあねー！ 髪も染めてるんでしょ？ いやあもうカッコつけちゃって、このこのー！ そのままでも十分モテる顔だっつうの！

「モモグリさん、これを……」

「ん、何かな？ ……手紙？」

「読んでください」

はいはい、わかりましたよつと。随分と達筆な字ですこと。 になに……？

―――
桃栗秋子様へ。

最近めっきりと寒くなりましたね。いかがお過ごしでしょうか。こちらは家の周りに積もった雪を除雪するのが大変なほどの大雪で

す。

あ、申し遅れました。わたくし、マホーツ界魔法学校の校長ライトと申します。

早速ですが用件を。

そこにいます魔法学校の生徒クロウを一年ほど居候させていただけないでしょうか？

我がマホーツ界魔法学校では、卒業前に人間界で一年間過ごし、魔法の経験と人々との関わり合いを育む行事があります。そのため、生徒達には人間界の者と共に暮らしてもらいたいです。人間界のことがわからない彼らに、色々なことを教えていただきたいのです。勝手なお願いではありますが、どうか一年間クロウと一緒にいてあげてください。

魔法学校？ ほほう、興味深い。っていうかそんなモノが存在してたなんて不思議。

さて、私の家にこのクロウ君を泊めてあげろって？ うーん、悩むなあ。だって食費がかかるだろうし。

しかし本当に勝手に決めたものね。どうやって私の住所を調べたんだろう？ まあいいや。

「クロウ君、中に入りな。今お昼ご飯を食べてるからさ、キミも何か食べる？」

「えっ、居候させてくれるんですか？」

「うん」

「あはっ、ありがとうございます！」

ふふっ、こんなに喜んでくれるなんて。かーわいい！

……ただ、もちろんタダで泊めるわけないんだけどね。

「掃除、洗濯、料理など、家事全般はキミに任せるから」

「ええっ！ ボク、一応宿題とかもあるんだけど……」

「知らない。家事やれ」

「まあ、お世話になる身だしな……。やらせていただきます……」
わかれぽヨシ！

私はクロウ君の頭の撫でてやると家の中に入れてあげた。

クロウ君にはビーフジャーキーをあげた。

「ボクはペットですか？」

って嘆いていたけど無視。いきなり押しかけてきて贅沢言ってるじゃないの。

でもそんな潤んだ瞳で見つめられると……。あーダメ。私の善良な心が揺らいでしまった。仕方なく生ハムにランクアップしてあげたわ。

でもそれはそれで文句を言ってきたから、さらにビンタにランクアップさせた。スツキリした。

第2話：彼は正直者

おっはー、桃栗秋子です。古いとか言わないように。

昨日知らない男の子が来ました。名前はクロウ君。可愛いです。

なんでもクロウ君は魔法使いなんだって。凄くない？ マギーさんのような手品士じゃなくて、ゲームとかに出てくるような魔法を使うんだよ。神秘的〜。

実際に見せてもらったけど凄かったよ。ゴルフクラブのアイアンを振りかざしたら、ゴルフクラブの先から火の玉が飛び出したんだから。

私は、

「わーすごい！」

って言いながらビンタをくらわせてあげたわ。だってアパートが燃えちゃうじゃない。アパートの名前が『よくもえ荘』よ？ めちゃくちゃ危ないじゃないの。だからこれは体罰じゃなくて正義の鉄拳だと思ってくれればいいからね。

そんなクロウ君は今、コタツに入りながら宿題をやっています。ノートに何か書いてます。必死です。そういうの見てると邪魔したくなるんだよね〜。私ってお茶目。

とりあえず耳たぶをつまんでみる。おお〜、ぷるぷるしてる。さらに引っ張ってみる。あはっ、ギリギリいってる！

「モモグリさん。ものすごく痛いです」

うん、だって痛くしてあげてるんだもん。

「痛いなら回復魔法を使いなさい」

「そんなのないです」

あらま、そりゃ残念。ホ○ミとかケア○みたいなものを実際に見てみたかったのに。

「じゃあ私が痛みを和らげる呪文を唱えてあげる」

「ウソッ！ モモグリさんって普通の人間なのに魔法を使えるの！

回復魔法はないって言ってんのに使えるのもおかしいけど」

「痛い痛い飛んでけ」

「……………」

うん、場の空気が冷めた。

「なんですか今の？」

「呪文」

「……おまじないじゃなくて？」

「ハッ！」

それは盲点だったわ！ あいたー！

「ただ、バリエーションは他にもあるんだからね！」

「ふうん」

「アブラカダブラ……」

「ボクは魔法のランプじゃありません」

「痛みよなくなれ」痛みよなくなれ」

「モモグリさん。気持ち悪いです」

「開けゴマ！」

「傷口がもっと開けとでも？」

「死ねっ！」

「逆にボクのピュアなハートをズタズタに引き裂いてくれる見事な

言葉ですね……」

勝った……！

「ところでクロウ君は何をしてるのかなあ？」

「宿題の日記です。集中してるのでテレビでも見てボクの邪魔をしないでください」

日記ね……。案外小学校みたいな宿題ね。

邪魔をしないでください？ 無理。だってお姉さん、暇なんだから。生意気言ってるじゃないわよ。

「ここは美女である私に任せなさい」

「あっ、ちょっと無理矢理取らないでよ……」

どれどれ……？

12月25日（晴れ）

ボクはモモグリアキコさんという人のお宅に居候させてもらうことになりました。住む所があっさり見つかってよかったです。

モモグリさんは自らのことを『美女』だと言ってます。たしかに美人だと思います。それは認めます。

しかし、性格がおかしいです。どこかバカっぽいです。っていうかバカです。パンケーキにポン酢をかけて

「和風！」

っていうのはどうかと思います。

「こらボケ魔法使い。バカとはなんだバカとは」

「いや、その……。でも前半のくだりは良かったでしょ？」

「『たしかに美人だと思います』でこの私が満足するでも思っているの！ あらまあありえない。お弁当のおかずには鯛焼きをぶち込むぐらいありえないわ。私を絶賛するなら、こう『世界中の誰もがモモグリさんに振り向き、ゆくゆくはハリウッドスターとの電撃結婚を果たし、最終的には歴史の教科書に名前が残るほどの超ウルトラ美女』とでも記述なさい。さあ、書きなさい！」

クロウ君は

「えっっ」

と言ってたけど、ビンタをして黙らせた。そのぐらい書いてくれないじゃないの！ もっと私の素晴らしさを全面的にアピールしなさいっての！

……うん、書いたわね。よしよし、偉い偉い。

——ッ！

このガキめ！ 端っこに小さく『※この日記はフィクションです』とか書いてんじゃないわよ！ それじゃあまるで、本当の私は可愛くないって言ってるようなモンじゃないの！

あゝもう怒った。あんたが寝てる隙を見計らって、鼻に練りワサビを塗りたいくってやるわ。覚悟しなさいよ！

第3話…こんな感じ

ハァーイ、永遠の美女・桃栗秋子でえーす。えっ、調子に乗るな？ ふふっ、まだまだ本当のウザさのうちの三分の一しか出してないよ！

っていうことでね、魔法使いのクロウ君がウチに来てから一週間経ちました。で、クロウ君の住む世界について色々聞いたので発表します。

・マホーツ界

魔法使いと魔女が暮らす世界。安直なネーミングよねえ。他にも妖精や魔物もいるんだって。

ちなみに私達の世界は『人間界』って呼ばれてるらしいよ。

・マホーツ界魔法学校

マホーツ界の子供を立派な魔法使いや魔女に育てる所。

五歳で入学、十五歳で卒業。九年間通学して残りの一年間は人間界で修行するんだって。

・ライト校長

マホーツ界魔法学校の校長先生。ハゲ。

・クロウ君

十四歳の魔法使い見習いの男の子。顔は撫でくりまわしたくなるほど可愛い。蒼い瞳と金髪は生まれつきなんだってさ。

・クロウ君の帽子

とにかくお気に入りなんだって。

・ゴルフクラブ（アイアン）

魔法使いは魔法を使うためには杖を振りかざさないといけないんだって。

別に杖じゃなくてクロウ君みたいにゴルフクラブでも構わない。むしろ何でもいいらしいよ。ポッキーでもいいんだって。

クロウ君が杖の代わりにゴルフクラブを選んだ理由は、いざという時に打撃攻撃もできるからだそうよ。

「ところでクロウ君。どうやってマホーツ界と人間界を行き来してるの？」

「そんなの世界と世界とを結ぶ空間をちよいちいって歪ませればいいだけだよ。と言っても、生徒達のレベルじゃそんな魔法は使いこなせないから、学校の先生方に送ってもらったんだけどね。……はい、晩ご飯ができたよ」

食事当番はクロウ君。麻婆豆腐を作ってたみたいね。主にコンビ弁当で暮らしてきた私にとっては久しぶりのまともな夕食！

「召し上がれ、モモグリさん。ボク特製の『魔あ亡豆腐』だよ」

まあぼうどうふ

食べたなら危なそうな名前ね。もし死んだら来世まで呪ってやる。

でも見た目は普通の麻婆豆腐。ちょっと味見してみましょ。

「……お口に合うかな、モモグリさん？」

「うーむ……」

「どう？ 魔あ亡豆腐ってマホーツ界の料理——ギャッ！ な、な、んでビンタするの！」

「意外にも美味しいから」

「そこは褒めてほしいよ！ 喜んでもらえてるのにビンタされるなんて、なんか悲しいよ！」

別に喜んでないよ。私より年下なのに料理が上手いからちよつとムカついただけ。

第4話：修行を兼ねて

この時私の部屋は静寂に包まれていた。

テーブルに向かい合う私とクロウ君。そして、高くそびえ立つジエンガ……。

私はひとつのブロックに狙いを定めた。平常心を保ちつつ、ゆっくりと手を伸ばす。

……ダメだ、手が震えちゃう。落ち着くんだ私！

「うりゃああッ！」

思い切って勢いよくブロックを引き抜いた！ 抜けた！ よっしやああッ！

ガシャーン。

……バランスを崩したジエンガはあっけなく倒れちゃった……。

「うがーっ！ 悔しいー！」

「モモグリさんはもう少し落ち着いた方がいいよ」

もともとは『集中力をアップさせよう』ということで修行を兼ねて遊んでいたけど、まさかの三連敗。こんな坊主に負けるなんて屈辱！

もう一回勝負をしようと思ったら、クロウ君はジエンガでドミノ倒しをやるうとしていた。私は容赦なくビンタをし、立てられたジエンガは全てなぎ倒した。

「だってモモグリさん弱いんだもん……。それならトランプで神経衰弱をしようよ」

「なんですって？」

「神経衰弱なら記憶力も養えるかもしれないでしょ。それにジエンガより簡単だし」

「いや、私がツツコミたいのは『だってモモグリさん弱いんだもん』」

という無礼なコメントに対してよ。誰が史上最弱のスーパープリンセスだコラァ！」

「スーパープリンセス？　なんかダサっ！　それにそんなこと言うてないし！」

「さあ、神経衰弱をやろうでないかい」

カードを切って床に適当にぶちまけた。

「これに負けた方が晩ご飯の支度をするっていうことでしょうか？」

「いいね。絶対勝つよ」

――五分後、気が付いたら私は台所に立っていた。勝負に負けたのよ、私ともあろうお方が。

クロウ君ってば記憶力どころか勘も良くって、次々とカードをかっさらいんだもん。おかげで六枚しか取れなかったわよ。まったく、大人気ないわよね。

で、クロウ君は

「ドリアが食べたいな」

とかほざいて数学の宿題に取り掛かっています。イジメでしょうか、私はドリアなんか作れないのに。仕方がないからカレーとビンタ三発で納得させます。

第5話：おいでませ妖精さん

疲れた……。今日の仕事場は死ぬほど忙しかった。いつもハイテンションな私でさえ溶けちゃいそうなくらい忙しかったのです。

「たっだいま……。…」

いやあそれにしてもお腹すいたな。クロウ君、美味しいご飯を作ってくれたかな？

台所からグツグツと鍋を煮込む音が聞こえる。いいわね、鍋。この寒い時期にはピッタリの食べ物じゃない。今日のクロウ君は百点満点！

でも、さすがの私でもこれはおかしいと思った。

「ルルルルララ」

鍋に小さな女の子が入って歌っています。サイズはティッシュ箱並みの女の子。髪が青くて背中に羽根が生えています。

これは……！

私は迷わず鍋のフタを閉めた。中からキャーだの出してだの聞こえるけど聞こえないフリをします。うるさい『食材』です。

クロウ君が慌ててやって来ました。トイレに行ってたみたいね。

「モモグリさん！　なんでフタを閉めてるの！」

「よく煮込めるように」

「煮込まないでよ！　死んじゃうから！」

クロウ君は急いで小さな女の子を助けた。

女の子は苦しそうにヒーヒー言ってます。

「貴女がモモグリアキコさん？　あたしを煮込み殺す気なの！」

女の子は私に次々と罵声を浴びせるけど無視。今私は疲労感たっぷりなんだから構ってられないのよ。

「ああモモグリさん。この子はフリージア。ボクの家と一緒に暮らしてた妖精」

ほう、妖精ね。たしかに妖精らしさを兼ね備えた可愛さを持って

るね。

「で、そのフリーダムちゃんはなんで鍋で煮込まれてたの？」

「あたしはフリージア！ 煮込まれてたわけじゃないよ。お風呂に入ってたんだから」

ああ、鍋が浴槽の代わりね。勝手に人の鍋を浴槽として使わないでほしいわね。あとでクロウ君にサソリ固めをプレゼントします。

「クロウからの手紙を見て心配になって来たけど……、貴女すごく心配。クロウをちゃんと世話してくれるのか信用ならないよ」

「クロウ君、実家に手紙を送ってたんだ。ちなみに私のこと何て書いた？」

「美人だけど馬鹿で乱暴な人って書いた」

はい、サソリ固めからキ〇肉バスターにランクアップしました。

「ところでクロウ君。今日の晩ご飯は何か？」

「『エビ魔ヨネーズおにぎり』だよ」

あらま。マヨネーズが毒々しい紫色だわ。

「わあい、魔ヨネーズ大好き！」

フリージアちゃんはマヨラーならぬ魔ヨラーなんだね。満面の笑みでおにぎりを食べてる。

私も食べてみたけどそれなりに美味しかった。

「フリージアちゃんはいつ帰るのかな？ あまり遅いとクロウ君の実家の人達が心配するんじゃないかな？」

「大丈夫大丈夫。泊まるって言ってあるから」

それなら大丈夫ね。

——ってオイ！

「何勝手に泊まろうとしてんの！ あっ、すでにパジャマに着替えているし！」

「おやすみなさい、アキコさん」

「はい、おやすみなさいフリージアちゃん——って寝るな！」

「スー……」

「コラァ！」

まったく、珍しく私がツツコミに回ってるじゃない。仕事で疲れてるからボケる余裕なんかまったくないのよ。

——翌朝、フリージアちゃんは新聞の広告を見えました。

「アキコさん、見て！ 大ヒット映画『Dev・Justice』正義のデブ』のDVDが1980円とかなりの格安で売られているよ！ 通常なら5280円で売られている代物だよ！」

「先着二十名様限定？ フリージアちゃん、急いで買いに行くわよ！」

「ラジャー！」

すっかり仲良くなりました。

第6話：時は既に正月過ぎ

何気にお話の時期はとくにお正月を過ぎて2、3日が経っています。桃栗秋子です。お正月の話はまた別の機会で話すからね。今朝起きたら雪が降っていました。私の地域では初雪だから嬉しくなっちゃって、まだ寝ていたクロウ君を積もった雪の中に放り込みました。清々しい気持ちでした。

「わあ真っ白っ！ アキコさん、雪って綺麗だねえ！」

パジャマ姿のフリージアちゃんも起きてきました。っていうか、この妖精ときたら、なんだかんだでずっと居座り続けてるんだけど、それにしても寒いわねえ。調子に乗ってアイスクリームを五つ食べた時くらい寒い。

「さあさあ二人共、こたつに入っておしるこでも食べようか。今日は私自らが作ったから、残したらお餅を喉に詰まらせるから」

はあぁ。やっぱりこたつは暖かいねえ。こたつis天国！ おしるこも我ながら上出来だわ。ただ、フリージアちゃん。おしるこに魔ヨネーズをぶっかけるのはやめなさい。アンコと混ぜたものすごいダークな色になってるから。

そういえば私、年賀状を書いてなかった。仕事場のお偉い方には書いたけどね。

友人からの年賀状が机の上に積み重なってます。

仕方ない。返事でも書いてやるかな。

「ボクにもハガキを頂戴。ライト校長に年賀状を送りたいんだ」

「はいはい。自由に書きなさい」

クロウ君はペンを走らせる。って、マホーツ界宛の年賀状なんかポストに入れても届かないだろうに。どうやって届けるつもりなんだろう？

それより私は自分の年賀状を書かないと。

友人からの年賀状をざっと拝見させてもらったけど、どれもこれもパソコンで綺麗にプリントされたものばかりだった。

ふん。日本人なら筆で書きなさい筆で。手書きの温かみを表現なさい。

ほら、私みたいに筆で大きく『あけましておめでトウーン』って書けばインパクトが違うでしょインパクトが！

……ふう、書いた書いた。いまだかつてないほどに書いたよ。

疲れた私は寝そべりながらこの前買った『Dev・Justice』正義のデブ』を見てます。頭にはフリージアちゃんに乗っています。

『体脂肪30%？ そんなこと関係ないだろ！ なんてそんなことで別れないといけないんだ！』

『だって貴方、本当の体脂肪は50%だって言うじゃない！ 私を騙したのね！』

『違う、違うんだ！ 俺達が付き合った当初は確かに30%だった。しかし今は50%に増えてしまっただけなんだ！ だから嘘じゃないんだ！』

『じゃあただの高血糖だと言っていたのに、実は糖尿病だったっていうのはどういうことなの！』

『ーッ！ そ、それは……』

『もう丸杉君なんてどうでもいい！ 電車内でシャツのボタンが弾け飛ぶといいのよ！ うわーん！』

『ま、待ってくれ！ 畜生！』

どこが正義なんだか。よくこんな映画が大ヒットしたもんだ。世も末ね。

適当に見終わった所で年賀状を出しに行くことにした。

「クロウ君。年賀状をポストにワープさせる魔法とか使えないの？」

「そんな魔法はないよ。自分自身でポストに入れてくればいいじゃない。あんまり横着していると、今の映画の人みたいにデブるよ」

「私はデブりません。何故ならば昔から絶妙なスタイルを保ち続けてきたからです。それより早く魔法を使えるならさっさと使いなさい」

「だからそんな魔法はないって言ってるのに。もしかして聴覚が優れてないんですブウツ！」

はい、ビンタ。

仕方ないから自分でポストに入れることにした。使えないガキね。それにしても外は寒い。雪が降ってるし。

——あつ、目の前を歩いていたおじさんがすっ転んだ！ その反動で頭に乗っていた黒い何かも吹っ飛んだ。おじさんは尻餅をつきながら坂道を滑り落ちていった。途中で道行く人々をなぎ倒してる。

……あのおじさんには『破壊神』の称号を与えないとね！

第7話：楽しい温泉旅行

「温泉温泉楽しいな〜っと！」

どうもこんにちは。クロウです。今回はボク視点でお送りします。ボクは今モモグリさんの車に乗っています。今モモグリさんが言ったように温泉に向かっています。

なんで温泉に行くことになったのか。それは数日前にさかのぼります……。

商店街で買い物していたモモグリさんは福引き券をもらいました。そして早速福引きをしました。

「クロウ君。福引きで必ず一等賞の景品が貰える魔法を……」

「基本的にモモグリさんに都合の良い魔法はありません」

モモグリさんは福引きをするやつ（あのガラガラ回すやつ）を勢いよく回しました。回しすぎて玉が三個ぐらい出てきました。その中には一等賞である金の玉も混ざっていました。

「いよっしゃあああッ！ 私ってスゲー！」

いや、ダメでしょ。ほら、係員も困ってるし。

「お客様、さすがにこれはちょっと……」

「ああん？」

モモグリさん。ガンを飛ばして脅すのは良くないよ。

「本来なら一回回すだけなんですけど、お客様は何回も回したから……」

「だから何？」

「……一等賞は温泉旅行の宿泊券です……」

係員さんは今にも泣きそうだけど、モモグリさんはそんなのお構いなし。宿泊券を受け取ると神風の如くその場から去った。

運転手は勿論モモグリさん。軽快なハンドルさばきで高速道路を

疾走しています。

「一番桃栗秋子! 『汽車ポッポ』歌います!」

「イエーイ!」

モモグリさんとフリージアはのど自慢大会を開催しています。二人はノリノリです。

「僕らの希望く、そして勇気を乗せく、汽車ポッポのお通りだっはあくん。線路に人影が! いかん、急ブレーキだ! 判断間に合わず爺さんそのまま天への片道切符を頂きましたく」

おいおいその作詞はありえないよー! めちゃくちゃ不謹慎!

「アキコさんってば天才ね! あたしの心に響き渡る歌だったよ!」

「ありがトウソン!」

貴女達は酔っ払ってるんですか? 飲酒運転は罰せられるんだよ。

「二番フリージア。『黄昏フォーエバー』私の彼は糸こんにゃくく』を歌わせていただきます!」

「いよっ! 待ってました!」

早く終わってほしい……。

しかしのと自慢はボクの予想に反して約三時間にわたって続けられた。

旅館に着きました。『^{げぼおんせん}下暮温泉』と書いた立派な看板が目立ちます。なんだか気持ちの悪いネーミングです。下呂に對抗したいのでしょうか? 是非とも対抗してほしくなかったです。

「Do not move! (動くな!) Throw away arms! (武器を捨てろ!)」モモグリさん。貴女はどっかの特殊部隊の兵隊さんですか? 旅館の女将さんがものすごい勢いで引いてるよ。

「なあんちゃって……。予約した桃栗秋子ですう」
今更可愛こぶって舌を出してもダメだよ。完全に女将さんは冷たい視線で見てるもん。

ボクらが泊まる部屋にやって来ました。広い畳の部屋です。

モモグリさんは早速ゴロゴロしました。ずっと運転をしていたから疲れたんでしょう。

「うひーっ」

と奇声を発しながらフリージアに地獄車を仕掛けています。

窓から見る景色はそりやもう絶景で、緑が生い茂った山と陽の光に反射して輝く海が見えました。満足です。

振り向くとモモグリさんはちゃっかりと浴衣に着替えていました。行動が早いです。

「露天風呂があるらしいよ。私の胸の高鳴りは絶頂を迎えているわ。いざお風呂へ！」

モモグリさんは先陣をきりました。そんなに焦らなくなってお風呂は逃げないよ。

「こ、これは……！」

「そんな馬鹿な……。こんなことがあってもいいのだろうか？」

モモグリさんとフリージアは目の前に叩きつけられた現実に困惑している様子。なんとお風呂場には『清掃中』の文字が……。

だけど彼女達はめげなかった。

「こうなったら卓球よ！ 卓球で爽やかな汗をかき、気が付いたら清掃ぐらい終わっている筈よ！」

「ナイスアイデア、アキコさん！」

運転で疲れてるんじゃないの？

卓球は凄まじいものになった。

「覚悟クロウ君！ 必殺『あのお笑い芸人は、今……！』」

「ほげえっ！」

技のネーミングはともかく鋭いスマッシュだ。ボクは今のところ一点も取れていない。

それよりもっと凄いのは、モモグリさんはさっきからラケットの

側面で打っている。かなりの神業だ。

「どうしたよクロウ君。どうやらチミではこの私にかなわないようだねえ。くっくくく……」

くそっ、うざったい！ 卓球が上手くなる魔法でもあれば……。
結局ボクは一点も取れずに負けた。

「ふふっ。所詮そのゴミのような戦闘力では私に及ばないのだよ」
口調が本当にうざったいです。イライラします。それを察したのか、モモグリさんにビンタされました。ごめんなさい。

「次い！ フリージアかかってこいやあ！」

「いくぜアキコ！ あたしゃ負けへんでー！」
あんたら何キャラですか。

「秘技『狂牛病が流行った時期にステーキを食べた私』！」

「なんの！ 奥義『フレンドパークをフレンドリーパークと言っちゃう貴方』！」

ドガシャーン！

……っておいおい。効果音が明らかにおかしいよ。卓球じゃないの？ よくわからないけどハイレベルな戦いということだけは理解できるけど。

「秘奥義『電気を大切にね。いいとも〜』！」

チュイーン！

「それなら禁術『カップ麺を食べると必ずむせる彼氏』！」

ガキイインッ！

「キャーッ！」

なんで今の技でモモグリさんが吹き飛ぶの！ しかも口から血い

吹いてるし！ 変人だ！ ……あ、ごめん。変人だということは出会った時からわかった。

「フリージア……。おぬし、ついにこのワシを上回ったか……。もうそなたに教えることは何もないな……。これで安心して死ねるものよ……」

「そんな、アキコ先生！ まだ先生から教わることはたくさんあります！ まだ死なないで！」

……さて、そろそろ清掃は終わったかな……。あんな猿芝居に構ってられない。

まだお風呂場には誰もいなかった。広い浴槽にボク一人だけ。

凄い。部屋の窓から見たのと同じくらい綺麗な景色が目の前に広がる。ボクの心は癒やされた。

「フリージアちゃん、綺麗だね！ ザ・絶景よ！」

「是非とも写真におさめたいね！」

……隣は女風呂なんだ。二人のやかましい会話が、絶景に夢中になっているボクを邪魔する。

「いやあアキコさん。お風呂の中で泳いでいいの？」

子供かよ。

「しかもバタフライで」

プロフェッショナル！

まあ二人のことは放っておいて、ボクは体を洗うことにした。

「それにしても本当に綺麗ねえ」

「本当だねえ」

再び景色を見始めたか。

「綺麗ねえ、クロウ君の身体」

……………。

ええーっ！

「ちよっ……何見てんの！」

柵から身を乗り出してボクのことを見ているモモグリさん。フリ

ージアは羽根をはばたかせて空を飛んでいる。ボクは手元のタオルで必死に体を隠した。

「あんた男のくせにお肌すべすべじゃないの。お姉さん、嫉妬しちゃうわあ」

「あたし達、景色を見るのに飽きちゃって。暇だからクロウでも覗きに行くかって話になったの」

二人を追い払うためにシャワーを振りかざして火の玉を飛ばした。でもフリージアがバリアを張ってボクの魔法を防いだ。

「はっはっはー！ クロウの魔法なんかアオミドロ並みよ！」

「さあクロウ君。私達を気にせず体を洗いなさい」

「気にするよ！ 恥ずかしいよ！ 顔が赤くなっているっていうのが自分でわかるよ！」

「おおっ！ なに写メール撮ってるの！ ピロリ〜ンじゃないよ！ 逆セクハラだよ！ っていうかお風呂に携帯電話を持ち込むなよ！」

「はっはっは。後で私のショタコンな友達に送ってやるか。クロウ君よ、感想を楽しみに待っておるがいい」

「ほっほっほ。お主もワルよのうアキコ」

「いえいえ。そんなことないですよフリージア殿」

二人は時代劇ゴッコをしながら戻った。

人の裸を晒すなんて酷いです。あんまりです。後でガツンと言ってやります。

第8話：楽しかった温泉旅行

ガツンと言ったらいつものようにビンタをされたクロウです。訴えれば勝てます。

さて、露天風呂で充実な時間を過ごした……のはモモグリさんとフリージアだけで、ボクはすっかり萎えてます。とにかくお風呂上がりのボク達を待っていたのは豪華な夕食でした。

船盛りやカニ、山菜などが綺麗に盛り付けられていて食欲をそそります。

しかしモモグリさんはわがままを言います。

「風呂上がりといったらコーヒー牛乳だろうが！ コーヒー牛乳を出せ！ 瓶で！」

無茶苦茶を言います。頼むから大人しくしてほしいです。

でも仲居さんは愛想良くコーヒー牛乳を持ってきてくれました。良い人です。いや、仕事だから当たり前か。ご苦労様です。

モモグリさんは腰に手を当てコーヒー牛乳を一気飲み。オヤジか。そしてやっと豪華な食事に手をつけました。幸せそうな表情で次々とたいらげていきます。

ボクも食べるか。

もぐもぐ……。

う……美味い！ こりゃあ美味いぞ！ こんな食べたことないよ！

「クロウ君、あゝんして」

モモグリさんが甘い声でカニを差し出してきた。

これを食べさせるとでも？ そんな恥ずかしいことできないよ。

「あゝん、して？」

「……………」

やなこった。色気たっぷりに見つめても無駄だよ。絶対に何か企んでいるでしょ。

「口開けてよ」

断固として拒否させていただきま——

「ぎにゃあああっ！」

痺れを切らしたモモグリさんは熱々の汁物をボクの顔にかけた。
熱い、火傷しちゃう！　なのにモモグリさんとフリージアは爆笑している。ボクはリアクション芸人じゃないんだよ！

ボクは箸を振りかざして火の玉を飛ばした。しかしモモグリさんは近くにあったお皿で器用にガードした。

「甘いね。キャラメルポップコーン並みに甘いよ……」
「ただだよ。」

夜も更けてみんな眠たくなりました。あくびをしながら布団の上に転がります。

モモグリさんとフリージアは一緒に寝るそうです。フリージアが潰れそうで心配です。

ボクはモモグリさんから二メートル離れた所で寝ることにしました。近くにいたら何されるかわかったもんじゃないやありません。

ふわぁぁ……。

今日はいろいろあって疲れたよ。おやすみなさい……。

……………。

……………。

……………。

もそっ。

……………。

——ッ！

「モモグリさん！ 人の布団で何してんの！」

「ん？ 寝相が悪くってねえ、あっはっは」

二メートル離れてんのに寝相で寄れるかつつの。明らかに故意でしょ。人の布団の中に入るのはやめていただきたい。

邪魔が入ったけど、早く寝よう……。

……………。

……………。

「むかしむかし、ある所に……」

えっ、いきなり昔話？ やめてよモモグリさん。

「桃太郎がいました」

お爺さんとお婆さんは？

「ある日桃太郎が川で洗濯をしていると、大きな桃がどんぶらこどんぶらここと流れてくるではありませんか」

順序がおかしい。

「桃太郎は桃を拾いました。しかしそれは桃ではなく、お爺さんのケツだったのです」

水死体……！

「お爺さんのケツは張りがよく、ツヤもよくて弾力性もありました。桃と見間違える筈です」

アホだ。

「桃太郎は決意しました。お爺さんを殺した犯人を絶対に捜すと……」

ミステリーとかサスペンスかい？

「……飽きた」

ええーっ！ 最後までやろうよ！

「しりとりをしよう」

急に言うね。

「私からね。『りんご』」

「……『ごま』」

「『マグロ』」

「『ロバ』」

「『馬鹿クロウ』」

悪口かよ。

「『海』」

「『みつともないクロウ』」

……………。シカト。

「『うなぎ』」

「『ぎりぎりアウトなクロウ』」

え、なにが？

「『占い』」

「『いい加減魔法の修行をやってほしいクロウ』」

やっています！ モモグリさんが仕事に行ってる間にやっています！

「『美しい』」

「『それは桃栗秋子』」

しりとりしてねーよ！

うおっ、睨んでる。怖いから黙っておこう。

「『小悪魔』」

「『私』」

馬鹿か。

もう寝よう……。

「おいクロウ君。次は『し』だよ。おい？」

翌朝、何故かモモグリさんは窓の前で仁王立ちをしていました。

「この清々しい朝。私は野に咲く花のように朝日を浴びて今日も生きる……！」

ごめん、今日は雨ですよ。

ちなみに一泊二日の予定だったので今日帰ります。

女将さんに見送られて車で出発しました。

「いやあ、良い旅館だったわねえ」

「うん。料理は美味しかったし、お風呂も気持ち良かったし……」

あとはモモグリさんにいじめられなかったら最高だったのにな……。

高速道路に入りました。最初は順調に進んでいたけど渋滞に巻き込まれてしまいました。三十分待ちらしいです。フリージアは待ち疲れて眠ってしまいました。

「クロウ君。前の車を一気に吹き飛ばす魔法って――」

「勿論ありません」

いくら待っても渋滞は解消されません。おまけに外は雨。気が滅入るなあ……。

自然と会話もなくなりました。モモグリさんといえどさすがにイライラしているようです。さっきから貧乏揺すりをして落ち着きがないです。

「……早くしないと漏れるじゃない……」

トイレでした。

しばらく経ってなんとか渋滞から脱出したモモグリさんはパーキングエリアへ急ぎます。

「モモグリさん。事故だけは起こさないでね。雨でタイヤが滑るから気を付けないと……」

「そんなの百も承知よ！ でもトイレにすぐ行きたいからぶっ飛ばすのよ！」

その表情はいつになく真剣です。

その甲斐があって手遅れになる前に到着しました。

駐車する際に隣の車とぶつかりましたがそんななお構いなしにト

イレへ直行しました。忙しい人です。

車内にはボク一人。フリージアはまだ眠ってます。とりあえず暇なので外を眺めてました。すると、車をぶつけられた人がやって来ました。

「おい小僧。ちょっとツラ貸せや」

悲しいことにヤンキーの人でした。

「どうしてくれんだよ。俺の愛車が傷ついちゃったじゃねーか」

確かに酷い傷。でもモモグリさんの車はもっと酷い。だってあちこち凹んじゃってるもん。

「ムシヤクシャするからテメェも車と同じ目にあわせてやる」

そう言われると車内から引きずり出されたボク。きっとこれから思う存分に殴る蹴るの暴行を加えられるに違いありません。

でもボクは痛い目にいたくありません。悪いのはこっちなんだけど返り討ちにしてやりたいと思いま――

「はううっ!」

いきなり先制のボディブローをくらいました。痛いです。

続けてジャブだのアッパーだのいろいろくらいました。もう我慢なりません。怒りました。

魔法を使いたいけどゴルフクラブは車内に置きっぱなしです。しかし運良く割り箸が捨ててあったのでそれを代わりに使うことにしました。

割り箸を軽く一振りするとヤンキーは五メートルほど吹き飛びました。車を吹き飛ばすのはさすがに無理だけど、人を吹き飛ばすぐらいはできます。

さらに割り箸を一振り。今度は火の玉がヤンキーを襲います。火の玉はヤンキーの頭を通過し、髪型がチリチリヘアーになりました。

「ば……化け物かよ! ひええーっ!」

ヤンキーは情けない声を出しながら車に乗って逃げました。

……イテテ。傷口に雨水が当たってじんわり痛い。おまけに服も濡れてしまった。

ちょうどその時モモグリさんが戻ってきました。

「なんかジャガイモとベーコンを串に刺したジャガバーっていうのが売ってたから買ってきたよ！　で、なんでクロウ君は傷だらけで雨に濡れてるわけ？」

貴女のせいですよ……。

この後モモグリさんは間違った所から高速道路を下りてしまい、挙げ句の果てには道に迷ったので、家に着いたのは真夜中でした。

第9話…クロウの天敵

「モモグリさん。ここがモモグリさんのお友達の家？」

「そーよ」

今日はクロウ君を連れて私の友達の家に来ました。ちなみにフリージャちゃんは他の人に見つからないようにクロウ君の帽子の中にいます（中からでも外の様子が伺える魔法をかけてあるらしい）。やって来たのはウチのアパートと同じくらいボロっちい別のアパート。名前は『今にも崩れ荘』。最悪ね。

『塩田紺^{しおだこん}』と書かれた表札の前に来て扉を軽くノック。

「紺ちゃん。桃栗秋子だよ」

中から猪が走るかのような足音と共に扉が開きました。現れたのは髪型を縦カールにした見た目お嬢様です。彼女が塩田紺ちゃんです。

「待ったわよ秋子！ 待ち時間の三十分が十年間に感じたわ！」

「そりゃゴメンね。それより……ホラ！」

私はクロウ君を前に引っ張り出した。クロウ君は目をパチクリさせて紺ちゃんを見えています。

「あ、はじめまして。ボクがクロウです。貴女がシオダさんです…

…よね？」

「あ……あわわ……！」

クロウ君は奇妙な物を見るような目で紺ちゃんを見えます。だって紺ちゃんったらものすごく震えてるんだもん。こりゃあすぐにでも覚醒しそうね。

「このコ、超カワイイんだけどー！」

「ひ、ひゃーっ！」

やっぱり予想通り。クロウ君は部屋の中に拉致されました。

改めて彼女の紹介をします。

塩田紺ちゃん。私と同じスーパーで働いています。ちなみに紺ち

やんの方が一つ年上。無類のシヨタコン。

ここに来た目的はただ一つ。クロウ君を連れて来ること。

温泉に行った時クロウ君のヌード写真を撮ったでしょ？ あれを彼女に見せたらクロウ君をすごく気に入ったらしくてね、実際に会ってみたいって言ってきたの。

もちろん私はOK。クロウ君に拒否権はないわ。

それにしてもあの様子じゃ予想以上にクロウ君を気に入ったみたいね。さっきからキヤーキヤーうるさいもん。良いことしたな、私……！

「蒼い瞳。綺麗な金髪。可愛い顔。思わず頬ずりしたくなっちゃう」

「いやあー！ このバカ女、クロウに何してんのよー！」

あらあら。紺ちゃんとフリージアちゃんが言い争ってる。見てて面白いわあ。

「シオダのお姉さん、抱き締める力が強すぎて……ボク、息ができない……」

「お姉さんですって！ クロウ君、もっとお姉さんって言うてちょうだい！ さあさあさあさあさあ！」

「ぐええ……。助けてフリージア……」

「クロウーっ！ しっかりしてよー！」

ありゃりゃ。このままじゃさすがにクロウ君は窒息死しちゃうわね。優しい私はクロウ君と紺ちゃんを引き剥がしました。

ちなみに紺ちゃんは腐女子とかいうやつで、シヨタコンの他にも男性同士の恋愛モノ、つまりボーイズラブが好きだったりします。私にはその考えが理解できないけど、本人が好きだと言ってるからあまり気にしないでいます。

「いいなあいいなあ秋子。こんなに可愛い男の子と暮らせるなんて。羨ましいいったら羨ましい」

「欲しいならあげるよ？」

「モモグリさあーん！」

「はっはっは。冗談に決まってるじゃないの」

クロウ君は本気で焦ってた。そんなに嫌か、紺ちゃんが。一方紺ちゃんはガツカリしている様子。

「じゃあせめて一泊していきなよ！　クロウ君だけでもいいからさ！」

「……だってさクロウ君。泊まるなら明日迎えに来るけどどうする？」

「やだやだやだ絶対やだ。ここに泊まるぐらいならモモグリスさんの暴力に耐えていた方が数万倍マシだよ……」

「紺ちゃん。楽しい夜を過ごすといいわ」

「モモグリスぁーん！」

だから冗談だって。そんなに泣きそうな顔をするほど嫌がらなくても……。

「それにしても秋子。なかなか高性能な人形を持ってるじゃない」

「人形？」

「ほら、コレ」

それはフリージアちゃんよ。

「あたしは人形じゃなくて妖精よ！　まあ確かに小人形さんみたく可愛いけども！」

「どこの会社のフィギュア？　私も欲しいな」

「あたしの話聞いてた？」

日はすっかり沈みました。そろそろ帰りたいと思います。

紺ちゃんはクロウ君との別れを惜しんでいたけど、当のクロウ君はやっと帰れるのかと思ってホッと溜め息をついています。

「秋子、またクロウ君と一緒に遊びに来てよ。なんならクロウ君一人だけでもいいけど……」

「謹んでお断り致します」

「じゃ、また仕事場で会いましょ、紺ちゃん」

「はいはい。またねー」

んゝ疲れたけど楽しかった！

でも一つ納得いかないのが、今日は私がほとんどボケてないこと。
ハイテンションな紺ちゃんに持ってかれたなあ。

第10話..クロウ、携帯電話を買う

ある日フリージアちゃんはマホーツ界へと帰りました。私にならクロウ君を任せられると安心したようです。

「どこが安心できるんだろう。毎日ボクにビンタをしてるのヒギヤッ！」

またいつか遊びに来るそうです。またね、フリージアちゃん。

さて、私とクロウ君は携帯ショップにやって来ました。クロウ君に携帯電話を買ってあげるためです。もしもの時のために通信手段は持っていた方がいいでしょ。やだあ、私ったら優しい〜！ んっ、キモいって？ ふふっ、既に自覚済み！

ソコモにヘイユーにソフトバンク……いろいろあるわね。あ、ちなみにこれは携帯の会社の名前ね。私はヘイユーにしてるのよね〜。「クロウ君。どれにする？ 言っておくけど高いやつにしたら大根で殴り殺すからね」

「モモグリさんなら本気で実行しそうで怖い！」

ふふっ、クロウ君たら無難に0円の古い機種を眺めてる。別に数千円ぐらいなら出すのにねえ。

「決まった？」

「ん〜、これかな……」

クロウ君が選んだのはヘイユーのちよつと古い機種。色はシルバーで数千円の物。まあいいんじゃないかな。

……契約完了。クロウ君は嬉しそうに携帯電話を握ってます。アドレスはまだ私のしか入れてません。

クロウ君のメールアドレスは『momoguri.beautifulwoman@tzw.ne.jp』です。私が決めてあげました。

(※勿論実際にメールは送れません)

そういえばクロウ君って友達はどうしたんだろう？ クロウ君と同じように日本のどこかにいる筈だよね。

……まっ、いいか。

「クロウ君。私以外の人のアドレス知りたい？」

「うん」

「そうかそうか。じゃあ送ってあげよう。あと電話番号も」

クロウ君はとても喜んでいます。この幸せな気分がいつまで続くことやら……。

「これ、誰のアドレス？」

「電話してみな。相手には私から了承を得ているから大丈夫」
早速電話をかけたようです。

トゥルルル……。

「もしもし、クロウですけどどちら様で——」

『キャークロウ君だ〜！ 私超感激な——』

プツッ！

プー、プー……。

はい、紺ちゃんの連絡先でした。

「モモグリさん、これはヤバいって本当に。毎朝毎晩電話がかかってきそうじゃない」

「私もそう思う」

「真面目に言うけど、きっとノイローゼになって死んじゃうよ……」
「ご愁傷様」

クロウ君はチーンという効果音が聞こえそうなほど落ち込んでいます。

トゥルルル……。

「早速来たーっ！」

クロウ君は携帯を見ただけでビビってます。今にも泣きそうな顔をしています。とりあえず代わりに私が出てあげました。

『ク・ロ・ウ・くうくん！ 今夜はウチで食事でもいいかが？』

「それじゃあ特上のお寿司でもおごってちょうだい」

『……あら、秋子なの。クロウ君を出しなさいよ。あのプリティーボイスが聞きたいの。毎朝毎晩聞きたいわあ』

やっぱり。

「ほどぼどにしなよ。クロウ君、ノイローゼになっちゃうから」

『わかってますよーだ。それにしても秋子、なんかクロウ君に対して優しいね』

「そう？ 奴隷が使いモノにならなくなるのが嫌なだけなんだけどね」

クロウ君がギョツとしてる。軽い冗談だったの。

『クロウ君と一緒に買い物なんていいなあ。だったら私も誘ってくれれば——』

プツッ！

プー、プー……。

「クロウ君。なんだったら着信拒否してもいいわよ」

「それは最後の手段にしておく」

その後は適当に映画を見たりレストランに行ったりして過ごしました。たまには普通にのんびりするのもいいね。

「今日のモモグリさんは優しいね」

「そうかな？」

「あまり暴力を振るわないし」

「そりゃあ外でビンタなんかしたら道行く男性達に『あの人は見た

目は美人なのに、実は魔性の女なのか!』って勘違いされるじゃない」

「あ、そうなんだ……」

「私はいつだって『美人で可愛くて頼りになって愛おしくてずっと側にいてほしい彼女ランキング』の第一位に君臨してたいのよ」

(意味不明だよ……)

「さあさあ、そろそろ帰ろうか。急がないと『激闘! 殺意芽生える田中刑事のコロシウム〜近所の駄菓子屋巡り編〜』が始まっちゃうよ」

「刑事さんがコロシウムとかやっちゃダメでしょ。しかもサブタイトルがほのぼのしてるし」

トゥルルル……。

「モモグリさん、非通知だ。誰だろう?」

「さあ? 出てみたら?」

「うん。……もしもし?」

『クロウくん! 今からそっちに行ってもいい?』

「シオダのお姉さんだーッ!」

第11話：桃栗秋子と家庭訪問

ある日クロウ君が、

「ポストに手紙が入ってたよ」

と言いながらトテトテと走ってきました。

「あらあら誰からかな？ 無駄な勧誘のやつだったら捨てていいよ」

「学校からだよ」

学校って……クロウ君が通ってるマホーツ界魔法学校だよ。一体何の用なんだろう？

——ハッ！ まさかクロウ君が何か悪いことをしたとか！ そりゃお姉さんとしては許せないわよ。つまようじで刺してやろうかしら。

……っていうのはまったくの見当違いでした。

桃栗秋子様へ。

どうもご無沙汰しております。校長のライトです。

突然ですが家庭訪問を実施したいと思います。日頃のクロウの頑張りを報告していただきたいのです。

都合のいい日をこの手紙の余白に書いてください。後ほど確認に参りますので。

家庭訪問ね。なかなか興味深いじゃない。

都合のいい日は……。今週の土曜日かな。余白に書くんだよね。

——はい、書いた。

「今週の土曜日ですね！ わかりましたー！」

誰！ いつの間にか黒ずくめの見知らぬ男が部屋に突っ立っていました。

「ああ、そんなに驚かなくても大丈夫。この人は配達屋さんのパットさんだよ」

「配達屋さん？ 隠密とかじゃなくて？」

「手紙とか荷物を届けてくれる人。とりあえず手に持ったその長ネギは置いた方がいいよ」

ふむ、どうやら危ない人じゃないみたいね。強盗だったらネギで気絶させようかと思ったんだけど。痛いよ、ネギって。

「どうもはじめまして。ワタクシ、パットと申します。以後、よろしくお願い致します。では、ワタクシはこのことをライト校長に伝えて参りますんで、これにて失礼します」

そう言うパットさんは一瞬でいなくなりました。

「っていうかクロウ君。あいつ、不法侵入してない？」

そしてあつという間に土曜日になりました。

みっともなく見られないように部屋は片付けたし、私はより一層美しく見られるようエステに行きました。よし、パーフェクトウ！
あとは先生が来るのを待つのみ！ あ、ちなみにクロウ君の担任のカンムっていう先生が来るんだって。

ふふふ、来なさい来なさいカンムとやら。私の素晴らしさを存分に教えてやるわ！

ピンポーン。

「モモグリさん……」

「うむ。どうやら敵がおいでなすったようだな。出陣するか！」

「武将ですか？」

扉を開けました。そこにいたのは眼鏡をかけた見た目三十歳いく

かいかないかの若さの男性でした。

「……カンムです」

それだけ言うと黙って家に入りました。私の第一印象。こいつ暗いです。死んだような目をしてるし。

「……………」

「……………」

黙ったままお茶をすすっています。私はやるせないです。

普段ならハイテンションに話を進めていくけど、相手は先生だから一応にもちゃんとした話をしないといけないよね。私にだってそのぐらいの常識はあるわよ。

「……………」

「……………」

うわぁ、絡みづらいわこの先生。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………うぶばっ！」

カンム先生、お茶を飲みながらいきなりむせた。

「……カンム先生？」

「……………。……茶が喉の変な器官に入った……」

よくあるよ、それ！

「……………」

再びお茶を飲むカンム先生。

そういえばさっきから気になっていたけど、先生のお茶の飲み方がおかしいのよ。唇を尖らせてチビチビとお茶を飲んでるのよ。

「……………」

うわぁ、すごいチビチビ飲んでるわ。ひよこみたいな唇してるわこいつ。見ていて笑いそうになるんだけど。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………うぎゅふっ！」

またむせた！　むせすぎじゃないの！　口の横からお茶が垂れてるし。

「さて、クロウ君はどうですか？」

あ、やっと話が進んだ。でも口の横からお茶が垂れてる。

「彼なりに頑張っているようです」

「そうですか。ま、別に興味ありませんけど……」
え。

「それだけ聞ければ他に用はありません。では失礼します」

「ちよっ……！　家庭訪問ってそんな適当でいいの？」

「……ええ」

「もうちよっと見るべき所があるでしょうが！」

私はくるりと一回回りました。私のエステで磨き上げた美しさをアピールしました。さあ、『桃栗秋子さんって美しい方ですね』って言いなさい！

「……………」

ちよっと、何黙ってんのよ。なんか言ってよ。

「……桃栗さん」

おっ、きたきた！

「はいはい、何かな！」

「もう一杯お茶を頂けないでしょうか？」

……………。

ほう、そうきたか……。

「はい、どうぞ」

そして可愛らしくスマイル！　どうよ、キュンときたでしょ？

「……………」

無視かい。無視かいあんだ。

「……………ばぶりゅふふッ！」

吹くなや！　汚いわよ！

だけどグツと堪える私。私ってオ・ト・ナ！

「カラム先生、おしほりです」

「……どうも」

そしてまたお茶を飲む。

「……………ぶえつくしょんッ！」

「帰れ貴様ハゲ眼鏡でめえコノヤロー！」

……………。

……ハッ！ 私としたことがついはいしたないことを！

「いや、先生その……。今のは冗談なわけです……」

「ほほう……。この私に向かってハゲ眼鏡でめえコノヤロー、略して『ハロー』だと……！」

挨拶じゃないのそれ。

「……………まあ許すけど」

あっさりと！ この私をビビらすんじゃないわよ！

「とりあえずもう一杯おかわりを……」

「帰れ」

第12話..お正月

お正月の話です。

「んむ」

私とクロウ君はおしるこを食べています。

「クロウ君。きなこ餅も食べたいなあ」

「これ食べ終わったら作ってあげる」

それにしても暇。テレビは見飽きたし、他にやることもないし…

「クロウ君。初詣にでも行こうか」

ということで、近くの神社にやって来ました。既にたくさんの人で賑わっています。

「モモグリさん……。なんでそんなにおめかししてるの?」

「私プラス着物イコールヤマトナデシコという簡単な計算結果からよ。これで男性の一人ぐらい寄ってくる筈!」

「そうかな……」

……お。

ほらほら、早速一人私に近付いてきたじゃない。年の初めに彼氏をゲット! ビバ、ヤマトナデシコ!

「世界の恵まれない子供達に救いの手を! 募金してただけませんか?」

ボランティア活動かい!

でも地球に優しい私はふんぱつして二千円札を寄付するのです。今時二千円札ってレアじゃない?

とりあえずお参りでもすることにした。

お賽銭(ふんぱつして五百円)を入れて、パンパンツ! と。

今年こそ、今年こそ素晴らしい出会いがありますように……。本当に頼むよ神様。八年間同じことを願ってんだからいいかげん叶え

てよね。

「さて、クロウ君は何をお願いした？」

「立派な魔法使いになれるようになってお願いしたよ」

普通ね。っていうかダメね。そこは『モモグリさんがより美しくなりますように』って願わないと罰が当たるわよ。

「モモグリさん。くじ引きがあるよ。今年の運勢を占ってもらおうよ」

「ふっ……。そんな結果がわかりきっているものをわざわざやる必要はないわ。でもどうしてもやりたいと言うなら『優しくて美人』の私が代金を支払ってあげるわ」

「優しくて美人を強調しなくていいです。でもありがとう」
クロウ君はくじ引きの棒を引きました。そして紙を受け取りました。

「なんて書いてあった？」

「うーん……」

私は紙を見せてもらいました。

どれどれ……？

『微妙』

……………。

こんなのアリなの？ さすがの私もびびったわよ。

「今度は私がやる」

『微妙』なんて言わせない。『超大吉』とか出なさい！

とりゃあぁっ！

『無理』

なにが！

この野郎め。私のなにが『無理』だったのよ。出会うのが『無理』

なの？

もう一回やってやるわ！

『また来年頑張ろう』

コラくじ引き！ 私を見放すな！
もう一回！

『ピョン吉』

ナメてんのかくじ引きめーっ！

「落ち着きなよモモグリさん。……あ、お守りが売ってるよ」

「あらま。じゃあお守りでも買おうか。くじ引きはダメダメだし」

ふんふん。交通安全に、受験生専用のものに、恋愛が上手くいくものに――買ったあ！

ふははは！ これで今年こそ彼氏ができるってもんよ！

「さあて、そろそろ行こうか。帰りにドーナツでも買っていいこうか」

「なんでドーナツ？」

「『円（縁）がありますように』って」

「う、うーん。それは上手い例えなのかな？」

それはそうと、今年もよろしく！

第13話：隣のお兄さん

「おい、その魔法使いハットの少年」

こんにちは、クロウです。

今買^{バシリ}い物から帰ってきて玄関の扉を開けようとした瞬間、ボクは見知らぬ爽やか系のかっこいいお兄さんに声をかけられました。

「なんですか？」

「お前、そこに住んでる奴の家族か何か？ 最近よく見かけるけど」

「違いますよ。ただの居候です」

「だよな。お前金髪だしけっこう美形だし、それにあいつに似てない！」

「は、はあ……。じゃあボクはこれで——」

「ああ、ちよい待て。これ分けてやるよ」

そしてお兄さんからカカオが99%含まれているチョコレートをもらいました。

「えっと……？」

「じゃ、桃栗によろしく言っというて」

そう言うとお兄さんは隣の部屋へ入っていきました。どうやら隣人さんみたいです。

『沢屋^{さわやかずお}和夫』。表札に書いてありました。

「和夫に会ったって？ で、このチョコレートをもらった？」

モモグリさんはカカオ99%を握り拳でグチャグチャに潰しています。ココアに混ぜて飲むつもりらしいです。

「嫌がらせかしら。カカオが99%なだけあってすごく美味しくないの、これ。だから何かに混ぜるしかないよね」

「サワヤさんってなかなかかっこいいと思うよ。モモグリさん、サワヤさんと付き合えばいいのに」

「やーよ。だってタイプじゃないんだもん」

モモグリさんはカカオ99%の上からシュガーを二袋ぶっかけています。念には念を入れて甘くしているらしいです。

「そんなに和夫がかっこいいと思うなら、クロウ君が付き合えばいいでしょ。意外とお似合いかもよ」

「やだよ。ボクは異性と付き合いたい」

「ふうん……。クラスメートに好きな女の子でもいるのかな？」

「いないよー！」

「照れるな照れるな。お姉さんはいつでもキミの味方だからねっ」
「ならないよ。逆に不安だよ。」

そしてモモグリさんはポーシヨンミルクをさらに三個くらい入れていた。

「ハッ！ まさかクロウ君……。わ、私のことが好きなんじゃないでしょうねっ！」

何故ッ！ そんなこと一ミリも、一ヨクトも思っていないよ！ あ、ヨクトってのは十のマイナス二十四乗のことね。

「まあその気持ち、痛いほどよくわかるよ。なにせ麗しき美女である私と同棲してるんだもんね。そりゃあ思春期の男の子の性欲を駆り立てるわけよね」

駆り立ててませんから。妄想はやめてください。今のモモグリさんはまるでシオダのお姉さんみたいです。

「ところでサワヤさんって何をしてる人なの？」

「ん？ 確か……スポーツのインストラクターだったかな。この近くのスポーツジムで教えてるって言ってた気がする。近所のおばさん達曰わく、なかなか教えるのが上手くて、それでいてかっこいいって評判らしいけど……」

ピンポーン。

おや、誰か来たみたいだ。

「クロウ君。私の代わりに出て」

「なんでよ」

「面倒だから」

「……………」

反論するとまたビンタされるので嫌々玄関へ向かいました。

「おっ、魔法使いハットの少年！ 桃栗はいる？」

サワヤさんでした。片手にはクーラーボックスを持っています。

「それは？」

「ああ、『ハタハタ』だよ」

「『ハタハタ』……ってなに？」

「魚だよ。秋田の田舎の両親がたくさん送ってきたからさ、桃栗と酒を飲みながら食べようかなあと思って。で、桃栗はいるか？」

「うん、いるよ」

「そんじゃあ邪魔するわ」

サワヤさんは鼻歌を歌いながら部屋に入っていました。モモグリさんの

「か、和夫！」

という驚きの声が聞こえます。やっぱり了承を得てから招き入れるべきだったな。

でも十分後には仲良く『ハタハタ』を食べていました。

「和夫あ、いいモン持ってきてくれたじゃないの！ あゝ美味しい！」

「まだたくさんあるからさ、どんどん食えよ」

ボクも『ハタハタ』を食べてみたけれど、独特の味がしてあまり好きになれなかった。特に卵はネトネトと痰たんみたいな食感がして嫌だった。

……でも、まあ、好きな人にはたまらない魚なんだろう。現にこうしてモモグリさんとサワヤさんは美味しそうに食べているし。

「あ、桃栗。そのうち時間空いてる？ 新潟にスキーでもしに行か

ねえか？」

「スキー？ あゝ、私最後にやったの高校一年の時だなあ。懐かしいわあ。でもあんたの予定こそ大丈夫なの？」

「なんとかなるから大丈夫。なあ、行こうぜ。……ほら、クロウだっけ？ クロウもスキーやりたいだろ？」

「へっ？ ま、まあ……」

本当はスキーってあまり好きじゃないんだよね。ボク、こういう滑る系のスポーツは苦手なんだ。だけどなんとなくサワヤさんに話を合わせてみた。だってすぐスキーをやりたいそうだから。

「んゝ、せっかくだけど遠慮しとく。また今度誘って」

「そっか。ま、仕方ないよな。それよりもっと食おうぜ」

顔は笑っているけどどこか寂しそうに見えた。本当にスキーをやりたかったんだね。

『ハタハタ』を食べ尽くしてお酒も飲んだ後、サワヤさんは自分の部屋へ帰りました。

「いやあ美味しかった。クロウ君も食べればよかったのに」

「だからボクには合わない味だったんだよ。ところでモモグリさん。なんでスキーに行かなかったの？」

「だって今はやる気になれなかったんだもん。またいつか連れて行ってもらおうわよ。くふう！ 眠くなってきたな……」

モモグリさんは軽くノビをした後、そのまま寝てしまいました。このままだと寒くて風邪をひいちゃうよ。

でも起こすとか何か言われそうだから毛布をかけてあげました。

「……………」

さてと。ボクは少し宿題をやってから寝よう。

第14話：桃栗秋子とポッキー

クロウです。こんにちは。

最近モモグリさんはポッキーにハマっているらしく、毎日ポッキーを買ってきては束食いしています。

束食いだよ束食い。自称『麗しき美女』がそんなはしたないことをしちゃいけないでしょ。

「素晴らしきかなポッキーの束食い。濃厚な甘味とチョコのまろやかさが口いっぱいに広がり、それでいてなんやかんや……」

なんやかんやポッキーについて語るモモグリさん。口周りがチョコで汚れているから黙ってティッシュを渡すボク。

「あーらありがとうクロウ君」

手際良く汚れを拭き取るモモグリさん。おそらくこの数日でティッシュで口周りを拭くスキルが大幅にレベルアップしているでしょう。

そして使い終わったティッシュを丸めてゴミ箱に投げ入れる。

きつとゴミ箱にティッシュを投げ入れるスキルも大幅にレベルアップしているでしょう。

「さて、二箱目にいきますかあ！」

流行りの歌を口ずさみながら冷蔵庫を開けるモモグリさん。中には既に冷やされたポッキーがぎっしり。見ただけで少し嫌になる。さすがに買いすぎだと思う。

モモグリさん曰わく、常温のものを食べてから改めて冷えたものを食べるのが美味しいらしい。

この人の思考はよくわからない。

ポッキーに限らず大半のお菓子は冷蔵庫で冷やして食べるモモグリさん。

スナック菓子だって飴だって、なんでも冷やす。

……もしかしてお菓子を冷やすっていう行為は、この世界では常

識的なことなの？ え、まさかやって当たり前の行為？ ちよっ…

…誰か教えて！

「な〜に一人でブツブツ言ってるの？」

「へっ？ いや、なんでもないです……」

「食べる？」

笑顔でポツキーの箱を差し出すモモグリさん。

「勿論、クロウ君も束食いでね」

「……え？」

「ポツキー入りま〜す！」

「ぎゃあああああッ！」

ポツキーが……ポツキーがボクの口にいいッ！
痛い痛い！

口の水分が奪われる！

これは新手の拷問だああッ！

「ほれほれ〜！ 美味しいでしょう？」

「ああああああッ！」

第15話..暇な休日

桃栗秋子です。

今日は休日。それなのに雨。まったく、気持ちブルーになっちゃうわね。

クロウ君はというと、ひたすらに勉強勉強。ふん、つまらない。暇。

あゝ、暇。

出掛ける気にもなれないし、テレビで面白い番組はやってないし。あゝ、暇。

このままだとワタクシ桃栗秋子は『暇死』しちゃうわよ。虚しい人生のエンディングよ。

「モモグリさん、ブツブツうるさいよ。勉強に集中できない」
クロウ君め、優等生ぶっちゃって！

そんななんちゃって優等生には、伊達眼鏡をプレゼントしてやるわ！

「うわあ！ め……眼鏡？」

眼鏡をかけたクロウ君……わりと似合うわね……。写メール撮って紺ちゃんに送ってあげよう。

「モモグリさん、暇だからってイタズラするのは良くないよ」

「私はイタズラ好きな小悪魔よ！」

「……………」

「な・に・か・文・句・で・も？」

「文句ありません」

ふん、見苦しいものを見るような痛々しい視線で見ないでよね。仕方なく黙って週刊誌を読む私。でも二、三ページめくったところで飽きた。だって一回見たんだもん。

ふう、本格的にやることがないわね。本当に暇すぎて死んじゃうわ。

フリージアちゃんがいたら馬鹿みたいな話をして盛り上がったんだけどなあ。

やっぱりクロウ君をイジって暇を持て余すしかないか。

そう決心すると、私はクロウ君の帽子を引ったくって私の頭に被せた。

「プリティー魔法少女アキコ！」

「……………」

ああ、なにかなその視線。

分かる分かる、ものすごく引いているのよね？

でも無言ってのはよくないわね。せめて『プリティーじゃなくてビューティフルだろ！』っていうツツコミが欲しかったわね。

「モモグリさん、年をわきまえなよ……………」

「パンチ！」

「ひぎゃッ！」

そっちのツツコミはいらないのよ。余計なお世話よまったく。

——あらっ…………？

んー、どうやら私、いつの間にか寝ちゃってたみたい。それほど暇だったってことかな。

私の上には寒くないように薄い毛布がかけられていた。

クロウ君がかけてくれたのね…………。お姉さん、その優しいピュアなハートに感動しちゃった。

時計の針は既に夕方の五時を過ぎていました。

台所からトントントンとまな板の上で包丁を動かす音が聞こえる。

それと、何かを煮込んでいる音。

この匂いは…………シチューかな？　なかなか良いものを作るじゃない。

——おっ、今日初めて暇じゃなくなるかも。

「クロウ君、私も何か手伝おうか？」

第16話：沢屋のお宅に女の子

今モモグリさんは仕事でいないので一人で留守番です。

お昼にカップラーメンを食べながらテレビを見ていたら隣人のサワヤさんがやって来ました。

「ようクロウ。……桃栗がいないな？」

「仕事ですよ。今日は早めに帰ってくるって言ってたけど……」

「いや、桃栗じゃなくてお前に用があるんだ。ちょっと俺の部屋まで来てくれ」

「えっ、ちょっと……！」

そして無理矢理サワヤさんの部屋まで連れられました。

さすが男性の部屋、簡素だ。スポーツのインストラクターをやっているだけあって、スポーツ誌や女の子の雑誌も転がっている。

……ん？

女の子……？

何故に女の子が！

「クロウ、そこで寝てる女の子なんだけどさ、ちょっとおかしいんだよね」

可愛い寝顔。

でもボクには見覚えがあるような顔だ……。

「自分のことを魔女だって言い張るんだよ」

魔女だって？

ま、まさか……。

「でさ、居候させてくれて泣きながら土下座で頼み込むからよ、ついついOKしちゃったんだけどさ……実際ワケわからなくて困ってるんだよね。で、魔法使いのお前なら何か知ってるかなあと思って呼んだわけ」

なるほどね、だから魔法使いのボクを……。

——あれ？

確かボク、サワヤさんには魔法使いの話は一切してないけど、なんで知ってるの……？

「だってお前、魔法使いハットを被ってるじゃんか」

そんな理由で分かっちゃったのッ？ この帽子は単なるお気に入りだよ！ だったらこの人は魔法使いのコスプレをしている人を見たら、その人のことを本物の魔法使いだと認識しちゃうの？ なんかスゴいよ！

……まあ、ボクが本物の魔法使いでよかったね。他の人に言ったら痛い目で見られるからね。

さて、それはそうとこの女の子、話からするとボクと同じ学校の子らしいけど……あまり記憶にないんだよなあ。どこかで見た気はするんだけどなあ。

「サワヤさん、この女の子の名前は？」

「えーと、確かリファって名乗ってたな」

リファ。

その名前を聞いた瞬間、あやふやだった記憶が鮮明に蘇った。

この子は入学してから五年間ずっと同じクラスだった。

でもお互いに会話をすることは少なく、クラス分けで別々になってからはほとんど顔すら見なくなっていた。

なんてことない、ただの元クラスメートだ。

確か『泣き虫リファ』って呼ばれてたけど、そこは相変わらずのようだ。

と、リファが目を覚ました。

「よう、起きたか。さんざん泣いたら寝ちゃうんだもんな」

サワヤさんが言った。

リファはすいませんと謝り、そしてボクの存在に気がついた。

「クー君……？」

……そうだ。リファは、リファだけはボクのことをクー君って呼んでいたんだ。
懐かしいな。

「リファ、久しぶりだね。四年ぶり……だっけ？」

「私のこと、覚えてたの？ あ、ありがとう……」

本当は忘れてたなんて言えないね。

「じゃあサワヤさん、ボクは帰ります。学校のこととか詳しい話はリファから聞いてください」

「オッケー。不審者じゃないって分かっただけでも助かったよ。ありがとう」

「いえいえ」

ボクが帰ろうと思ったら、リファに呼び止められた。

「クー君。あの……」

「なに？」

「また……会える？」

「うん。だってすぐ横に住んでるし」

「えっ」

「じゃあまたね」

ふう……。

リファか。本当に懐かしい。

他のみんなはどうしてるかな。きっとモモグリさんとは比べものにならないほど普通の家で暮らしているんだろうな……。

第17話..水着、買っちゃった

バンバンババンバン！

ウーウフフフン（ハミング）。

秋子は今日も美しすぎるぜえ！

……ってな感じでいつにも増してハイテンションな私、桃栗秋子です。

ちなみに即興で作った歌です。横ではクロウ君が複雑な眼差しで私を見ています。

私がハイになっているのには理由があります。コレです。

「ジャーン！ 水着買っちゃった！」

清楚で真っ白なビキニ。ほど良くセクシーさがアピールできます。

「まだ三月。時期早すぎだよ」

もったもなツッコミ。もっとも過ぎて反吐が出ちゃうわ。

「甘い、甘すぎるわクロウ君。このジェンガ、抜けるかな？」

「って思っと思っ切り引っ張って積まれたジェンガを崩すほど甘い！」

「はあ……？」

「ある日突然気持ち良く泳ぎたいなあ、って思う時があるでしょ？」

それよ」

「ただ単に昨日のテレビのハワイ特集を見て影響されただけでしょ」

「えいっ」

「あ痛ッ！」

余計なことは言わなくていいの。思わず左フックが炸裂しちゃったじゃない。

「そこで私は考えた。じゃあ泳いじゃえばいいじゃん、あわよくば彼氏をゲットしちゃえばいいじゃん……ってね」

「ふうん」

相変わらずつまらない反応ね。紺ちゃんの家に放り込んでやろうかしら。

「ということで、ちょっとコレ着てみるから評価してね」
「えっ？」

「似合うか似合わないかでいいから。それじゃあよろしくね」

えっと……。

視点が変わってこんにちは、クロウです。
いきなりモモグリさんの一人ファッションショーが始まるらしいです。はつきり言って興味ありません。

しかしここで逃げると後が恐ろしいのでちゃんと評価してあげようかと思います。

そそくさとお風呂場に行き着替えをしているであろうモモグリさん、相変わらずやるのが唐突です。

「モモグリさん、まだー？」

「もうチョイ待ってー！」

お風呂場から聞こえるモモグリさんの声。声のトーンがいつもより張りがあります。それほどまでに自信があるのかな？　すごい自信家だな……。

「お・待・た・せ！」

ノリノリな足取りで現れたモモグリさん。

……………。

温泉旅行の時も少しだけ見たけど、わりとスタイルが良いということにボクは驚いた。

うん、性格だけ除けば美人さんだね。

「クロウ君、評価」

「はいっ？」

「似合うか似合わないか、さあどっち？」
「似合う。うん、似合う。」

正直に答えたらモモグリさんはガッツポーズをした。

「私……グラビアアイドルになれるんじゃないかな？」
それは無理。

正直に答えたら『革のベルトでビシバシ叩いてやろうかオーラ』
をたっぷりと放たれたので謝っておいた。

「さて、じゃあ早速近場の健康ランドにでも行こうかな」
温水プールとかじゃないんだ。

……ん？

確か近場の健康ランドって……。

「モモグリさん」

「なに？」

「そこ、確か改装するからって今休業中だよ？」

……………。

「なんですってーッ？」

第18話..なりきりセバスチャン

こんにちは、クロウです。一応魔法使いなのに魔法をあまり使っていません。

さて、仕事から帰ってきたモモグリさんは上機嫌でした。基本的にいつも上機嫌な気はするけど……そこはあまり気にしないでおう。

「クロウくん！ ケーキ買ってきたわよーッ！」

ジャーンと言いながらケーキをお披露目。

おおっ、美味しそうなショートケーキ、チョコケーキ、チーズケーキ、レアチーズケーキ、モンブラン、フルーツケーキ、ロールケーキ……、

「買いすぎでしょ」

ちなみに全部二個ずつある。

「じゃあ今日の晩ご飯はケーキにしようか」

ボクは普通のご飯が食べたいです。ケーキはデザートにしてください。デザートは別腹とか言いながら食べたいです。

「エレガントに紅茶を淹れましょうねえ。こらセバスチャン、さつさと紅茶を用意なさい」

せ、セバスチャンってボクッ？ 誰だセバスチャンって！ ああ、それよりも結局はケーキが晩ご飯になるのか……。

足を組み肘掛けに肘を置いて口元に手を当てながらボクに命令をするマッサージチェアに座るモモグリさん。もはや女王様なのか単なる疲れ切ったオバサンなのかはわからない。

ただ逆らうと酷い目に遭うので大人しく命令に従ってしまう弱いボクだった。

「ブリヂストンの紅茶が飲みたいな〜」

そんなのないです。

紅茶はスポーツ用品じゃないよ。

雰囲気だけで言ったでしょ貴女。

「セバスチャン、紅茶を淹れたらわらわの元にケーキを持ってきたもれ」

この独裁者め！

「はい、ケーキ」

「やり直し」

なにが。

「もっと紳士的に、そしてよりセバスチャンっぽく！ 貴方はセバスチャン、セバスチャンになりきったつもりで私に接するの！」

何を言ってるんだらうかこの人は。セバスチャンって誰ですか。

ハッ、もしかしたら『セバスチャン』じゃなくて『セバスちゃん』なのかもしれない！ 女？ オカマになれてことなのツ？

「オカマは嫌だよ！」

「はあ？ 何言ってるんの、ぶっ飛ばすわよ」

マズい、女王様の機嫌を損ねてしまわれたみたいです。体内から邪気を放ちまくっていて近寄りがたいです。即刻

「死刑！（この場合、殴る蹴るの暴行）」と言われてもおかしくない状況です。

「早くしないと『手術中に綿を入れたけど、それを取り出し忘れた刑』にするわよ？」

リアルに嫌だ！

ボクは仕方なく独裁者様のためにセバスちゃんっぽくケーキを運びました。

「け、ケーキでございますわよ……」

「マイナス四百二十七点」

低いー！

「もういいわ。普通に食べよう、普通に」

最初から普通にしてください。

いや、そんなことこの人に言ったところで無駄か……。

ボクの目の前に所狭しと並ぶケーキ達。カロリーたっぷり。だけ

どこんな物じゃお腹は満足しません。ケーキは少しだけ食べて、後でコンビニ弁当でも買って食べよう。

モモグリさんは……。

「いただきまーす」

笑顔でケーキを口に運ぶ。

口元を手で隠し、二回、三回とゆっくり噛む。

そして、

「んー！ 美味しい！」

と女子アナが美味しい物を食べた時のようなりアクションをした。「いやあ、普通に美味しいわ。思っただけど、なんで女子アナってああいうリアクションしかないんだろうね」

知らないよ。女子アナ全員がそんなリアクションするわけじゃないでしょうに。

「でもさ、モモグリさん」

「なにかな？」

「昨日女子アナの人がケーキを食べているのを見たから自分も食べたくなったんでしょ？」

「そうよ」

水着の時といい、この人はテレビからの影響力が激しいです……。

第19話..お隣さんは騒がしい

クー君は今何をしているのかな……。

勉強？

食事中？

魔法の練習？

それとも……。

あ、私リファです。最近沢屋さんの家に居候させてもらっている見習い魔女です。

お、覚えていないですか……？ 第16話に出てきたんだけど……

…グスン……。

あつ、すいません……。私昔からすぐ泣いちゃう癖があつて……。おかげで子供の頃は『泣き虫リファ』って呼ばれるほどの有り様で……ううっ……。

ああつ、またすいません……。私、涙腺が弱すぎるっていう特殊体質なのかな？

よいしょ。気を取り直して勉強でもしよう！

沢屋さんは仕事で家にいません。私一人、静かに留守番。

テーブルの上に勉強道具を置いて、よしやるぞ！ と喝を入れる。

ズゴオオンッ！

——ッ？

い、いきなり壁の向こうからすごい音が……。

ズダラララララララッ！

なに、なんなのッ？ 何かの連射音が聞こえるけど！

『クロウ君っ、そっちに行ったわよ!』

『モモグリさん、ゴキブリくらい自分で始末しなよ……』

壁の向こうからクー君の声が!

そ、そういえばクー君ってお隣に住んでるんだった……。

ああ、でもあまり暴れてると壁が壊れちゃうよ……。

『くられ、私の必殺究極奥義……』

『わーっ! 消火器なんか取り出さないでよ!』

『ふっ、冗談よ冗談』

うーん、なんだか困ってるみたい。

ここは私も手伝ってあげるべきなのかな?

困っている人を見かけたら助けてあげなさいっておばあちゃんに
教えてもらったし……。

……………。

よしっ!

私は側にあったペンを手に取り、チョイと振りました。

……これだけで魔法は終わり。成功したかな?

『いやあああッ! ゴキブリが破裂した! クロウ君、体液とかが
床に飛び散ったじゃない!』

『ぼ……ボクじゃないよ! ボクは何もしてないよ!』

『勝手に破裂するニトロなゴキブリなんて存在するわけないでしょ
うが! さすがの私でもそれぐらい分かるわよ!』

『でもボクは何もしてないんだよー!』

……………。

余計なお世話……だったかな? ごめん、クー君……。

第20話..ボクがここに居る理由

ふと思った。

なんでモモグリさんはボクを引き取ってくれたんだろう、と。

普通ならさ、もっとこう……

「魔法使いなんているわけじゃないですか！ 帰ってください

！」みたいな展開になっている筈だよ？

なのにモモグリさんは近所の子供を家に招き入れる感じであっさり引き取ってくれた。

なんでだろう……？

ハッ、もしかしてボクが今は亡き弟さんに似ているから情が移って引き取ってくれたとか……！

……いや、弟を下僕のように扱う姉なんかないか……。

ハッ、もしかして一人暮らしは寂しいからペットの代わりとして……！

……って人間をペットとして扱うなんてどういう考えの持ち主だ。モモグリさんに限ってそれはないな。

ハッ、もしかしていつの日かボクをシオダさんに売るために引き取って見たとか……！

……いや、だったらとくに売られているか。

これはモモグリさんに直接聞いたほうが早いね。

ボクはテレビを見ながらマシユマロを頬張るモモグリさんに話しかけようとしたが……、

サグラダ・ファミリアッ！

という謎の着信音が鳴り響いた。

モモグリさんは電話に出た。

「あら紺ちゃん、どうしたの？」

あ、相手はシオダさんらしい……。

「うんうん、新しいバッグを買った？　よかったわねえ」

わりと普通の話題だ。

「えっ、私はバッグなんていらないよ。というか既に持ってるし、サンドバッグ」

うん、明らかに違う種類のバッグだね。っていうかサンドバッグなんてこの家にあったっけ？

「……………」

み……見てる！　モモグリさんがボクを見てる！　え、ちよっ、まさかボクがサンドバッグなのッ？

「ああ、うん、クロウ君？　クロウ君なら相変わらず小憎たらしいわよ。うん、うんうん、あくはいはい前方後円墳ね」

えっ、なんでボクの話題から前方後円墳にッ？　まったく関連性はないけども！

「クロウ君が欲しい？　あはは、それならいつでも売ってあげるわよ〜！」

……ッ！

まさか、まさかそんなことが……。

ボクはシオダさんに売られるために引き取られたのか……！

そっか、やっぱりそうだったんだ……。さすがにちよっとシヨツクだな……。

「なんてね、ウソウソ。クロウ君はあげられないな」

……えっ？

「クロウ君は私の下僕だ」

どっちにしる酷いッ！

モモグリさんは電話を切った。

「さて……下僕よ、茶でも入れてきなさい」

「ボクは下僕じゃないよ！」

「下僕、さっさとしろ」

モモグリさんの気分は完全に魔王だ。そしてボクは無理矢理働か

される手下。ああ……。

「魔王様、ウーロン茶でいいですか？」

「ぶっ飛ばすわよー？」

「ご、ごめんなさい！」

つい魔王様って言っちゃったよ。一步間違えてたら完全にやられたよ、危ない危ない。

まあ……モモグリさんにお茶を持っていた時、どうしてボクを引き取ってくれたのかを聞いてみることにした。

「クロウ君をあっさり引き取った理由？ そんなの簡単よ」

「ど……どんな理由？」

「雑用として使えそうだったから」

……………。

結局はその結論に達するわけなんだね。ハア……。

第21話..優しい小悪魔

ある日の夜。

なにやらモモグリさんが昔話をしてくれるらしいです。

ボクが勉強をしているのにですよ。これは確実に勉強の妨害を試みているんだと思う。

「昔ある所にジャックという人がいました」

……ジャックと豆の木らしい。ボクはよく知らないけど。

「なんかでっかい豆の木がありました。ジャックはビビりました」
随分とアバウトな進行だね。どうでもいいんだけどさ。

「巨大な豆の木に興味津々のジャック。ジャックは思い切って豆の木によじ登りました」

ふんふん。

「しかし途中で足を滑らせて落っこちましたとき、ちゃんちゃん！」
コラ。

いっぱいツツコミを入れたところだけど耐えるボク。心なしか
持っているペンが震えているような気がする。

そしてモモグリさんは冷蔵庫からアイスクャンディを持ってきて、
わざとビチャビチャと音を鳴らしながら食べる。ものすごく耳障り
な音だ。

「ん……どうしたのクロウ君？」

「もう少し静かに食べてください」

「大人しくチュパチュパしろと？」

「うーん……なんか微妙な表現だけど、とにかくボクは勉強をして
いるから集中したいんです。静かにしてください」

「うん、無理」

……………。

爽やかな笑顔で無理って言われちゃいました。貴女はジッとでき
ない小さな子供ですか。

こうなったら無視の一点張りだ。何も反応しなくなったらそのうち飽きるでしょ。

……ほら、アイスをうるさく食べてたけど、疲れたのか普通に食べ始めた。

そしてついにはボクが構ってくれないから暇になって携帯電話をいじり始めた。

ふう、勝った……！

ようやく手に入れた静かな空間。これで落ち着いて勉強できる。でも、それはほんの一時のことでした……。

ピンポーン。

インターホンが鳴り響いた。誰か来たらしい。

「開いてるから入っていいわよー！」

ん？ モモグリさんが誰かを呼んだのかな？

でもモモグリさんが呼ぶような人って……。

シオダさん……？

——逃げるんだクロウ！

ボクの脳内に危険信号が走る。

勉強道具をほったらかしにし、急いで自分の寢床へ飛び込む。するとモモグリさんがやって来た。

「どうしたのよクロウ君。勉強やってたんじゃないの？」

「いや、その……今日は寝るよッ！」

「ふうん、まあいいけど。じゃあ勉強道具は私が適当に片付けておくからね」

あれっ、わりとあっさり引き下がった。それに片付けまでしてくれるなんて、どういう風の吹き回し？

モモグリさんが立ち去り、遠くで誰かと会話しているのを聞いて

みた。

『クロウ君寝るんだってさ』

『こんな早い時間から寝るなんて偉いな』

……お隣のサワヤさんの声だ。

あれっ、シオダさんと呼んだんじゃないの？

『リファちゃんはスイカ好き？』

『は、はいっ。縁側で種を吐いたりして……』

『マホーツ界のお宅にも縁側なんてあるの？』

リファもいる……？

えっ、なんでなんで？

『いやあ、それにしても悪いわねえ和夫。仕事帰りにスイカを買ってきてもらっちゃって』

『気にすんなって。こういうのはみんなで食べるとより美味しくなるだろ？ それにしても残念だなあクロウの奴、寝ちまったなんて』

『ついさっきまで生真面目に勉強なんかしてたのよ。だから息抜きにと思ってスイカを買ってきてもらったんだけどねえ』

『クー君とスイカ食べたかったなあ……』

……………。

ちよっ……ボクもスイカ食べますッ！

第22話..お願い紺ちゃん

とある喫茶店にて。

ワタクシ桃栗秋子は友人の塩田紺ちゃんとコーヒーを飲んでいます。

クロウ君はいません。なぜなら私達は仕事帰りだから。

「ねえ秋子、私って電話以外だと久しぶりな登場の気がするんだけど」

「まあクロウ君があんたを拒んでいたからね」

「そんなあ！ クロウきゅうくん！」

そりゃああんなにしつこいと会うのも嫌でしょう、と真面目に考える私。クロウ君にとって紺ちゃんは猛獣のような存在でしょうね。

「ねえねえ秋子、お願いだからクロウ君に会わせて〜！」

「ん〜、どうしよっかなあ……」

「お願い！ なんでもするから！」

ほう、なんでもすると……？

そうかいそうかい、それじゃあ……、

「紺ちゃん」

「なんでありましようか秋子隊長」

「今度あんたのお金で温泉に行かせろ」

「お、温泉……？」

首の傾げて何かを考える紺ちゃん。きっと紺ちゃんの脳内コンピュータが緻密な計算をしてフル作動しているんでしょうね。

1. クロウ君と温泉。
2. クロウ君と混浴に入る。
3. クロウ君の素肌が見られる。
4. 夜、一緒の布団で寝る。
5. クロウ君を抱き枕にする。

6. ウッハウハ。

おおかたこんな感じでしょね。

その証拠にほら、さっきからにやけっぱなし。

「秋子！ いいでしょう、温泉に行きましょッ！ 何故海じゃなく温泉なのかはあえて聞かないで置いてあげる！」

それは前に行った旅館にまた行きたくなったただけなんだけどね。たしか名前は『下暮温泉』^{げぼおんせん}。テレビじゃ気軽に言えない名前よね。

「じゃあいつ行こうか。今週？ それとも来週？」

「私が行きたくなったら」

「えっ！ 秋子は気まぐれだからいつになるかわからないじゃない！ 明日行こうよ明日！」

「それは無理」

明日だって仕事があるんだから温泉に行ってるなんか暇はないでしょうに。それともなにか、まさか仕事を休むつもりかい貴女は？

「お願い秋子、具体的な日付を決めて」

なんかさっきからお願ひされまくっているような気がするけど、クロウ君関連の話題になるといつもこうなのであまり気にしない。気にしたら負けだ。

もう無視してさっさと帰りたくなってきたけど、このまま放っておいたらウチについてきてまで

「お願いお願い！」と言ってるさくなるんじゃないかと思う。さすがにそれはイヤ。

仕方ない、適当に都合の良さそうな日は……。

「土日？ 週休二日制だから一泊二日できるでしょ」

「いつの土日？」

「んなもんすぐに決められないわよ。とりあえず土日よ、それ以上は決められないから」

「ん、まあいっか」

ふう、なんとか納得してもらえたかな。

その後紺ちゃんと世間話をし、私はクロウ君が待つ自宅へと帰った。

さて、クロウ君は紺ちゃんと温泉に行くことをどう思うかしらね。間違いなく嫌がるんだろうけどさ。反応がちょっと楽しみ。

第23話..お気に入りのコップ

それはモモグリさんが食器を洗っている時でした。

ガッシャーン！

モモグリさんは手を滑らせコップを割ってしまいました。

「ぬああああッ！ 私のお気に入りのコップがあああッ！」
あらら、どんまいモモグリさん。

するとモモグリさんがものすごい勢いでボクに頼み込んできました。

「クロウ君、魔法でなんとかできないッ？」

「ま、魔法で？」

「そう、魔法よ！ コップを直すぐらいちよちよいのちよいでしょっ！」

必死すぎて顔が怖い。とてもじゃないけど見てられない。

「わかったよモモグリさん、やってみる」

「さすがクロウ君！ 任せたわよ！」

ボクはコップの破片をテーブルの上に置き、ゴルフクラブのアイアンを構えた。端から見たらボクがコップを割ったみたいだね。

ボクは心配だった。モノを修復する魔法はたしかに存在するけど、ボクがそれを使って成功した試しがないのだ。なぜかこういう魔法は不得意なようだ。

でも今回の場合は絶対に失敗できない。なぜならこれはモモグリさんのコップだからだ、しかもお気に入りなの。

万が一失敗した場合は……。

失敗した場合は……………。

「クロウ君、ガンバ！」

あの期待しきった顔、失敗したら……確実に殺される！ なぜな

らこれはお気に入りのコップだからだ。

ボクは人生の中で一番真剣に精神を集中させた。

……落ち着け、落ち着くんだったクロウ。やればできる、ボクはできるんだ。

「――いきます！」

ボクはゴルフクラブを振りかざした。

頼む、直ってくれ！

しかし神様は悪戯だ。きっと物事が丸くおさまるのは面白くないと思っっているんだろう。

――コップは爆発した。

「エエエエーッ！」

「いやああああッ！」

アパートの一室からこだまする二つの悲鳴。そして悲鳴の次に聞こえたのは「このインチキ魔法使いッ！」という罵声と何かが連続ではたかれる音。何がはたかれているのかは適当に想像してください。

完全にヒステリックに陥ったモモグリさんは怒鳴り続けます。

「これはッ！ 私のッ！ お気に入りッ！ コップ！ だったの

よッ！ それをッ！ 粉々ッ！ にッ！ するなんてッ！ あんた

ッ！ 馬鹿ッ！ じゃッ！ ないのッ！」

ヒステリックすぎて言葉の区切りがおかしくなっていることに気付かないようだ。

それはともかく、ボクはまだ諦めていなかった。

周りに落ちているコップの破片をかき集め、それをまとめる。

「なにしてんのよクロウ君ッ！」

「まだ直せるよモモグリさん」

「……えっ？」

例えば粉々になろうとも、それはパズルのピースが増えただけにす

ぎない。粉だろうが破片だろうがとにかく元通りにくっつけなければいいのだ。

でも細かい破片をくっつけるにはそれなりの実力が必要になる。ボクでは実力不足だ。でも、もしかしたらあの人なら直せるかもしれない……。

「あ、クー君と桃栗さん……。ど、どうしたの？」

お隣のサワヤさんちにいるリファを尋ねた。

ボクとモモグリさんはコップについての説明をし、なんとかして直せないか聞いてみた。

「ず、随分と見事に粉々になっちゃってるね……。原形がわからない……」

うつ……。それはボクのせいだ……。

「でもっ！　が、頑張ってみるから！」

「頼むわよりリファちゃん。クロウ君なんかより期待するわ」

わ、悪かったね、期待に背いちゃって……。

リファはたまたま近くにあったきゅうりを持った。きゅうりを杖代わりにするようだ。

「じゃあ……頑張ります」

リファはきゅうりを振りかざした。端から見たら変なことをしている人だ。

そして神様はやっぱり意地悪だ。ボクの際は見事に失敗したというのに……。

——コップは綺麗に元通りになった。

「や……やりました！　成功のようです！」

「やったわーッ！　ありがとうリファちゃんッ！」

モモグリさんは本当に嬉しそうだ。

でもこのコップ、見た目は普通のコップだけど、どのあたりを気

に入っただろう？

「実はそのコップ、死んだ私のおばあちゃんが私の誕生日に買ってくれた大切なコップで……」

そ、そうなんだ……。そんな大切なコップを爆発させるなんて、ボクは悪いことをしちゃったな……。

「……つてのはウソ」

「ウソかよ！」

結局このコップは百円ショップで購入した安物だということが判明した。

で、このコップがお気に入りだという本当の理由は、

「使っているうちに愛着が湧いてきちゃった」

ということだった。

っていうか百円ショップに売ってるなら同じやつを買ってくればいいじゃないか。

それをモモグリさんに言ったら、

「だからこのコップがお気に入りなんじゃボケが！」

と怒られ、またはたかれるボクなのでした……。

第24話：勝手に肉じゃが試合

「ニンジンっ♪」

「ニンジン」

「玉ねぎっ♪」

「玉ねぎ」

こんにちは、桃栗秋子です。

今私は料理をしながら歌っています。クロウ君には復唱させています。勿論ノリが悪い方がクロウ君です。

「ジャガイモっ♪」

「ジャガイモ」

「お肉っ♪」

「お肉」

「お鍋でっ♪」

「お鍋で」

「煮込めばっ♪」

「煮込めば」

「ハイ出来上がりっ♪」

肉じゃがが出来上がりました。別にカレーを作ってたわけじゃないからね。

お袋の味代表肉じゃが選手、容器に盛り付けられて入場です。
にーくじゃが！ にーくじゃが！

観客の声援で会場に熱気が溢れております。さあ桃栗選手とクロウ選手、箸を手に持ちました。

「いただきますっ！」

「いただきます」

そして今、試合開始のゴングが鳴りました！

桃栗選手、まずは牽制でニンジンを取った。そしてそれを口に入れる。

「お、美味しい……！」

ニンジン美味しいーッ！ ニンジン自体の甘味、それに肉じやがのつゆが染みて絶妙な味をかし出している！ 美味しいですっ！
「……………」

おおっと、クロウ選手は黙々と食べていやがります。美味しいとかそういう感想は一切なく、試合開始からずっと黙っています。テンション低いです。

ここで桃栗選手、攻撃に出ました。なんとクロウ選手が狙っていたジャガイモを素早く奪い取ったーッ！

クロウ選手、心なしか不機嫌そうな表情を浮かべております！

さあクロウ選手、今度は肉に手を出した。つゆが滴り落ちてとても美味しそうだ。

おおっと、またしても桃栗選手が動いた！ 素早い箸さばきでクロウ選手の箸をはたき落としたーッ！ 箸と箸が触れ合うのは食事中のマナー違反だーッ！

観客席からはブーイングが聞こえます！ 反則だ、退場などとそういったヤジが飛び交っています！

さあレフェリーの判定は……セーフだ！ 今の行為はギリギリセーフだッ！

観客からは再びブーイングが殺到します！ しかし桃栗選手、観客などお構いなしに箸を進めます！

次はプレイに気を付けてほしいものです。退場になったら納豆ご飯を食べる羽目になりますからね。

さて、クロウ選手はご飯につゆをかけて美味しそうに食べています。

これは美味しそうだ。桃栗選手も同じ行動に出ました。

これは、これは美味しいーッ！ 適度な甘味としょっぱさ、それにご飯が絡み合うのは反則級に美味しいッ！

あ……なんと！ 桃栗選手、むせました！ ご飯を勢いよくかき込んでいたせいなのか、ご飯粒が喉の変な所に入ってしまったよう

です！ これはかなりのダメージだ！

「モモグリさん」

「ん、なに？」

「さっきから一人でなにをブツブツ言ってるの？」

「実況」

「は？」

……さて、

そろそろ普通に食べようかな。

第25話：下暮温泉リターンズその一

クロウです。

なんかモモグリさんとシオダさんで温泉に行くらしいです。次の土曜日に出発するらしいです。

交通手段はモモグリさんの自動車です。今モモグリさんと一緒に洗車しています。

「へいクロウ君、水ぶっかけてちょうだい！」

「はいっ！」

モモグリさんはわりと真面目に作業をしています。自分の車なんだから当たり前か。

「まったく、最近またガソリン代が上がっちゃってさ……。これだから困るのよね……」

なんかブツブツと独り言を呟いています。

そして、

「クロウ君、ガソリンを出す魔法は……」

「ないですね」

そんな会話を交えながら洗車していると、お隣のサワヤさんがやって来ました。コンビニの帰りらしく、ビールの入った袋をぶら下げています。

「お、洗車か。俺の車もたまには洗わないとな」

「あんたも車持ってるんだ」

「まあな。八人ぐらいいは余裕で乗れるぜ」

「ふうん……」

あ……モモグリさんが笑顔になった。あれは何かを企んでいる顔だ。気を付けてサワヤさん！

「和夫、あんたの車貸しなさいよ」

「なんでだ？」

「今度の土日にクロウ君を連れて友達と温泉に行くのよ。だから貸

しなさい」

「別に構わないぜ」

あっさりOKしちゃったよ。モモグリさんに車を貸すと大変なことになるよ。他人のものだからって無茶な運転をすると思うよ。ヘタしたら事故に遭うよ。

「その代わり俺もついて行くぞ。お前の運転は信用ならないからな」
さすがサワヤさん、わかっていらっしやる。ボクは心の中で拍手を送った。

心なしかモモグリさんの不機嫌そうな表情を見た気がするけど、気にしない。

「友達と出かけるって言っても、相手はどうせ塩田だろ？ 俺が加わったところで問題ないっしょ」

「まあね。でもあんたの分の旅費は自分で出すのよ」

「そんなの当たり前だろうが。じゃありファも一緒について行くからな」

り、リファも行くの……？

それはちよつとオススメできないなあ。だってリファは……、

「クロウ君、なにボーっとしてんのよ。水ぶっかけて！」

「……あ、はいっ！」

みんな温泉か……。

うん、すごく不安……。

第26話：下暮温泉リターンズその二

土曜日になりました、クロウです。

温泉に行くメンバーはモモグリさんの家に集まり、サワヤさんの大きな車に乗り込みます。

運転手は勿論モモグリさん。他人の車を運転するのに興奮しているのかテンションが高いです。

「つしゃああッ！ 出発するわよッ！」

「安全運転で頼むぞ」

助手席にサワヤさんがいるので運転に関しては安心です。白バイに追われるような危険プレイはしないでしょう。

だがしかし、後部座席にいるボクの方には心配の種があるので……。

「ふっふっふ……もう逃がさないわよクロウ君……」

不気味に笑いながらボクを抱きしめるシオダさん。苦しいし暑苦しい。会いたくなかった……。

「あゝ紺ちゃん、あまり激しいプレイは行わないように。クロウ君死んじゃうから」

「オッケーオッケー、そのへんの加減は理解してるつもり！」

激しいプレイってなんのことでしょうか。とてつもなく嫌々な予感がするんだけど……。

「クロウ君、まず手始めにポッキーゲームでもしよっか」

……………。

な、なんだってええッ！

「無理です無理ッ！ チューは無理ですってば！」

「チューじゃなくてポッキーゲームよクロウ君」

そう言ってポッキーをくわえたシオダさんが近寄ってくる。

いや、もうマジで無理です！ 泣きたい！ ポッキーアレルギーに今すぐになりたい！

ふと隣を見ると、そこには青ざめた表情のリファがいた。

「どうしたリファ？ 死にそうな顔してるな」

心配になったサワヤさんが声をかけたが、リファは何も反応しない。

まさかと思ってボクはリファの背中をさすってあげた。

「リファ、また酔ったんでしょ……」

「……………」

リファは泣きそうな顔で頷いた。

リファは昔から乗り物酔いが激しくて、特に車に弱かった。おかげで小さい頃に『泣き虫リファ』の他にも『ゲボリファ』というあまりにも直球すぎるあだ名をつけられたほどだ。

別の誰かはリファのことを『ゲロマスター』と呼んだ。子供って残酷だ。っていうかこれは伏せ字にしくてもいいのだろうか。

「大丈夫よりファちゃん。手のひらに『人』っていう字を書いて飲み込めば落ち着くから」

モモグリさん、それは違うと思う。

「そうじゃないわよ秋子。『米』っていう字を飲むのよ」

シオダさん、それはもつと違う。

……って、リファが必死になって『米』を飲んでいる……。こんな話を信じるなよ。

しばらくして高速道路に入った。

モモグリさんはサワヤさんの監視のおかげか、わりと安全な運転をしている。それ以上にリファが酔っているから無理な運転をしないんだと思う。ヘタに刺激を与えちゃマズいもんね。

リファは涙目になりながら背もたれを倒して休んでいる。モモグリさんの安全運転によってギリギリ耐えているような状態だ。でも、さっきからピクリとも動かないのはなんでだろう。

さて、残るのはシオダさんだが、シオダさんはボクを自らの膝の上に座らせている。小さな子供が親の膝に乗るような感じだ。

で、さらにずっと抱きしめられている状態だ。苦しいし暑苦しい動けない。幽霊になりたい気分だ。この腕をすり抜けたい。

「第一回ドラマチックしりとり大会〜！」

突然モモグリさんが意味不明なことを叫んだ。

「ルールは簡単、ドラマにありそうな台詞をしりとりで繋げていつてドラマチックに物語を作ろうというゲームよ。最後に『ん』が付いたり台詞じゃなかったら負けね」

なんてしょうもないゲームだ。

でもシオダさんはノリノリだ。サワヤさんもまさかのやる気満々だった。リファは当然始める前からリタイアだ。

「じゃあまずはわたくし桃栗秋子から！ いきます！」

ちなみにボクはやる気がないけど、この雰囲気からすると強制参加っぽい。なんてこった。

「『今日は彼氏と初めてのデート。ちょっぴり緊張しちゃうわ！』の『わ』！ 次、和夫！」

うん、まあ普通な感じの出だしかな。

「『わりの、遅刻しちゃった！』の『た』で」

おお、繋がってる！

続いてはシオダさんだ。

「『タツ君たら仕方ないわね。でも私も今来たばかりだから大丈夫よ』。はい、クロウ君」

彼氏の名前はタツ君らしい。

次はボクか。とりあえず頑張ろう。

「『よかった、怒っているんじゃないかと思って心配してたんだ』……っていうのはどう？」

「オッケーよ！」

よかった、なんとか切り抜けられたみたいだ。

リファは参加していないのでモモグリさんの番に戻る。

「『大丈夫、私はタツ君に怒ったりしないんだから！』で、サワヤさん。」

「『ラーメン食いに行こうぜ』」

と、唐突だね。彼女とデートなのにラーメン屋に行きたいのかタツ君。

「『絶対イヤよ。立ち食いそば屋の方がいい!』」

いや、それもどうかと思うよシオダさん。

……っと、ボクの番か。

「『意味不明なことを言うな!』」

今のボクの気持ちです。

さあ、次はモモグリさんだ。

「『なんですって! 意味不明なことってなによ、も〜!』。次は『も』ね」

なんか喧嘩になってるね。

「『もうよそうぜ、こんなくだらないことで喧嘩するなんてさ』」
タツ君大人だなあ。

「『最低!』」

いや、せっかく仲良くしようとしてるのに彼女最悪!

しかもこの次はボクだし! どう切り抜ければいいんだ!

「『いいかげんにしてくれや』」

うん、マジで。もっと良いパスをちょうだいよシオダさん。

そしてモモグリさんだ。

「『やっぱり喧嘩はやめよう……。仲良く遊園地に行こう?』」

お、仲直りの方向に進んでいるね。いい展開だ。

「『うん、そうだな』」

よかった、仲直りしたみたいだ。

シオダさん、今度こそナイスパスをちょうだい!

「『……なんてな! 誰が貴様とよろしくしてやるかってんだ!』」
だからなんでいちいち破局への道に導くんだよツ! キラーパスをよこさないでください!

「『だから仲良くしようって言うてるだろ! まったくも〜!』。『も』で」

さっきからボクの本心しか言っていない気がする。

と、ここで休んでいたリファがゆっくりと手を挙げた。途中参加したいのかな？ まだ気持ち悪そうだけど大丈夫なの？

「『も、もう、ダメです……』」

大惨事になりました。

第27話：下暮温泉リターンズその三

車内で大騒ぎしながらもなんとか旅館にたどり着いたボク達。

『下暮温泉^{げぼおんせん}』と書かれた立派な看板が車内での大惨事をフラッシュバックさせます。みんなのテンションがガタ落ちです。特にリフアは泣きそうです。

適当に受付を済ませ、部屋に案内された。

……なぜか全員一緒の部屋だった。

「おいおい、普通男と女とで分けるべきだろ」
サワヤさんの言う通りだ。

「酒飲んで酔っ払ったら襲っちゃまうだろうが」
さ、サワヤさん……ストレートすぎる。

「そうなった場合は……ねっ、秋子？」

「そうね、紺ちゃん……」

「「お前をぶっ殺す」」

思わず震え上がるサワヤさん。よかったね、これで酔っ払っても手出しができない……。

「わ、私……温泉に入ってきます……」

「リファちゃんが行くなら私も行こうっ」と

「それなら私も行く！」

女三人組は早速温泉に入るらしいです。

さて、残ったボクとサワヤさんはどうするのやら。

「クロウ」

「なんですか？」

「俺らも便乗して温泉に行こうぜ」

ボク達も温泉に浸かることに。

温泉です。二度目です。

緑が生い茂る山と綺麗な海が見えます。絶景です。

「気持ちいいなクロウ。この温泉最高だ」

「ですね」

ゆったりとお湯に浸かる。ああいい気持ち。

隣の女湯からモモグリさん達の声が聞こえます。

「リファちゃん体をキレイに洗おうね」

「あ、ありがとうございます桃栗さん……」

「シャンプーもしないとね」

「塩田さん、あの……シャンプーぐらい自分でできますんで……」

「綺麗になってクロウ君を寝取れ！」

「はうッ！ も、桃栗さん、何を言ってるんですかッ！」

「そうよ秋子！ クロウ君を寝取るのは私よ！」

なんつー会話をしてんだあの人達は。やめてくれ。

「なあクロウ」

「なんですかサワヤさん」

「壁が透けて見えるようになる魔法はないのか？」

「残念ながら犯罪です」

「だろうな。あゝマジで残念だ」

この人は懲りないな。っていうかダメだ。

「なあクロウ」

「なんですかサワヤさん」

「女湯を覗くというラブコメチックな展開に走ってもいいか？」

「残念ながら犯罪です」

「だよな。あゝ漫画の主人公が羨ましい」

その後、ボクとサワヤさんは同じようなやりとりを数十回繰り返した。

夜です。ご飯です。みんなハイテンションです。

どデカイ船盛り、それにカニや山菜など豪華な食事がたくさんです。

カニにがつつくモモグリさん。船盛りに手を出すサワヤさん。山

菓をちよびつとずつ口に運びリフア。ボクの頬を箸でつつくシオダさん。

ってコラ。

「あ、ゴメ〜ンクロウ君！ ついついつまみたくなっちゃって！」
ついついつままないでください。ボクは美味しくないから。

食事はどれも美味しく、全員で全て食べきった。ふう、ご馳走様でした。

食後はグダグダした。適当に寝転がるだけ。

そしてしばらくするとモモグリさんが立ち上がり、

「卓球しようぜっ！」

食後の運動らしいです。

これにはみんな賛成。早速卓球をすることにしました。

「第一回ピンポンバトルーッ！」

「「イエーイ！」」

超ノリノリの大人三人。ボクとリフアは呆然とするのみ。

「ルールは簡単。対戦相手は私があらかじめ作っておいたトーナメント表に従ってやってもらいます。得点は十一点先取、デュースは面倒だから無しよ」

まず最初の対戦は……ボクとシオダさんだあ……。

「相手がクロウ君でも私は容赦しないわよー！」

「ははは……お手柔らかに……」

まずはシオダさんのサーブ。いかにもそれっぽい構えをしています。

「いくわよ……！」

シオダさんはボールを上げて……、

「必殺、『紺色シャムシール』！」

え、技ですかッ？

よくわからないけど返せないような玉じゃなかったので普通に返す。

「秘技、『紺色カットラス』！」

また技ッ？

しかも見事なカットだ。でもカットラスって武器だよ。

ボクはそのカットボールをギリギリで返す。

「トドメよ！ 『紺色フランベルジュ』！」

ズガシャーン！

シオダさんの華麗なスマッシュがキマった。技名に意味はあるのか。おそらくなんとなく叫んでいるだけだろう。

その後、地味に強いシオダさんに押されボクは負けてしまった。

うーん、残念。

「はい、紺ちゃんの勝利〜！ クロウ君の雑魚！」

うるさいよ。

さて、次はサワヤさんとリファの試合らしい。はっきり言って実力に差がありそうなんだけど……。

「ま、負けませんよ……！」

「おおっ、意外とやる気があるんだな。じゃあ手加減しないからな！」

サワヤさんのサーブ。なかなか速い玉だ。リファは返せるか？

……と、リファを見ると、腰を深く落とし、既に玉が来る場所で待機していた。

「甘い……ですよッ！」

そしてダイナミックな動きで玉を打ち返す。

——ボールは壁にめり込んだ。

「な……なんだそりゃああッ！」

サワヤさん絶叫。そりゃそうだ、こんなのびっくりするさ。

そして審判であるモモグリさんがジャッジを下した。

「魔法は反則。リファちゃん退場！」

「え、ええっ！」

ナイスジャッジ。よく魔法だとわかったね。

サワヤさんは不戦勝となった。

第28話：下暮温泉リターンズその四

第三試合はモモグリさん対シオダさんだって。似たもの同士頑張ってください。

「いくわよ秋子！ 必殺『紺色エストック』！」
なんでさっきから剣の種類を叫ぶかな。

「まだまだよ紺ちゃん！」

そしてモモグリさんはラケット側面打ち。相変わらず凄い。

二人の戦いは凄まじいもので、一点を取るのに五分ぐらいかった。そして交互に点を稼ぐので、もう一人が一点目の時には十分が経過していた。

それが何回も何回も続き、ついに十対十の接戦となっていた。単純に計算すると、およそ百分も経っているという驚愕の事実。サワヤさんとリファはとくに飽きて帰っちゃいました。

「これで最後よ紺ちゃん……」

「秋子、私はこの回で残り全ての力を使い果たすわ！」

「望むところよ！」

サーブはモモグリさん。手のひらにボールを乗せて精神を統一させる。

そして……！

「あっ、クロウ君の浴衣がはだけてるわよ」

「えっ、ボク？」

「なんですってええッ！」

コツツ、カッーン。

シオダさんが油断している時に、ボールは綺麗な弧を描いて横を通り過ぎていった。

「よっしゃ、紺ちゃんに勝った！」

うわ、あっけない終わり方！

卓球で流した汗は温泉で綺麗に洗い、夜も更けてきたのでそろそろ寝ることにしました。

「私クロウ君の横ね！」

シオダさんはボクの布団の横にぴったりとくっついた。やっぱりこうなるんだね……。

「じゃあ俺は桃栗に添い寝でも……」

「あらそう、あんたがご希望なら閻魔大王様と添い寝させてやってもいいのよ？」

モモグリさん怖っ！

サワヤさんは洪々と部屋の端っこに避難しました。

「じゃありファちゃん私は私と寝ましょ」

「いいんですか桃栗さん……？　じゃあお言葉に甘えて……」

寝る場所も決まったところで消灯。

おやすみなさい。

……。

……………。

……………。

「ゴメン、ちょっとライトオンさせて」

ボクはたまらず明かりをつける。

そして自分の布団を剥ぎ取ると、いやらしい手つきをしたシオダさんがいた。

「あら、どうしたのクロウ君？」

「……寝かせてください……」

「私のことは気にしないでいいからっ！」

気になりまくりです。

とりあえずライトオフ。今度こそおやすみなさい。

.....。

.....。

.....。

「う、うひゃあ！」

ゴメン、ライトオン。

ボクの布団には、ボクの浴衣を剥ぎ取っているシオダさんがいました。

「クロウ君のお肌スベスベ」

「.....」

ボクは無言でサワヤさんの所に逃げた。今一番安心できそうなのがサワヤさんだからだ。モモグリさんはダメだ。絶対イタズラする。

「ちえっ、クロウ君のケチ」

ケチとかそういう問題じゃないです。

次の日、ボクは朝を無事に迎えられました。

そしてまた温泉に入り、ご飯を食べました。

シオダさんは「なんで混浴風呂がないのッ！」と騒いでいました。混浴があったらボクは今頃……考えただけでも恐ろしいです。

そしていよいよ家に帰ることにしました。なんだかんだで楽しかったと思う。

車に乗って、さあ出発。帰りの運転手はサワヤさんです。

「第二回ドラマチックしとり大会」

高速道路に入るなりモモグリさんが叫んだ。またアレをやるらしい。

「今回は紺ちゃんからね」

「オツケー！　じゃあ……『オレは浪花の殺し屋ピーちゃん。今日も二十センチのリーゼントがキマっているぜ！』の『ぜ』で」

わあ可愛らしい名前の殺し屋だこと。

次はモモグリさんだ。

「『ゼエゼエ……。ターゲットを見失っちまった……。奴は一体どこに……。？』」

誰かを追っているんだね。

はい、次はサワヤさん。

「『逃げたか……。？　オレはハトサブレを取り出しそれをしゃぶる』」

ハトサブレ……。？　な、なんでッ！

……と、リファはまた車酔いでダウンしてるからボクの番か。困ったな、まったくイイ言葉が思い浮かばない……。

「『ルイスの奴もハトサブレが好きだった。あいつはハトサブレにマヨネーズをかけて食べるというおかしいことをしていたな、ハッハッハ！』」

もうどうにでもなれ！

すると、リファがゆっくりと手を挙げた。

「『は、吐きそう……。』」

第二次災害が起こった。

第29話：真っ白コートのエセ関西弁少女

ボロアパートの『今にも崩れ荘』に怪しい少女が忍び寄っていた。真夏だというのに真っ白のダッフルコートを着こなし、日用品の入った学生鞆を手に、きびきびとした足取りでとある部屋へ向かう。塩田紺、そう書かれた表札を見てドアをノックした。

「はいはいどちら様ですか」

部屋の中から縦巻きお嬢様ヘアーの女性が出てきた。彼女が塩田紺だ。

紺は少女を見た。

うん、こんな子知らない。しかも見た目が非常に暑苦しい。真夏にコートって。

紺が少女をジロジロと眺めていると、手紙が入った封筒を手渡された。

「あなた郵便屋さんなの？」

「ちゃうわ。ええから読んでえな」

少女はハキハキとした関西弁で喋った。しかしどこか関西弁とは違う雰囲気だった。きつとエセ関西弁なのだろう。

紺は手紙を読んでみた。

「なになに……、塩田紺様へ。暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。わたくしはマホーツ界魔法学校校長のライトというものです。実はそこにいる我が校の生徒ロゼを一年ほど居候させていただけないでしょうか。我がマホーツ界魔法学校では……」

真っ白コートの少女ロゼが持ってきた手紙には、クロウが桃栗に渡した手紙と同じことが書いてあった。ロゼもまたクロウと同じ見習い魔女なのだ。

「つまりロゼ、あなたもクロウ君と同じってわけなのね？」

「えっ、あんたクロウを知ってるんか？」

「私の知り合いの所にいるの。イイわよねえクロウ君って、可愛い

顔しちゃってさ！」

「たしかにあいつは学校でもそこそこモテてたらしいからなあ。：おっと、クロウはどうでもええんや。ウチが居候するのを許可してくれるんかいな？」

この瞬間、紺の脳内コンピューターがフル稼働した。

1. このロゼという関西人もどきはクロウ君と知り合いらしい。
2. ロゼがいるという理由を使ってクロウ君に会えるかもしれない。
3. 上手く行けば、大した用事もないのに秋子の家に遊びに行けるようになるかもしれない。
4. あとクロウ君が通うマホーツ界魔法学校とやらのことも分かるようになる。
5. 一石何鳥にもなる。

ロゼの利用価値が十分にあると考えた紺は居候を許可した。

「ありがとな紺さん。これからはお互いパートナーや、よろしく頼むで」

「オッケー、仲良くやっていきましょ！」

二人は握手を交わした。

「ところでロゼちゃん、その真っ白なコート……着ていて暑くないの？」

「ああ、全然へっちゃらや。このコートには冷房効果が搭載されてるんや。ほら、人間界にも作業服に扇風機だかなんだかがくつついたもんがあるやろ？ あれと似たような感じや」

「ふーん」

第30話：モロコシフィーバー

たまには私だって真面目に悩むのです。悩む女性は美しい、Akiko Momoguriです。なんとなくのローマ字表記です。

私の目の前にあるのは、我が家にたった一つだけしかないトウモロコシ。英語にするならコーンフロステイです。あ、フロステイはいらないか。

このトウモロコシをどうやって食べるか、私は悩んでいるのです。第一候補。蒸して塩ふって食べる。一番ベーシックな食べ方だと思う。

第二候補。醤油を塗って焼く。祭りの屋台を思い出させる香ばしい香りが魅力的。

第三候補。粒を取って集めてバターコーン。好きなのよ私。

第四候補。味噌ラーメンにコーンをぶっ込む。これも好きなのよ。第五候補。……あ、ごめん、やっぱり第四候補まで。

というわけで、私の脳内では四つのトウモロコシがルール無用の残虐ファイトをしています。いつまで経っても決着の着かないファイトです。

「モモグリさん、なに一人でブツブツ言ってるの？」

「うるさいわね。今味噌ラーメンがバターコーンにフランケンシュタイナーをかけたところなのよ！」

「……？」

味噌ラーメンがどうやってフランケンシュタイナーをかけたかなんて聞かないでちょうだい。今みんなは必死に戦っているのよ、邪魔しないで。

「モモグリさん、ボクは天ぷらにして食べたいな」

「ああん、なんですって？ Japanese Tempuraなんて邪道よ！ 問答無用で却下！」

「英語の発音がイイね。どうでもいいんだけどさ」

「クロウ君はどうやってトウモロコシを食べたい？」

「だから天ぷー」

「却下ーッ！」

「……………」

「……………」

「天ぷー」

「却下ーッ！」

「てー」

「却下ーッ！」

「あの……………」

「却下ーッ！」

「うるさいです」

「キック！」

「はうッ！」

悪の天ぷら小僧は片付けた。あとはトウモロコシを調理するのみ。
だけど……………やっぱり悩んじゃう……………。

ピンポーン。

あら、誰か来たみたい。紺ちゃんかしら。

「宅急便でーす」

ただの宅急便か。

私は印鑑を押してダンボール箱を受け取った。少し重たかった。
何が入っているんだろう。

送り主は……………ももぐりもみじ桃栗椀。実家にいる私のお母さんからだ。
箱の中身を見て私は驚愕した。

「と……………トウモロコシよ……………」

なんとトウモロコシが箱いっぱい詰め込まれていた。

やった、やったわ！ トウモロコシ祭りよ！ これでメニューに
困らなくて済む！

「モモグリさん、手紙が入ってるよ」

箱の中にはお母さんからの手紙が入っていた。私はそれを声に出して読み上げる。

クロウ君、ツツコミよろしく。

「秋子」

「『へ』じゃない！」

「秋子、お元気ですか。お母さんは元気モリモリです。便通もモ——」

「そこはなんとなくカットしておこうよ」

「最近お父さんがDVDにハマり始めたんですよ。特にアダ——」
「カット」

「畑でトウモロコシを大量にゲットだぜ！」

「なにそのノリ！」

「秋子はトウモロコシが大好きだから送ることにしました。」

「優しいお母さんだね」

「PSP」

「一個『P』いらない」

「たまにはこっちにも帰ってきなさいよ？」

お母さんは相変わらず元気みたい。よかったよかった。

それはそうと、これだけトウモロコシがあるんだから早速食べな
いと！

「クロウ君、今日はトウモロコシでファイバーするわよ！」

「やったー！」

第31話：桃栗んちに紺とロゼ

朝からトウモロコシを食べています。ミストウモロコシ、桃栗秋子でございます。

やっぱトウモロコシはガブガブとかぶりついて食べるのが美味しいわね。ガブガブー。

ちなみにクロウ君は和夫とリファの三人で一緒に出かけたので今日はいません。私は行くのが面倒だったから留守番です。

たまには一人でダラダラするのもイイもんだわね。ダラダラー。

ピンポーン。

チツ、邪魔が入ったか……。

私はトウモロコシをかじりながら玄関のドアを開けた。はしたないとかそういうことはこの際気にしません。

「おっ、あんたが桃栗っちゅう人か？」

私の目の前にいるのは真っ白なダッフルコートを着た女の子だった。誰よあんた。

「秋子、遊びに来たよ」

すると女の子の後ろから紺ちゃんが現れた。

「いらっしやい紺ちゃん。誰よこの子」

「この子はロゼちゃん、クロウ君と同じ魔法学校の子なんだって。私の所に居候してるの」

「よろしくなー桃栗の姉さん！」

このロゼって子も魔法が使えるわけね、ふうん。

とりあえず二人の部屋に入れた。そして麦茶を出してあげた。

「桃栗の姉さん、ウチもトウモロコシ食べたいなあ」

ああ？ そんなのダメに決まってるでしょうが。私のトウモロコシを易々とやってたまるか。

「ケチケチしないで分けてえな」

「やーよ」

「ホンマにお願いします！ 夏といったらトウモロコシやろ！」

「同感だけどあんたにあげる義理はないもーん」

「頼む、綺麗で麗しくて美しくて可愛いアイドル並みの美貌を持つて世界三大美女と同レベルの美しさを兼ね備えそれ故に世界美女四天王と名を変えたものに入っている桃栗秋子様！」

「仕方ないわね、はいどうぞ」

ロゼって超良い子じゃない。クロウ君と比べものにならないぐらい良い子。でも残念ながら今の台詞は非常に読みにくかったため八十二点ってところかな。

「トウモロコシうまー！ ありがとな、桃栗の姉さん」

「どう致しましてロッチちゃん」

（ロッチちゃんってウチのこと……？）

紺ちゃんはきよろきよろと部屋を見渡している。きっとクロウ君が目的なんだろうなあ。でもクロウ君はいないんだよなあ。

「で、あんた二人は何をしに来たわけ？」

「さっきも言ったやろ」

「遊びに来ただけだよ」

「あっそ……」

夕方まで三人でゴロゴロしていましたとき。

第32話：鮮血のキャップ

ある朝、郵便物の中に一通の手紙がありました。私とクロウ君宛てにライトって人から来ていました。

ライト……？ そんな名前の知り合いいたかしら……。

でもすぐに思い出しました。ライトってたしかクロウ君の学校の校長先生です。ハゲてるらしいです。

手紙の内容はこういうものでした。

――

ご無沙汰しております、ライトです。

早速ですが本題に入ります。

マホーツ界にて大量殺人を犯した凶悪犯がそちらの人間界に逃亡したということです。

気をつけてください。

――

随分と簡単に言うけど、殺人鬼ってリアルにヤバいんじゃないの？ マホーツ界の警察は何やってんのよ。っていうかマホーツ界に警察なんてあるの？ まあいいか。

クロウ君を起こして朝食を作る。今日は私がフレンチトーストを作ったげるわ！

「ふうん、殺人鬼ってまだ捕まってないんだ」

クロウ君も手紙を見たらしい。

「ねえクロウ君、殺人鬼ってどんな奴？」

「名前はキャップ、『鮮血』の二つ名を持ってる。なんでも道化師のような格好をしているらしいよ」

「じゃあサーカスに行ったら人気者ね」

「み、見た目だけだとそうかもね……」

はい、フレンチトーストの出来上がり！

さあ召し上がれ！

「モモグリさん……このフレンチトースト、すごくしょっぱいよ……」

……………。

お塩とお砂糖、間違えちゃった。私ったらベタねえ。

さて、私は仕事です。スーパーで働いています。

商品の陳列をしたり、お客様に挨拶したり、試食品を奪ったり、店長にチョップをかましたりして忙しいです。

「すみません、ちょっといいですか」

おっと、お客様が呼んでるわ。

私はとびっきりの営業スマイルで振り向いたが、すぐに顔が凍りついた。

ピエロが立っていた。

「すみません、ちょっといいですか」

ピエロは言葉を繰り返した。

赤い付けっ鼻。真っ白に塗りたくった顔面に星や月のペイント。ハリセンを丸くしたようなものを首に付けて、真っ赤な服を着ている。

はつきり言って、周りから浮きすぎている格好です。痛々しいです。

「魔ヨネーズはどこに売っていますか？」

「マヨネーズですか？」

「いえ、魔ヨネーズです」

「だからマヨネーズですよ」

「いえ、ですから魔ヨネーズです」

「マヨネーズでしょうが」

「イントネーションが違います。魔ヨネーズです」

こいつややこしい言い方をするわねえ。魔ヨネーズなんかあるわけないでしょうが。

「とうわけで魔ヨネーズはないのでマヨネーズを買ってください」

「ふふっ、わかったよ……」

ピエロはニヤリと笑った。

気色悪ッ！ 帰れ帰れ！

でも後から思っただけで、なんであのピエロはマホーツ界にしかない魔ヨネーズのことを知っていたんだろう……。

帰宅時間です。スーパーから自宅までは近いので歩いて帰ります。

帰る際にペットボトルジュースを買いました。店員だから値段が安くなります。お得お得。

暗い夜道を一人で歩く。不思議と周りには誰もいない。

こういう時って何故だか誰かにつけられているんじゃないかと心配になるのよね。後ろを振り向くとストーカーが電柱の陰に隠れていた、とかそういう感じ。

私って麗しき美女だからストーカーにつけられていてもおかしくないわよねえ、と謎の自信に満ち溢れながら後ろを振り向くと……、

ピエロが立っていた。

「あんた昼間の魔ヨネーズピエロ！　なんでこんな所にいるのよ！」

まさか働いている可憐な私を見て一目惚れしちゃった、とか？

ふっ、美しい女って罪ね。

「ふふっ、キミから魔力を感じたんでね、もしかしたら魔女かな、と思ったんだ。でも違ったね。キミは魔ヨネーズを知っていたけど魔女ではない」

ピエロは不気味に笑いながら私に近付く。

「その体から感じる魔力は誰のものかな？ 知り合いに魔法使いがいるんだろう？」

こいつまさか、今朝の手紙に書いてあった殺人鬼の……、

「先月のキャップ！」

「鮮血のキャップだ」

惜しいっ。

「ふふっ、僕のことを知っているのか。やっぱり知り合いに魔法使いがいるんだね」

「まあね。で、その殺人鬼さんが私に何の用かしら？ サーカスに入るために曲芸を教えろって言うんじゃないでしょうね」

「違うよ、僕はただ魔法使い達を殺したいだけさ」

こいつ、コメディだっていうのにヤなこと言うわね。そういうのは別のジャンルでやってほしいものね。

「魔法使いはどこにいるんだい？ 教えてくれないと……キミを殺すよ」

キャップの奴が頭上に手を掲げると空間に裂け目ができ、そこから禍禍しい雰囲気放了つ大鎌を取り出した。

月明かりに照らされ不気味に輝く刃は私に若干の恐怖心を与えた。

「おや、キミはこの鎌を見ても恐怖に怯えて逃げたりしないんだね。まあそれでも多少は怖いだろう？」

「ええ。でもこんなのはゴキブリを見つけた時と同じぐらいの怖さだからどうってことないわ」

「なるほど、僕はゴキブリ並みということか……。いいだろう、キミは五体を失い、地面を這いつくばるといい！」

キャップは鎌を構えロケットのように突進してきた。あいつ、魔法で宙に浮いてる。

私はとっさに買い物袋を投げつける。キャップは鎌で袋を切り裂いた。一振りしただけで真っ二つになった。だけどそれが私の狙いでもある。

袋から溢れる黒い液体。それがキャップに向かって一斉に飛び散った。

「なんだ、これは……！ 目に入って……痛い！」

ふっ、それはさっき買ったコーラよ。炭酸が目染みるでしょう！
キャップは悲痛な叫びをあげながら目を押さえている。あはっ、隙だらけよ！

「くらないさい！ 必殺、麗しき左ニーキック！」

「ぐわあああッ！」

顔面に思い切り膝蹴りをくらわせました。あゝスッキリした。
鼻血が出る？ そんなの知ったこっちゃないわ。

「さらば、ピエロ野郎！」

「ぐうッ……待て……！ 逃がしはしなグエウッ！」

私は去り際にもう一撃膝蹴りをくらわせ、猛ダッシュで逃げました。

第33話：打倒キャップ！

モモグリさんは鮮血のキャップに会ったそうです。殺されなくてよかったとホッとするクロウです。

キャップはきつとまだこの辺りに潜んでいると思います。どこかに隠れながらボクや他の魔法使いを狙っているのです。放っておけません。

ということで、モモグリさんは自宅にサワヤさんとリファ、シオダさんとロゼの四人を呼び会議を開くことにしました。

「司会進行役のB桃栗です。ちなみにこのBはbeautifulのBです。よろしく」

うん、どうでもいいね。

モモグリさんが挨拶の言葉を述べるとシオダさんが拍手を贈った。飲み会じゃないんだよ。

ちなみにこの会議はちゃぶ台を囲みながら行われていて、ちゃぶ台にはお菓子やジュースがセットされているからまるで何かのパティーみたいだ。

モモグリさんはブロッコリーをマイク代わりにしながら司会をする。

「さて、我々の前に現れた殺人鬼キャップ。これをいかにして対処するべきか、意見のある方は挙手をお願いします」

「あの……はい」

「どうぞリファちゃん」

「こ、校長先生にこのことを伝えて、助けてもらうのがいいと思います……」

「却下」

「え、ええっ！」

意見を聞いてから却下の判断をするまで一秒も経っていない。っていうかこの意見にはボクも賛成なんだけど。

「リファちゃん、わかってないわね。私はキャップに襲われたの、殺されそうになったの。ものすごい危険な目に遭ったわけね。で、私はかなりムカついたの。仕返しをしてやりたいわけよ。その仕返しの方法を考えるのがこの会議の目的なの」

えっ、ボクら六人で殺人鬼に立ち向かう気なんですか？ 馬鹿は休み休み言っしてほしいよ！

……あ、モモグリさんに睨まれた。今考えていることがバレたのかな……？

「私は秋子の意見に賛成よ。大事な友人に手をかけるだなんて許せないわ」

シオダさんはやる気満々だ。この人には始めからまともな発言をする期待はしてなかったけどさ。

「強大な敵に立ち向かうってゲームみたいだな。いいぜ、俺も話に乗った」

さ、サワヤさんまで……！ サワヤさんはちゃんとした意見を出してくれると思ってたのに！もしかして人間界の人ってまともな人はいないの？

くそっ、賛成は三人、反対も三人で五分五分の状態か。共に人間界とマホーツ界の人に分かれている。

なんとかして考えを改めてもらわないと……！

ここでロゼが挙手をした。

「はい口っちゃん、発言をどうぞ」

「キャップと戦うんは別にいいとして、何か作戦はあるんかいな？」
うん、たしかにそうだ。あっちは魔法使いの熟練者、それに比べてボクらは見習いなんだ。戦うにしたって実力の差がはっきりしている。負けるのが目に見えている。

……あれ？ ロゼ、今……

『キャップと戦うんは別にいいとして——』

戦う気アリですか！ ロゼも賛成派だったのかよ！

ああ、これで四対二に……。

と、モモグリさんは質問に答えた。それはボクを衝撃的にさせる答えだった。

「ノープラン！」

エエエエーッ！ 殺人鬼とやり合うっていうのにノープランですか！ 馬鹿っていうか無謀すぎる！

さすがにロゼも口をあんぐりとさせている。

「でも大丈夫。私は高校生の時体育の成績が五段階評価でSランクだったから」

いやいやいや、五段階評価なのにSで。んな馬鹿な話があったたまるか。

……ん？

あ、ごめん、馬鹿でしたね……。

「私は五段階評価でMAXだったよ」

シオダさんはもつと馬鹿だ。

「俺は六だったぜ」

サワヤさん、限界突破しちゃった。

「というわけでね、私ら三人は負ける気がしないのよロッチャー」
そののどこが自信に繋がるんだと言いたい。無茶苦茶すぎるよ人間界の人間。いや、目の前の人が特殊なだけだろうけど……。

「というわけで私達六人はキャップと戦いまーす。これはもう決定しました、変更できませんーん」

「ちよっと待ってよモモグリさん！」

さすがにもう止めないとヤバイ。普通の人間が魔法使いに立ち向かうなんて馬鹿げている。それに相手は熟練の魔法使い、それも殺人鬼。殺されるに決まっている。

「モモグリさん、馬鹿なこと言ってないで真面目にしようよ！ 本当に殺されちゃうよ！」

ボクは本気で叫んだ。モモグリさんには死んでほしくないから。するとモモグリさんはボクの頭をそつと撫で、優しい笑みを見せた。

「天才と馬鹿は紙一重だと誰かは言った。それなら私はその紙一重を乗り越えて天才になろう。そしてキャップをぶっ飛ばす。だから死にゃしないわ」

自分が馬鹿だと認めちゃったし、いまいち意味がわからないし。でもそう言ったモモグリさんの目は真っ直ぐで強かった。本当に負ける気がしないみたいだ。いや、勝つ気だ。

「ま、作戦はノープランだけどね」

「……………」

大丈夫なのかこの人……。

と、サワヤさんが挙手をした。

「せっかく六人が協力して何かをするんだから、チーム名みたいなものを考えないか？」

チーム名なんて必要か？

しかしモモグリさんは大いに賛成のようだった。

今度はシオダさんが挙手をした。

「ザ・マダガスカルズがいいと思います」

なんだそりゃとしか言いようがない。問答無用で却下された。

「ウチはチーム名なんかどうでもいいと思うけど、三人の成績を合わせてSuper Max Six'sってのはどうや？ ちょうど六人おるしな。あ、SはSuperにさせてもろたんやけど」

微妙……。

でもモモグリさんはその名前を気に入ったみたいだ。

「じゃあチーム名はSuper Max Six's、略してSM Sに決定！ みんな、頑張ってキャップをボコすわよ！」

ということでSuper Max Six's結成。

……すごく心配。

第34話..肘だ、キャップ!

お寿司がぐるぐる回る回る。

こんにちは、リファです。私達Super Max Six's
っていうチームは回転寿司屋に來ています。腹が減っては戦ができぬ、とのことですよ。

「カツ丼を食べて勝つ! なぁんてワンパターンなノリは嫌だからお寿司よ」

桃栗さんはお味噌汁を飲んでいます。まだお寿司は食べていません、お味噌汁だけ飲んでいます。既にお代わり済みです。せっかくだからお寿司を食べたらいいのに……。

横では塩田さんがクー君にお寿司を食べさせようとしています。アレです、あゝんってやらされているんです。私もクー君にやってあげたいかも……。でもクー君、露骨に嫌そうな顔をしてる。きつとさっきからカンピョウ巻きしか食べさせられていないのが不満なんだね。やっぱり他のネタも食べたいもんね。

沢屋さんは黙々とお寿司を食べ続けています。お皿がどんどん積み重なっていきます。いつかお皿が天井に着くんじゃないかと思うと心配になってしまいます。

「リファ、ちよつとそのタコ取って」

「あ、はい、ロゼちゃん」

「ありがとな」

私はタコをロゼちゃんに渡した。ロゼちゃんは満面の笑みでタコを食べ始めました。

「ロゼちゃん、タコが好きなの?」

「たこ焼き好きやから、めっちゃ好きや」

エセ関西人です。大阪の人を敵に回さないように気を付けてね。桃栗さんはいちやくお味噌汁以外のものに手を付け始めました。

エビフライです。なんでお寿司を食べないのかな……?」

「お寿司屋に来てお寿司を一切食べない伝説に挑戦しているのよ」意味がわかりません。そこは素直にお寿司を食べてほしいです。それなら定食屋に行ってほしいです。

……あ、でもしたら今度は「定食屋で定食を頼まない伝説に挑戦」とかい出しそうで怖いです。桃栗さんって一体何を考えて生きているのでしょうか。

ところで私の向かいの席に桃栗さんが座っているんだけど、さらにその後ろの席に誰かが座っているんです。なんだかものすごく見覚えがあるんです。

その人が横を向きました。ピエロでした。

——ピエロ？

きゃ……キャップ！

ど、どどどどどどうしよう！　なんでこんな所にキャップがいるのかな！

とりあえず落ち着かないと……。慌てたからお茶をこぼしちゃった。ロゼちゃんにかかった。リアクション芸人も顔負けのド派手なリアクションで熱がってる。さすがエセ関西人だね。あ、でも関西人がみんなお笑い好きみたいない思ひ込みは良くないよね。じゃあ前言を撤回して……。単なるオーバーリアクションだね、ロゼちゃん。

「ああん？　リファがお茶をこぼすのが悪いんやろがッ！」

怒られちゃった。ごめんね。

あ、そうそう、キャップがいるんだったよね。ついうっかり忘れてた。慌てないと。

どうしようどうしよう！　キャップがいるよ！

あれ？　別に慌てる必要はないよね。ごめん、ついうっかり。

とりあえず状況を整理します。

1. 私達はお寿司屋さんで食事中。美味しい。

2. 桃栗さんはお寿司を食べない伝説に挑戦中。

3. 私の向かいに桃栗さんが座っていて、さらに背中合わせの状態でキャップが座っている。

4. ロゼちゃんは大袈裟。

5. ちなみにみんなは食事に夢中でキャップの存在に気付いていない。

6. 私は今、メロンに手を出し始めました。

こんな感じかな？ 私しかキャップに気付いていませんメロン美味しいね。

このままキャップをスルーしてこの場はやり過ぎるか、それともみんなに教えてどうするか相談するか……。

後者かな。

私はクー君にキャップがいることを教えてあげようと思いました。

「カンピヨウはもうやめて……。カンピヨウ、カンピヨウ、カンピヨウ……カンチヨウ？ カンチヨウの別の呼び方ってカンピヨウっていうの？」

クー君が壊れました。大丈夫かな？

じゃあロゼちゃんに教えてあげよう。

「ロゼちゃん……」

「なんやッ！ またお茶を浴びせる気なんかッ？」

また怒られちゃった。でも今回は何もしてないよ？ こんなの悲しいよ。

桃栗さんがお茶を飲もうと湯呑みに手を触れました。

「熱うッ！」

湯呑みは思いのほか熱かったらしく、桃栗さんは素早い動きで手を引っ込めました。すると手を引っ込めたことにより、桃栗さんの肘がキャップの後頭部に勢いよくぶつかりました。ごっちゃんって。「んごううッ！」

キャップは奇声を発して倒れました。さすがに桃栗さんもキャッ

プの存在に気付いたようです。キャップの顔を見て驚いていました。
「キャップ……！ でも……気絶してる？」

今の一撃で気絶してしまったようです。桃栗さんがキャップの顔をつねりますが、まったく起きません。

「桃栗さん……どうするの？」

「どうするってリファちゃん……、決まっているでしょう？」

桃栗さんは、今度は顔面に肘打ちをしました。それも全力で。キャップの鼻から血が出てきました。

「さ、食事の続き続きつと」

「……………」

結局キャップはそのまま目を覚ますことはありませんでした。

帰り際に桃栗さんはボディブローをキメていました。さすがにそれは酷いと思いました。

「お腹も膨れてキャップをぶっ飛ばせて、まさに一石二鳥だったわね。じゃあ帰ろうか」

えっ、帰るのッ？

——そして次の日になりました。

私の元に一通の手紙が届きました。ライト校長先生からのものでした。

ライトです、お元気ですか？

人間界に逃亡したという凶悪犯キャップが捕まったとの情報が入りました。なんでも飲食店にて既に何者かによってやられていたようです。

人間界にいる魔法使いの皆さんはもう安心して大丈夫です。それでは、勉学に励んでください。ごきげんよう。

一件落着……かな？

第35話：桃栗の弱点

キャップが捕まりました。ざまーみろ、やーいやーい！

ということで皆さんご機嫌いかが？ 終始ハイなテンションの桃栗秋子です。最近のマイブームはイトコン——糸こんにゃくをおそばをすすめるかの如く吸うことです。

さて、キャップがいなくなり、私の周りに平和が戻りました。やっぱり悪は滅びるべきなのよね。正義は必ず勝つ！

「気絶しているキャップを散々殴っておいて、なにが正義だか……」
「シラップ、クロウ君！ 余計なこと言っているとイトコンを喉に詰め込むわよ！」

プルップルのイトコンを喉に詰まられせ悶え苦しむがいいさ！

「ところでモモグリさん」

「んっ？」

「足元にゴキブリがいるけど……」

「なあに、ゴキブリがどうかし——」

足元を見て硬直。

あの油ぎった茶色いボディにギザギザの足、そしてウニヨウニヨと動く触角——、

「ぐ……ごごごゴキブリよーッ！」

瞬間移動をしたんじゃないかというぐらいの速さでクロウ君のところに逃げる私。あのね、ぶっちゃけゴキブリは苦手なのよ。

「モモグリさん、前にゴキブリが現れた時はわりと平気そうだったじゃない。なんでそんなに怖がってるの？」

「遠くで見てるぶんには問題ナッシングなのよ！ 近付かれると嫌なの！ 半径一メートル以内のゾーンに入ってきたらダメなの！」

名付けてAM（秋子・桃栗）ゾーンなのよ！」

「ゴキブリが苦手だったなんて……ちょっと意外だね」

なに私の弱点を見つけたみたいな顔してんのよ。もしゴキブリネ

タで脅迫しようものならマジでぶっ殺すわよ。冗談抜きで。

「なんでゴキブリが嫌いな？ 別に怖くないでしょ」

「それには底なしの沼よりも深い、ディープな理由があるのよ」

あれは私が小学校三年生の頃だったかしら。

当時から周りを魅了する美貌を持っていた私は、昆虫採取に夢中だったの。

虫取り網を新体操のリボンのように扱う私……。それはまるで、小さな妖精がこの世に舞い降りた瞬間だったと言っても過言じゃないわ。それによって付けられた二つ名が『虫取り界のコマネチ』だったわ……。ん？ 確かコマネチって新体操の選手じゃないわよね？ ま、いつか。

陽が沈んでいるのにも気付かないほど虫取りに夢中だったわ。虫かごにはたくさん昆虫が詰まっていた。

頑張って取った昆虫、輝かしい栄光。ああ、命って素晴らしい。お父さんに見せたらこの虫達は逃がしてあげよう。

私は軽やかなステップを刻みながら家に帰ったわ。途中カエルを踏んだ気がしたけど、なんかめんどいからスルーしたわ。

「ただいま！」私は虫かごを頭上に掲げながら玄関を走った。早くお父さんに見せたいがためにね。

その時お父さんは雑誌を読んでいた。今思い返すと、あれは確かエロ雑誌だった気がする。

「お父さん見て、コオロギをいっぱい取ったよ！」

元気いっぱい虫かごを掲げる私。その光景は、まるで金メダルを獲得したオリンピック選手のようなだった。

お父さんは虫かごの中を見て、叫んだ。

「バッ……！ お前これコオロギじゃなくてゴキブリだよ！」

なんということでしょう。コオロギだと思っていた昆虫はゴキブリだったのです。虫取り界のコマネチ、痛恨のミスが発覚。金メダルは剥奪です。

「どこでゴキブリなんか取ってきたんだお前は！ 早く捨てろバカ！」

「う、うんっ！」

ゴキブリを捨てろ、と。

そう言われ、幼い私は虫かごの蓋を開けた。

勢いよく飛び出すゴキブリの群れ。祝杯のシャンパンが黒くなつたみたい。

部屋中に拡散するゴキブリ。お父さんは飛び回るゴキブリに驚愕してエロ雑誌を振り回す。

「このバカ野郎がーッ！ 部屋にゴキブリを放流するんじゃないっ！」

父激怒、エロ雑誌を握り締めながら。

私の顔にゴキブリが乗った。泣いた。大号泣。お部屋を中心に助けを求めた。

——思い出話、終了。

「っていうことがあってね、ゴキブリは苦手なのよ」

「……………」

クロウ君、心底どうでもよさそうな顔をしてる。自分から聞いておいてその顔、シンプルにむかつく。

「それはそうと、早く魔法を使ってゴキブリを始末してちょうだい！」

「はいはい……」

「前みたいにゴキブリを爆発させたら、クロウ君の今日のご飯はイトコンのみ（調味料使用不可）だからね！」

「エーッ！」

イトコンのみを食べるのが嫌なクロウ君は、ものすごく必死にゴキブリの駆除をしました。魔法によって強化された『鋼鉄新聞紙』を片手に、ゴキブリが完全に動かなくなるまで叩き続けていました。そんなにイトコンが嫌だったのかしら？

第36話：雨にも負けず、風邪なんかにも負けるわけがなく

せっせせっせとお粥を作るクロウです。

適当に塩を入れて味を整える。

ちよつと味見。……うん、こんなものかな。

出来上がったお粥を器に盛って、布団にくるまりながらウンウン唸っているモモグリさんの所まで持っていきます。

「モモグリさん、お粥作ったよ」

「ん……どうも」

それだけ言うと、体を起こしてお粥を食べ始めた。

なんとなくわかるだろうけど、モモグリさんは風邪を引きました。馬鹿は風邪を引かないというのは嘘なんだね。

「あ、手がすべったー」

「熱いッ！」

モモグリさんは熱々のお粥がくっ付いたさじを投げつけてきました。明らかに台詞が棒読みだったので、わざとです。というか、投げつけるという行為をした時点でわざとだというのがわかります。

「今、馬鹿は風邪を引かないんじゃないの？　みたいな失礼なこと考えてたでしょ」

こういうことに関してはやたらと鋭いモモグリさん。エスパーなんじゃないかとたまに思う。

「それにしてもこのお粥、味はまあまあとしても玉子が入っていないのは非常にいただけないわね。八十点」

玉子が入っていないだけでも一応高得点なんだ。

「言っておくけど、千点満点で八十点よ」

満点の値が大きすぎる。百点満点に直したら、たったの八点になるし。玉子評価は意外とデカかった。

散々ボクのお粥を批判しておいて、結局全部たいらげてました。残さず食べてくれて嬉しいです。

「クロウ君、デザートが食べたいな」

病人のくせに食欲旺盛です。まあ、何も食べないよりかはマシだ
と思うけど。

とりあえず冷蔵庫に入っていたアイスクリームを出しました。百
円で買った、抹茶味のアイスです。

「却下」

却下されました。

「アイスはハーゲンダッツじゃないと認めない」

この人贅沢です。

やれやれとため息をつきながら、何か別のものを探します。

プリンがありました。これなら喉にもスツと通るし、風邪引きさ
んにはちょうどいいんじゃないかな。

「却下」

またか。

「牛乳プリンじゃないと認めない」

ちよっとカチンときたので、冷蔵庫から牛乳を持ってプリンにか
けてやりました。

グーで殴られました。

モモグリさんは今日も元気です。

第37話：KYY（空気が読めない妖精）

あー、お仕事疲れた。早くご飯を食べて、ぐっすり寝たい桃栗秋子です。

重い体を引きずりながら、ようやく帰宅。疲れた疲れた。

「ただいまーっと。クロウ君、ご飯は何かなあ？」

台所を見るが誰もおらず、それなのにお鍋のお湯がグツグツ沸いていた。そして、お鍋の中に小さな小さなティッシュ箱サイズの女の子が入っていた。

「あら、アキーー」

蓋を閉めました。

なんか中から出してだのなんだのという声が聞こえるような気がするけど、きつと気のせいです。テレビの音か何かでしょう。もしくは幻聴。食材はおとなくするべきです。

と、どこからともなくクロウ君が慌てながら現れて、お鍋の蓋を取りました。洗濯物をたたんでいたようです。

「モモグリさん、なんで蓋なんかしてるの！」

「や、よく茹でられるように」

「フリージアを茹でないでよ！」

小さな女の子もとい、妖精フリージアちゃんはヒーヒー言いながらテーブルの上で倒れました。

「アキコさん！ あたしを茹で殺す気ッ？」

「まあまあ落ち着きなさいって、ファンタスティックちゃん」

「あたしはフリージア！ “フ”しか合っていないじゃないの！ あたしのこと忘れたのッ？」

忘れるわけじゃない。冗談よ冗談。これまでの一連の動作はすべてわざとだから。それぐらいわかりなさいよ。

「で、フリージアちゃん、なんでまたウチに来たわけ？」

「暇だから」

ウチは立ち読みできる本屋か。

「まったく、再会した早々になんてことするのよ。行動パターンが初めて会った時と同じじゃない」

歴史は繰り返すって言うし。

「とりあえず、またしばらくお世話になるつもりだからよろしくね、アキコさん」

「はいはい、ゆっくりして行ってちょうだい」

ということで、またフリージアちゃんと一緒に過ごすことになりました。

次の日の朝、フリージアちゃんが朝ご飯を作ってくれることになりました。なんでも、最近料理を作るのが趣味らしく、自分の腕前を見せてやりたいそうなの。

「アキコさん、クロウ、できたよ！」

さて、どんな料理を作ってくれたのかしら。一応にも妖精さんだから、それはもうメルヘンチックなものがあるに違いないと、妄想が一人歩きしてしまう。例えば、メイプルシロップたっぷりのパンケーキとか、森の野菜グラタンとか。

「さあ二人とも、召し上がれ！」

ジャーン！ というSEが鳴りそうな感じに料理を差し出してきた。

紫色をした魔ヨネーズがたっぷりとかかったパンケーキでした。

心なしか、生地の色も紫色です。ダークです。

「生地にも魔ヨネーズを混ぜてみたんだけど、どうかな？」

そういえばフリージアちゃんはマヨラーならぬ魔ヨラーだったわね。

紫色のパンケーキ……。ブルーベリーで作ったならまだしも、魔ヨネーズで作ったとなると食べたくなる。

戸惑いを隠せない私とクロウ君、つついあからさまに嫌そうな表情になる。「絶対不味いわよね」、「うん、下手したら吐く」と

目で語り合う。

「二人とも、何をそんなに変な顔してるの？ あ、そっか。お代わりがあるか心配なのね。大丈夫、そんなこともあるかと思って、お代わりはたくさん用意してあるから！ 遠慮せず食べて！」

勘違いをするフリージアちゃん。思わずため息が漏れる。

「フリージアちゃん、良いこと教えてあげる」

「なに、アキコさん？」

「最近人間界では、空気が読めないってことをKYって言うのよ」

「へえ」

「このKYーッ！」

第38話..魔ヨ地獄

さてさて、久しぶりにフリージアちゃんがウチにやってきたわけなんだけど、正直言って迷惑です。

理由としては、毎朝毎晩魔ヨネーズ料理を作るからです。それも大量に。

「今日のおく、晩ごっ飯はあく、エビ魔ヨおにぎりく！」

わーい、超いらぬい。魔ヨネーズはもう飽きちゃったわー。

……毎朝毎晩魔ヨネーズ。頑張って作るのを阻止しても、魔ヨネーズを使ったお菓子を作るという始末。

このままだと、わたくし桃栗秋子は魔ヨネーズノイローゼになってしまいます。魔ヨネーズを見ただけで発狂してしまうんじゃないかというぐらいのヤバさです。

こういう時は、困った時のクロウ君頼みです。フリージアちゃんの魔ヨネーズ料理をやめさせる知恵を貸していただきたい。

「うん、正直言ってもボクもそろそろ限界だったんだ……」

クロウ君はうんうん唸りながら解決策を考えます。私は側で見守ります。決して邪魔はしません。なぜなら、今回は私の命もかかっているから。

「モモグリさん、思いついたよ」

「あら、期待しちゃうわよ」

「ここは正直に、もう料理を作るのはやめてほしいって言おう」

フリージアちゃんはテーブルの上でノートに何かを書き込んでいました。鼻歌を歌いながら、そして楽しげに。

「明日はあく、魔ヨネーズサラダく、明後日はあく、んフッフフウく」

献立表……いや、死のメニューの作成に勤しんでいます。くそっ、早くあの陰謀を阻止しなくては、我々の命はあと数日も保たない。

急ぐんだ、クロウ隊員！ 出動っ！

「あ、あのさあフリージア……」

「なによクロウ？」

そう、まるで別れ話を切り出す彼氏の如く控えめに、そして申し訳なさそうに！

「もう魔ヨネーズ料理を作るのをやめてくれない？」

「……どうしてよ？」

あ、フリージアちゃんの顔が陰しくなった。

「まさか、まさか……もしかして！」

「理由に気付いてくれた？」

「あたしの魔ヨネーズ料理が美味しくて、これ以上病み付きになるのが恐ろしいのね？ 美味しすぎて、他の料理が食べられなくなるんじゃないかと心配なのね！」

わお、素晴らしく前向きな発言をありがとうございます。バーカ！私はクロウ君の後ろから『さっさと話を着けなさいよオーラ』を放つ。心なしかクロウ君が身震いしたような気がした。

「違うんだフリージア。ボクが言いたいののは、魔ヨネーズ料理ばかりで飽きたから、もう作らなくていいよって言いたいんだ」

よし、わりとストレートに言ったわね。

「……じゃあ、魔ヨネーズ料理以外のものも作ればいいの？」

「えっ？」

えっ？

「じゃあ次は傷油しょうゆを使った料理を使ってあげる」

傷油……なんてよく知らないけど、今度は傷油でノイローゼになっってしまうわ。

そんなのダメよ。精神を破壊しかねないこの行為、それを繰り返してはいけないの。歴史は繰り返すなんて言うけど、繰り返してはいけない歴史を繰り返さないように歴史を塗り替えていくのが私達残された人間の役目なのよ！ うん、なにを言ってるんだ自分は。

そのためには、フリージアちゃんには一切料理をさせないこと、

これが絶対条件になる。トーストを焼くのも、冷凍食品をレンジでチンするのも禁止。飲食に関わることはすべて規制しなくては生きていけないの。ヘタしたら、ゆで卵を普通にチンされかねないし。クロウ君じゃ当てにならない。仕方ない、ここはわたくし桃栗秋子様が直々に話すしかないわね。

「とうわけでフリージアちゃん」

「なに、アキコさん？」

「有無を言わず料理禁止」

「やだ」

……………。

ちよつとカチンときたわ。

「フリージアちゃん、もう一度言うわよ」

「なに？」

「料理禁——」

「やだ」

……………。

あ、あらやだ、私の握り拳が震えてる。

「じゃあフリージアちゃん、言い方を変えるわ」

「なに？」

「料理するんじゃねえ」

「やだ」

「やだじゃないわよーッ！」

もう怒った。許せない。

私は大きな洗濯バサミを取り出し、それをフリージアちゃんの顔に挟んでやった。

「痛いっ！ 挟むのは痛いわよっ！」

「貴様なんか……貴様なんか妖精を気取った悪魔だーッ！ 死ねえ

っ！ 貴様の死因は『洗濯バサミで挟まれ死』だッ！」

「きゃあああッ！」

——悪の陰謀を阻止しました。これでもう罪のない人間が苦しめられることはありません。

さようなら、フリージアちゃん。死因は『洗濯バサミで挟まれ死』……。

「ちょっと、勝手に人を殺さないでよ！」

しかしフリージアちゃんは私達の心の中に生きています。ふと思いで出す、洗濯バサミで顔を挟まれた時の不細工顔。私はそれを、一生忘れない……。

「だからあたしは死んでないって！」

さて、今日の晩ご飯は何にしようかしら。久しぶりにピザでも食べようかな。

「ちよつとアキコさん、無視しないでよ！ あたしグレるわよ！」

「クロウ君、何ピザが食べたい？」

「うーん、じゃあボクはシーフードピザで」

「オッケー。じゃあ私はイタリアンなやつにしようっと」

「だからあたしを無視しないでってば！ うわーん、アキコさんがあたしを苛める！」

うるさいので、ピザに魔ヨネーズをぶっつけたものをあげて黙らせました。

第39話：マホーツ界へ行こう前編

——西暦三千年、人類は滅亡の道を歩んでいた。

人類が生み出した核兵器をも上回る恐怖のマシン、マジハンパネー。見た目はいたって普通のオートマチック車だが、内臓された武器はマジで半端ねえ。

そのマジハンパネーが暴走した。早く止めなければ、人類の存続が危うい！

主演男優マイケル・アウチ！ 主演女優エリザベス・ナンテコッタ！

全米が泣きそうになった！

『MAJIHANPANE〜狂気満ち溢れるオートマチック〜』

○月×日、日本上陸——。

「ワンパターン！」

モモグリさんは映画のコマーシャルを見ながらそう言った。

「なんでもかんでも人類滅亡の危機って、そのパターン飽きたわ！お中元でそうめんをたくさんもらって、それを処理するために毎日食べないといけないぐらい飽きた！」

さいですか。

ボクは意味もなく訴え続けるモモグリさんを無視し、テーブルに積み上げられたお菓子の山に手を伸ばす。

すべてスナック菓子です。何袋あるのかな？ 多すぎて数えられないや。

なんでこんなにお菓子があるのかというと、モモグリさんがゲームセンターで取ってきたらしいです。ほら、よくお菓子がたくさん詰まった袋がクレイニングームにあるでしょ？ アレです。

フリージアは、さっきからスナック菓子に魔ヨネーズを付けて食べています。絶対太る。

「――でね、私が映画を作るなら、人類滅亡じゃなくて別の展開にする。例えば……そう！ ゴキブリ滅亡とか！」

モモグリさんはまだ何か言っていました。無視するけど。

「インカ帝国の滅亡とか！」

インカ帝国はとっくにないけど。

「インカ帝国が滅亡して、本当にインカ！ なんつって」

わ、さぶいオヤジギャグ。思わずさぶいぼが出ちゃったよ。下手な怪談話よりも身が凍えるよ。

「あたしなら、魔ヨネーズ滅亡が一番泣けるかなあ」

今のは魔ヨラーフリージアの発言です。っていうか、もう『魔ヨネーズの妖精』って名乗ったほうがいいと思います。最近魔ヨネーズネタばかりだし。

とりあえず、魔ヨネーズを知らない人のために、ボクが魔ヨネーズのことを教えますね。

魔ヨネーズは紫色のマヨネーズです。以上。

「私からしたら、人類が滅亡なんて漫画や映画だけのもんよ。実際人類が一気に滅亡するチャンスなんてそうそうないでしょ？」

チャンスって、オイ。

「モンスターの来襲、魔王降臨、未来都市における機械類の暴走、神の裁きなどなど。実際には有り得ないけど、娯楽として見る分には楽しいわよね」

うん、たしかに。

でもね、モモグリさん。その中で一つだけ、ボク達の世界では有り得ることがあるんだ。

それは、魔物の来襲。

魔物と言っても悪い魔物ばかりじゃない。良い魔物だっている。その証拠に、ボク達の世界――マホーツ界のコンビニで魔物がアルバイトをしていることがある。

昔、眼科でメデューサが働いていたのには驚かされた。「はい、それじゃあ私の目を見てくださーい」って、見れるもんか。石にな

っちゃうでしようが。

悪い魔物は本当に悪い。町を荒らすことはもちろん、人々の食べ物を奪ったり、公衆トイレをわざと詰まらせたり、振り込め詐欺をしたり、道端に画鋲を仕掛けたりと色々な悪事を働く。

このことをモグリさんに話したら、途端に目を輝かせました。

「私、マホーツ界に行きたいわ!」

突然何を言い出すんだ、この人は。

「マホーツ界に行って、悪い魔物を退治したい!」

勇者気取りでしようか。

っていうか、それ以前にマホーツ界へ行くのは不可能なんです。行くためには、魔法で人間界とマホーツ界との間にある空間を歪ませて移動できるようにしないといけないんだけど、学校の生徒レベルじゃそんな魔法は使えないんです。だからボクはそんな魔法が使えないから、マホーツ界へ行くことができない――、

「じゃあアキコさん、あたしがマホーツ界に連れて行ってあげる!」

「ホント? わーい、ありがとうフリージアちゃん!」

ふ……フリージアがいたあーッ!

そういえばフリージアも魔法を使うことができるんだった! 普段はあまり使わないけど、魔法のレベルはそこそこ高い。だからフリージアは人間界とマホーツ界を自由に行き来できる魔法を使うことができる。そのおかげでモグリさんの家に来られるわけ。

「よっしゃ! じゃあクロウ君、早く身支度をしなさい!」

い、今から行くのッ?

第40話：マホーツ界へ行こう後編

桃栗秋子、マホーツ界へいざ参る！

デジカメ準備よし、お財布準備よし、パーフェクト！

「モモグリさん、すぐく観光気分だね」

「観光しに行くようなものよ。楽しみだわ」

フリージアちゃんは魔法の詠唱に入りました。魔法の杖の代わりに綿棒を持ち、目を閉じ、精神を集中させ、静かに呪文を唱えます。

「セメスイシサ・フツイミヨ・リクアヒ・ドウロザンプーオ……」

意味はわからないけど、なんとなくマジカル！　って感じの雰囲気は出ています。

フリージアちゃんの足元から、青白い光を放つ魔法陣が浮き出ました。いかにも魔法ですよって雰囲気が出まくりです。おそらく、このお話全体を通して一番魔法らしい魔法なんじゃないかと思う。

光は次第に強さを増し、風が吹いてもいないのに服がなびいてます。アニメなんかでよくありそうなシーンです。

フリージアちゃんは、詠唱を終えると目をカッと開き、

「ひらけゴマ！」

結局最後はそういう呪文なのね。

フリージアちゃんの目の前の空間に、ウィーンってな感じで丸い穴が空きました。ウィーンといったらウィーンよ、自動ドアが開くような感じ。

これでマホーツ界に行ける！　と思ったんだけど、問題点が一つ。穴が小さい、小さすぎる。どう見てもこの大きさじゃフリージアちゃんしか通れない。

「アキコさん、わたくしフリージアから重要なお話があります」

「なによ」

「マホーツ界へ続く穴、これがあたしの魔法で空けられるサイズの限界です。つまり……」

「つまり？」

「モモグリさんはマホーツ界に行けません」

な、なんですってーッ！

マホーツ界に行けないだなんて、期待を裏切られたわ！ 見たいドラマを留守録していたのに、いざ見ようって時に野球が延長していて上手く録画できなかった時並みの裏切りっぷりよ！ この胸に残ったウキウキワクワクドキドキ気分をどうしろっていの？ やるせなさ爆発よ！

「あの、アキコさん、あまり落ち込まないで。あたしも魔法の特訓をして、いつかきつとマホーツ界に連れて行けるようにしてあげるから……」

「いつかって、いつよ？」

「あたしの魔法がレベルアップしたら」

「具体的にはいつ？」

「わからない」

「イーヤーヨー！ 今行きたいー！」

駄々をこねていると、クロウ君が「イー歳した大人がなにやっているんだか……」と言ってきたので、ビンタを一発キメてやりました。すぐく行きたかったんだもん、駄々ぐらいこねさせなさいよ。

畜生っ、いつか絶対マホーツ界に行ってやる！

第41話：桃栗秋子と泥棒さん

紺ちゃんがちよつと実家に帰るらしいので、一日だけウチでロッチャンことロゼちゃんを預かることになりました。

只今車で家まで帰っているところです。

「いやあ、お世話になります」

「気にしなくてもいいのよアッハッハー！ 賑やかになるから全然カマンベイベーよ！」

「桃栗の姉さん、相変わらずテンション高いなー。ウチも見習いたいわ」

「……！」

わ、私を見習いたいですってーッ！

こんなこと言われたのは生まれて初めて。

せいぜい言われる言葉といえは「うるさい」とか「ちよつと静かに」とか。まあ、言った奴にはビンタを食らわせたけど。

言った奴っていうのは勿論クロウ君だけど。

「ロッチャン……」

「なんや？」

「私の弟子にしてあげるわ！」

「な……なんやてーッ！ 断る」

そんな普通に断られると少しショックじゃないの。

ちなみに助手席にロッチャンが座っていて、後ろではクロウ君とフリージアちゃんがポテチを食べてます。そのクロウ君がさりげなく、「ロゼ、賢明な判断だよ」と言いやがったので急ブレーキをかけてやりました。案の定クロウ君は前の座席に頭をぶつけて痛がりました。ざまあみろ。

はい。で、私の家に到着。

ロッチャンはアパートの『よくもえ荘』という看板を凝視してい

ます。まあ気持ちは分かるけどね。

「前に遊びに来た時もあったんやけど、不謹慎な名前やなあ」

そう言う口っちゃんのアパートも『今にも崩れ荘』だけだね。

ウチに来る途中、私の仕事場であるスーパーで焼き肉セットを買ってきました。よって、今夜は焼き肉パーティーよ！

「みんなー！ 焼き肉は好きかい？」

「大好きやー！」

素直な口っちゃん。

「大好きー！ あと魔ヨネーズもー！」

しつこく魔ヨラーなフリージアちゃん。

「恥ずかしいから叫ばないでよ……」

ノリの悪いクロウ君。そういうコは玉ねぎしか食べさせませんからね。

「クロウ君、鍵開けてちょうだい」

「はいはいと……って、鍵開いてるよ？」

なんですって？

でも、たしかちゃんと戸締まりした筈なんだけど……。

ま、いつか。

——と思ったのもつかの間、玄関に入ると、靴箱とかがグチャグチャに散らかっていました。

こ、これは……！

「室内台風……！」

「なにそれ」「なんでやねんっ！」

クロウ君と口っちゃんのダブルツツコミが炸裂。ちよつと気分が良いです。

「モモグリさん、これは明らかに空き巣だよ。奥の部屋も物が散らばってる」

「床に靴の跡が残ってる。犯人は土足で入りおったみたいやな」
なんか家宅搜索をする刑事さんみたい。

散らばった物を足蹴にしながら中へ進む。キッチンも、居間も、

どの部屋も荒らされてる。

私はキッチンへ行き、グチャグチャになった中からホットプレートを取り出した。

「アキコさん？」

心配している様子のフリージアちゃんをよそに、着々と焼き肉の準備を進める。

「ちよっとみんな、ボサツとしてないでご飯の支度を手伝ってよ」

「エエーッ！」と三人。

なんでよ、お腹すいたんだからご飯が食べたいじゃない。

それともそれどころじゃないって？

どうでもいいじゃない泥棒なんて。盗られて困るようなものは置いてなかったし。

「さあみんな、早く焼き肉を食べようぜ！ 焼き肉を食べて満足しようぜ！」

「モモグリさん……」

「この人はただのどアホなのかなんちゅうか……」

なんかもものすごく呆れられてる？

でも私は他人の冷たい視線を気にすることはない。なぜなら慣れているから。悲しい特性ね。

その時です。

部屋の奥から見知らぬ男が現れました。

ダサイジャケット、色あせたジーンズ、安っぽいサングラス、パンチパーマ。手にはなんと、包丁。

明らかに泥棒、っていうか強盗。

私達が帰ってきて、逃げ場がなくなったから渋々登場したってところかしら。

「お前ら、警察を呼ぶなよ。呼んだらぶっ殺してやる！」

クロウ君、ロッチちゃん、フリージアちゃんは身構えました。何かの魔法でも使う気かしら？ ちよっと期待。

「モモグリさん、今のうちに警察に通報を！」

「はいはい。まったく、迷惑な泥棒さんよねえ」

せつかく焼き肉パーティーをしようと思ったのに邪魔するんだもん。ムカつく。

「おい女！ 警察呼んだらぶっ殺すって言っただろうが！」

「うっさいわね、ソフトボイルド」

「……？」

あだ名よあだ名。ハードボイルドには程遠いから、あんたなんかソフトで充分よ。

「くそ……馬鹿にしゃがってええ！」

泥棒さんは包丁を振り上げた。あらま、私刺されちゃう？

……なんて、私は簡単にはやられないわよ。

だってこっちには魔法使いと妖精がいるんだもん。

フリージアちゃんが指を鳴らすと、私の周りに魔法の壁が現れて、包丁から身を守ってくれた。

ロッチャんが不思議な呪文を唱えるところからともなく剣が現れ、それで包丁を床に弾き飛ばす。

魔法に驚き、さらに丸腰に状態という泥棒さんに向かってクロウ君がトドメを刺す。ゴルフクラブを振りかざすと、泥棒さんは勢いよく壁に叩きつけられた。

今の衝撃でピクピクしているところを私が紐で縛る。

「畜生、やめろ！」

「警察が来るまで大人しくすることね」

「頼む！ 謝るから許してくれ！ 俺が捕まったら、たった一人の娘が……」

む……、何か事情がありそうね。

「俺には小学生の一人娘がいるんだ。妻は数年前に病で倒れてな、そのまま逝っちまった……。貧乏ながらも頑張って暮らす俺と娘。そして今日は娘の誕生日なんだ。娘は前々からバイオリンが欲しいと言っていた。だが貧乏な俺にはバイオリンを買える金なんかを持っている筈がな——」

「シャラップ！」

一喝。

そして私の強烈なビンタ。

泥棒さんは沈黙した。

「あんたね……いい加減にしなさいよ……」

「……………」

「あんたのせいで……あんたのせいでね！」

「わかってる、俺のせいで娘が不幸になってしまったというこ——」

「焼き肉パーティーが台無しじゃないのーッ！」

「と……はい？」

「なにが『はい？』よコラア」

「へぶう！」

マウントポジションでビンタ。

「あんたの娘なんか知るか。情に訴えるのは嫌いなものよ」

「いや、しかし……ぐふうっ！」

顔面に肘打ち。

「ふん、ここであんたを逃がして『ありがとう、俺を許してくれるんだね』っていう展開になると思ったたら大間違いよ。罪はちゃんと償いなさい」

「そ、そんな！ 娘が——」

「黙れ泥棒猫が！」

「泥棒猫ッ？」

ん？ 泥棒猫はなんか違うなあ。まあいいか。

おっと、パトカーのサイレンが聞こえる。警察が来たみたいね。

さようなら泥棒さん。元気でねー。

第42話：塩田紺のお土産

こんにちは、モモグリさんラブ！　なクロウです。モモグリさんは本当に美しいです。

なんちゃって。クロウ君になりました私は桃栗秋子ご本人です。紺ちゃんが実家から帰ってきたのでロッチちゃんと別れ、ウチは再び三人になりました。

楽しかったなあ、ロッチちゃんとやった枕殴り。ひたすら枕で相手を殴るっていうシンプルかつ面白味のある遊びよ。殴られる目標はもちろんクロウ君だけだね。

で、紺ちゃんは紙袋いっぱいにお土産を買ってきてくれた。普通に嬉しいじゃない。

友人の優しさに感謝しつつ、家で貰った数々のお土産に目を通す。漬け物、海苔、お菓子……本当にたくさんあるわ。

「も、モモグリさん、コレ……」

クロウ君が見つけたのは、目をカッと見開いた自由の女神像だった。大きさは漫画の単行本の縦の長さほど。なんか怪しい。

「背中にボタンがある……」

「試しに押してみたら？」

「う、うん」

クロウ君は女神像の背中にあった小さなボタンを押した。

ポチッとな。

『フウッ！』

……。

……。

「もう一回押してみて？」

「うん……」

ポチッと。

『オウ、イエーイ。カマン、カマァン！』

……。

……………。

「ラスト一回」

「う、うん……」

ポチッ。

『イエスベイベー、カモンカモンカモンッ！　フウ〜エキサイティンググ！』

うん、廃棄処分決定。

「クロウ、こんな物が入ってたよ」

フリージアちゃんが見つけたのはアルバムだった。『クロウ君へ』と書いてあり、最後にハートマークまで付いていた。まあ、怪しい怪しい。

「まさか……ボクを隠し撮りしたアルバムだとか？」

いや、さすがにそれは……あるかも。だって紺ちゃんだし。

でもいざ中身を見てみると、紺ちゃんの実家の景色（田舎の自然）が写された写真が入っていただけだった。ちなみに全部の写真に紺ちゃんも写っていた。

「で、これをボクにどうしろと……」

同感。

とりあえずこれは押し入れに封印しておこう。

でも妙な物はごく一部だけしかなくて、あとの物は本当に貰って嬉しいものばかりだったので良しとしよう。

第43話：夢見の桃栗

夢を見た。

実家に帰った夢だった。

何故か家が洞窟だった。私は原人か。

洞窟が実家の筈なのに、どういうわけか私とクロウ君しかない。実家という設定の意味がない。

そしてクロウ君は山田さんチへピンポンダッシュをしに、私は川で水死体が流れていないかチェックに行きました。なにこれ？すると、川からどんぶらこどんぶらここと案の定死体が出てきました。

よく見るとマネキンなのですが、私はそれに気付かず、

「これはきつと鬼ヶ島の鬼の仕業ね！ 罪のない人を襲うなんて…許せない！」

燃え上がる正義の炎。

憎め、悪の存在を。

いざゆかん、鬼ヶ島へ！

と、その前に……。

お昼ご飯でも食べてから出発しよう。

「ただいま」

「おかえり、ビューティフルモモグリさん。今日のご飯は本場フランス仕込みの塩茹で卵だよ」

豪華なのかしょぼいのか。

「デザートは麗しき美女であるモモグリさんにピッタリ、リンゴ丸ごと一つだよ」

何かがおかしい。

そして私はご飯とデザートを食べ終え、鬼ヶ島へ行くことにしました。

「待ってモモグリさん。これを持っていくといいよ」

クロウ君から手渡されたのは、大根一本。
使い道は？

「行ってきました！す！」

「行ってるっしょい」

てくてくと道を行くと、突然道草からブルドッグが飛び出てきました。

「モモグリさんモモグリさん、お腰に付けた大根をくださいな。もしたらわたくしめがお供してさしあげます」

「犬が喋るなッ！」

ブルドッグは無視。

すると今度は猿がやってきました。

「キィキィキィ！」

「何言ってるかわかんッ！」

普通の猿に興味はないわ。

今度はキジが現れました。

「最後に残されたわたしにどうしろと？」

「帰れ」

動物は役立たずねえ。

そして私はついに鬼ヶ島へたどり着いた。

雷門みたいにデカイ門があって、『いかにもラスボスのステージにやって来ましたよオーラ』が溢れています。

門の前には見張りの鬼が立っていましたが、軽く会釈をただけで簡単に入ることができました。

そして通りすがりの奴に一番偉い鬼の居場所を聞くと、部屋まで案内してくれました。

「たのもー！」

勢い良く部屋に突入。一番偉い鬼は他の鬼より一回り大きい。

「あんたに言いたいことがある！」

指を差し一喝。

「みんなめっちゃくちゃ優しい鬼さんじゃないの」

特に案内をしてくれた鬼なんか、私を飽きさせないために途中で面白い小話をしてくれたりと最高だったわ。

偉い鬼は「お気に召したようで良かった」と笑いました。

「あ、これつまらない物だけど、ウチから大根を持ってきたから食べようだい」

「いやはやどうもすいません。ではお返しにコレをどうぞ」

柴漬けを貰いました。夕飯の時に食べよつと。

「ありがとうございます！ また遊びに来るわね！」

「はい、いつでもいらっしゃい」

いやあ、鬼って見かけによらず良い奴なのね。

っていうか、何のために鬼ヶ島に行ったんだっけ？ ま、いつか。

第44話：ささやかではございますが、どうぞお納め下さい

フリージアちゃんはマホーツ界へ帰りました。今回も人間界での生活を満喫したみたいです。よかったよかった。

それはさておいて、私のお母さんから小包が届きました。手紙もあります。

寒風身にしむ、冬支度の季節となりました。

秋子へ、お元気ですか？ お母さんは元気すぎて、熱血スポーツ漫画を真似てうさぎ跳びでトレーニング中です。朝晩欠かさずやっています。そしたら足首の骨を折っちゃいました。えへっ☆

それはそうと、美味しいみかんをたくさん送ります。いっぱい食べてください。いっぱい剥いてください。そして指が黄ばむがいいわ！

ということで、お母さんは星マークを使うほど元気みたいです。

みかんがたくさん入った箱が届きました。

みかん、みかん、みかん、みかん……とにかく山盛り。いくつあるのかわからないけど、とにかくたくさんある。

「あれっ、そんなにたくさんのみかんどうしたの？」

クロウ君は嬉しそうにみかんを眺めます。

「私のお母さんが送ってきてくれたのよ」

「ああ、あの変な手紙を書くお母さんね」

否定はしないけどね。

とりあえず一つ食べてみた。

皮を剥きまして、豪快に丸々一つを口に放り込む！

んー、うんうん、みかんだわ。まさにみかかね。おいし。

クロウ君はチマチマと筋とか薄皮を剥いてやがります。

んなもんチョップしてやります、チョップ。チマチマチマしてんじゃないわよ。ガバツと食べなさいよガバツと。

「どういう風に食べようがボクの勝手じゃないか」

「ふんっ、あんたのお好みで食べさせないわよ。オコノミー禁止」

「オコノミーって、エコノミーみたいな感じに言われても……」

「この家では私がルール。私が神。私に逆らうと天の裁き（ビンタ）が下るから、これからは常日頃から言動に注意しなさい」

「うわ、すごいジャイアニズムだ！」

「ジャツジメント！」

「あうッ！」

言動に注意しろと言ったばかりなのにね。

まあしかし、こんなにたくさんのみかんがあるわけだし、せっかくだから何か料理でも作りましょうかね。

フルーツポンチ？ ジャム？ それとも……。

やっぱりやめよう。めんどい。

「モモグリさん、せっかくだからリファやロゼ達にも分けてあげたら？」

「それもそうね。いつもお世話になってるし、少しぐらい分けてあげようか」

とりあえずそれぞれ十個ほど。これぐらいで充分でしょ。

「じゃあクロウ君、瞬間移動の魔法を――」

「そんな都合の良い魔法は使えないから、さっさと車で行こうよ」
「使えない魔法使いね、まったく。今までロクに約に立つ魔法を使った記憶がないわよ。本当に魔法の勉強をしているのかしら？」

「モモグリさん、聞こえてるよ……」

「だってわざと聞こえるように呟いたんだもん」

「ああ、嫌味ですね。嫌な人だ……」

「ジャツジメント！」

「んぶッ！」

だから言動には注意しろと言ったばかりでしょうが。学習能力がないわねえ。

第45話..微妙なアニメ

「えっとモモグリさん、これは一体何なんでしょうか……？」

「DVDよ」

テレビの前に山積みになされたDVDを見て驚愕中のクロウです。
読み終わって放置された週刊誌の山並みに山積みになっています。
そしてDVDのタイトルが、

『カマキリの呪い』

ある意味恐ろしいタイトルです。

――が、しかし。

ケースに描かれているのは、明朝体で書かれた『カマキリの呪い』
という文字と、いかにもマニアックなアニメの女の子キャラ。

本当に何ですかコレは？

「紺ちゃんから借りたアニメよ。クロウ君の魔法の勉強にと思って
わざわざ全巻セットで持ってきたんだから」

微妙にありがたくないです。

いや、それ以前にこんなアニメが魔法の勉強になるわけがない。

「このアニメ、魔法使いが物語の舞台となっているんだって」

カマキリが魔法でも使うのでしょうか。

――まあ、なんだかんだで見る羽目になってしまいうけですが。

二人でテレビの前に座り、DVDプレイヤーの再生ボタンを押す。

「さ、始まるわよ！」

「始まっちゃうね……」

色々と不安です。

テレビを見る時は部屋を明るくして、

できるだけ離れて見てください。

……おいそのボケ、離れろって言ってるだろうがよッ！ 百メ
ートルくらい下がれッ！

なに、見えないだと？ 知るか！ じゃあ見るな！

(※OP曲)

『膝枕、顔にエルボー』

作詞…峰内 頻史

作曲…花ヶ戸 尾俊

君の柔らかい膝枕 僕は夢の中へいざなわれる
君は僕の髪を撫で、そつと顔を覗き込む
にこりと優しい笑顔を見せて

僕の顔に真っ直ぐエルボーを入れる……

「寝顔が憎たらしい」と言われても

そんなのどうにもできないから

笑顔のままで連打しないで

いつか鼻血が出ちゃうから

君の素敵な膝枕 低反発枕にも勝るよ

既に夢か幻か、癒やされるサプライズ

こぼれ落ちる紅の雫^{くれない}

鼻の骨が折れたかもしれない……

第一話…呪いの始まり

東京都内のとある家、一人の女の子は朝から慌ただしい様子で家の中を駆け回っていた。

日本人らしい黒いセミショートの髪、目はぱっちり大きくやつり目。前髪をピンでまとめてさっぱりとした印象。物語の時期は夏だから、白を基調とした爽やかな夏服を着ている。

「お母さんのバカー！ 起こしてくれないから遅刻しちゃうじゃないのさ！」

なんともベタな、朝のドタバタ。

「ユキ、ご飯は食べないの？」

おたまを持って叫ぶ母親。薄ピンク色のエプロンがよく似合う。

ユキとは慌ただしい様子の女の子のこと。本名は田中雪^{たなかゆき}、高校二年生の女の子。

「ご飯なんか食べてる暇はないよ！ 今急いでいるんだから！」

しかし母親は「せめて味噌汁だけでも」としつこく叫ぶ。雪は仕方なく味噌汁を一気に口に含み、そして吹き出してしまう。ワカメが喉に張り付いてしまい、むせたのだ。

「行ってきます！」

「お弁当机に置きっぱなしよー？」

「あーもうヤダー！」

朝から日差しが強くて、じんわりと汗がにじみ出る。夏だから暑いのは仕方ないのだけど、雪は暑さにはあまり慣れていない。そういう時は「暑くて溶けちゃう」とへばり、友人に「名前が『雪』なだけにね」とツッコミを入れられるのが日課となっていた。

しかし今は遅刻しないために通学路を全力疾走している。

食パンでも食わえながら走れば、曲がり角の所で見知らぬ美男子とぶつかって「あ、カッコいい！ 胸キュン！」というベタ過ぎる展開になっていたのだろうけど、このお話はそういった展開に持っていく気はまったくなかった。

実際は曲がり角を曲がれば、

「きゃっ、カマキリ踏んじやった！」

この始末である。

ペチャンコになり体液を垂れ流すカマキリの目は、雪のことを悲しげに見上げていた。

「おはようッ！」

雪は教室に滑り込んだ。

時計の針は八時二十五分を指し示している。登校時間は八時三十分。意外と余裕をもって到着できた。

しかし、何故だか担任の若い男教師が既に出席を取っていた。

「田中、残念だがお前は遅刻だ」

教師が言った。

「いやいや先生、間に合ってるから遅刻じゃないですよ」

「いやいやいやいや、残念だがあの時計は五分遅れているんだ。だから今はもう八時三十分、タイムリミットを過ぎているんだなコレが」

「なっ、なんですって！」

自分の携帯電話を見ると、悲しいことに八時三十分と表示されていた。それもデジタル表記で。

——一時間目、国語。

小太りで眼鏡をかけた中年の男の先生が、ざわついた教室を静めた。

「はいはい、じゃあ前回言った宿題の確認をするよ」

宿題——漢字の書き取り。なんだかやたらと難しい漢字を出された記憶がある。

「指名した者に前に出て書いてもらうから。はい、えー……田中！こんな時に限って自分が当てられる。雪は先生を恨めしく思った。黒板に平仮名が書かれた。あれを漢字に直すらしい。

ちゃんと宿題をやっておいたからなんとなく分かるが、それでも

頭がモヤモヤする。忘れかけているみたいだ。

『あんぎゃ』

雪はチョークを持ったまま固まった。

あんぎゃ、アンギヤ……あんぎゃ？ 宿題はちゃんとやったのにな……。たしか始めの字は『行』だった気がするけど、二文字を忘れた。うん、忘れたの。

「田中、宿題サボったのか？」

「いえ、やったけど覚えていないだけです！」

「そうか。でも覚えていなかったから減点な」

「ええーっ！」

続く二時間目、物理。重りを使う実験の最中に、重りを足の薬指に落として内出血。

三時間目、体育。プールで泳いでいたら両手足をつってしまい溺れた。危うくゴリラみたいな体育教師に人工呼吸されそうになった。四時間目、自習。教室に先生がいなかったから友達と談笑していたら、笑い過ぎて息ができなくて死にそうになった。

そんなこんなで昼休み……。

「今日は絶対に何かがおかしい！」

雪は叫んだ。

今は仲の良い友達と弁当を食している。

「だって朝のテレビで占いがやってたけど、私の星座は一位だったもん！」

「どうどう、ユキちゃん落ち着いて」

眼鏡をかけて肩まで伸びた長い髪の女友達——加藤希美は両手首かとうのぞみをパタパタさせて「まあまあ」といった動作をした。

「ということはだね希美、私はテレビ局に騙されたということかしら？ こりゃあ訴えてやらないと気が済まないわよ」

「所詮占いなんだからそこまでしなくても……」

「シャラップ！ 不正をもみ消すような社会は大嫌いなものよ！」
それより、朝あれだけ寝坊すると騒いでいてテレビを見る余裕などあったのか不思議だ。

雪は好物である鶏の唐揚げを箸で掴んだ。が、滑って教室の床に落としてしまった。

大好物であるためショックは大きい。こう、胸の気持ちを大根おろしのようにジョリジョリやられたような気分であると本人は言う。

「不幸だわ……、あたいは今人生のどん底にいるだわさ……」

「たかが唐揚げでそんなに落ち込むことないでしょ……？ っていうか口調が変だし」

「もうイヤこんな日常！ 泣いていい？ 泣いていいかな？」

「ユキちゃん、呪われてるんじゃないの？」

「なんで私が呪われなくちゃいけないのよ。私はいつでも清き正しい行いをしているのに」

「例えば？」

「んー、寝る前に胸の前で十字架を刻んでおくとか」

「どこ教の人間なのよあなた？」

「まあ、でも今日学校に来る時カマキリを踏んじやったけどね」

「あ、じゃあそのカマキリに呪われたんだよきつと」

「あはは、カマキリにそんな力があるわけじゃないじゃない！」

その時はなんとも思っていなかった。呪いなんて馬鹿馬鹿しいと思った。

でも――

第一話、終

「えっ、第一話がえらく中途半端に終わったよ？」

「終わったわねえ」

普通なら今のところでCMを挟むでしょ。まだ魔法とか出てきてないよ。

「モモグリさん、これ……全部見るの？」

「んー、どうしょつか。なんかイマイチよね」

とりあえず、このDVDは適当に放置されることになりました。

第46話：変人イケメンタレントと麗しき美女

日本某所――

「ふっ、テレビの前のレディ達……おコンニチハ。みんなを照らす眩い太陽、池照ヒカルだよ」

テレビカメラの前で一人の青年が喋っていた。

池照ヒカル……今売れに売れているイケメンタレントだ。

整った顔、凛々しくて少し幼い感じ。髪は少し長めで茶髪。服は都会の真ん中だというのに真っ白なタキシード、やたらと目立つ。

池照は今、テレビ撮影をしている。

『その辺の町に行こう』という番組で、適当に選ばれたその辺の町へ行き、適当に観光をして帰るといふなんともゆるい番組である。「今日も、レディ達を素敵な世界へ招待するよベイベー」

さっきの台詞でもなんとなく分かっただろうが、池照ヒカルはナルシストである。

カメラに向かって指を差し、「バキューン」と銃で発砲した真似をする。そして白く輝く歯を見せてニヤリ。そんなナルシスト池照である。

「僕は魅惑のスナイパーさ……」

池照ヒカルは意味不明なことを呟き、ムーンウォークでフレームアウトした。

場所が変わって住宅街へ。

「いやあ、それにしてもさっきたこ焼きを食べただけどスゴく美味だったよ。『ロシアン』っていうお店だからレディ達も行ってみるといいよ」

なんだか危ない名前だ。

「とまあ住宅街にやってきた理由はほかでもない、この町の住民にインタビューをしてみようっていうことなのさ。……おっと、ちょ

うどあそこに人がいるじゃないか」

池照ヒカルはクルクル回りながら通行人に近付いた。

「やあ、おコンニチハおじいさん。ちょっといいかな？」

「なんだあんちゃんは？ オラに何か用だか？」

「僕は今この町のことを聞いているんだ。この町の良いトコロを教えてくださいませんか？」

「ああ、そうだなあ……。今日そのスーパーで卵が安がっだな」

「そうですか、たしかにそれは良いね。僕もあとで買いにいくよ」

「どころでこれはカメラかあ？」

「ああ、テレビ番組の撮影だよ」

「あんれまゝテレビだど！ オラなんかを映すのはやめてくんろ！」

「はっはっは、照れなくていいんだよおじいさん！」

またちよつと場所移動。

池照ヒカルはバレリーナのようにクルクル回りながら歩く。

「さあさあ、次はどんな人に出会うかな〜！ 僕は恋愛台風さ！
ぐるんぐるん！」

スタッフは時折、実はこの人お笑い芸人なのではないかと思っ
ている。

「おや、あそこに若い女性がいないか。早速インタビューだ
！」

ぐるんぐるん回りながら女性の元へ。

「おコンニチハ！ 池照ヒカルだよ！」

「あ、変人だわ」

普通に言われた。

「僕は池照ヒカルだよ？ テレビで見たことないのかい？」

「あゝ、そういえば見たことあるかも。あんた本物？」

「そりゃそうさ。ほら、そこにカメラもあるし」

「わわっ、テレビカメラじゃない！ ちよつ、あの……コホン、桃
栗秋子と申します」

いきなりしおらしくなった。

「ところでレディ、今この町の良いトコロを聞いたりしているんだけど……」

「この町の良いトコロ？ そうねえ、それといった特産品とかはないけど、四丁目の喫茶店『カッフィー』なんかがなかなか洒落ててイイかも」

「ふむふむ」

「それから、そうねえ……」

「……………」

池照ヒカルは桃栗の顔をよく見てみた。

一般人のわりにはなかなか綺麗な顔立ちをしているではないか。まるで現代に生きるクレオパトラだ。

「――池照さん、私の話聞いてた？」

「へっ？ あっ、ああ……なんの話をしていたんだっけかな……」

「この町のお勧めスポットを教えてあげてただけだ」

話を聞いていなかった池照に対して桃栗はムツとした。タレントだからって一般人の話をスルーするとは何事か。カメラが回ってなかったらフランケンシュタイナーをキメていたところだ。

そんな桃栗の表情を見た池照ヒカルは、より一層気持ちを惹かれた。少し怒った表情もなかなか可愛いではないか、と。

（ヤバイ、僕は完全にこの女性に惚れてしまったようだ！）

物好きもいるものである。

明らかに池照ヒカルの目つきが変わった。それはまるで、回転寿司で食いたいネタが流れてくるのをジッと睨む人のような目つきだった。

さすがに桃栗ですら引いてしまった。

「桃栗秋子さん……だったかな？」

「え、ええ……」

「よかったら撮影が終わった後に、僕と優雅なティータイムでも過ごさないかい？」

「……はい？」

「ぶっちゃけデートに誘っているのさ」

「……………」

少しの間を置いて、

「エエーッ！」

「ふっ、まあイケメンタレントである僕にまさかのナンパを受けるなんて夢にも——」

「ヤダ」

あっさりと断った。

……が、しかし。

「それは『やったー大好き』の略として受け取ってもいいのかな？」

「あんたバカじゃないの」

「バカっていうのは『バースデーはいつ？ その日がきたらケーキを買ってあげる』の略かい？」

「どこをどう略したらバカになるのよ！」

「もちろん『バースデー』と『買う』の部分だけど？」

「そんなさも当然ですと言わんばかりの顔で言われても困るんだけど」

この人は完全におかしいと悟った桃栗は、急いでこの場から逃げることにした。

「待ってくれ秋子さん！ いや、僕の未来のお嫁さん！ いや、プリンセス！」

「誰があんたのプリンセスになるものですか！」

「じゃあ姫！」

「あんた死ね！」

「死ねっていうのは、『仕方ないから年末にまた会ってあげるわ』の略として解釈していいかな？」

「略し方が無理矢理過ぎるのよ！」

桃栗は全力疾走で逃げ切った。

ぽつんと残された池照ヒカルは地面にひざまずき、コンクリート

に拳を打ちつけた。

「絶対に……絶対にあの麗しき美女を僕のお嫁さんにしてやる！」
スタッフは彼がストーカーになるんじゃないかと不安になった。

第47話..大変迷惑な変態

ピンポーン。

あ、誰か来た。

でも今洗濯物を取り込んでいるので手を離せないクロウです。モグリさんは仕事仲間とお出かけしていません。

ピンポーン。

今手が離せないんだって。もう少し待ってくださいな。せっせっせ。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピンポーン。

連打しないでください。誰だか知らないけど落ち着いてください。

……………。

あ、諦めちゃったかな？

カチャカチャ……………。

…………ん？ なにこの怪しい音？

ガチャン！

——！

鍵が開いたッ？

「誰もいないのかな？」

ああそっか、空き巣だね。わずか数秒で鍵を開けるだなんて、なかなか熟練したピッキングテクニクだ。

ボクはアイアンのゴルフクラブを抱えながら物陰に隠れた。相手が隙を見せたら魔法で捕まえて警察に突き出してやるんだ。

「秋子さんはいないのかな？　せっかく会いにきたのに……」

現れたのはなんともカッコイイ男の人だった。普通にしたらモテそうだ。

もしかしてモモグリさんのストーカー？　趣味悪——いや、ゴホゴホ！　変わった人もいるものです（フォローになってない）。

空き巣が後ろを向いたところでゴルフクラブを振りかざす。ゴルフクラブから衝撃波が放たれ、空き巣の人は壁に頭をぶつけてよろけた。さらにもう一振り。近くにあったビニールテープが手足をグルグル巻きにして身動きができないようにした。

「わ、わ……！　なんだいなんだい！　なんだこりゃあああッ！」

「今から警察に通報しますからね」

ボクが電話に手をかけると、空き巣の人はものすごく慌てながら「それはやめてくれ！」と訴えた。

「キミは僕を知らないのかい？　テレビでよく見るだろう！」

「ごめんなさい、ピンときません」

「池照ヒカルだよ！　超イケメンタレントの池照ヒカル！　またの名を『恋のナポレオン』とも言う」

「通報しますね」

「だから待ってくれて言ってるだろ！」

何なんでしょうかこのイケメン空き巣は。今さら見苦しいです。

「だってピッキングして不法侵入した時点でアウトだと思いますよ？」

「ピッキングじゃないよ。最後の鍵を使ったからどんな扉も開けら

れるんだ」

某有名ゲームじゃないんだから。

「まあ、とりあえず話だけでも聞いておきます……。なんで空き巣なんかやっただんですか？　もしかしてモモグリさんの下着とかを盗もうとしたんじゃないですか？」

「僕はそんな変態なこととはしない。ただ秋子さんに会いたかっただけさ」

ストーカーをしている時点でアウトだと思うけどね。

「ほら、お土産だって持ってきたんだ。その紙袋に入ってる」

ボクは池照さんの紙袋を覗いた。何かの箱が入っていた。箱を開けると、中に入っていたのは……。

「えっと、このヘアバンドは……？」

「犬耳ヘアバンドだよ」

なんて物をお土産にしてんだこの人は。

「あの秋子さんが犬耳を着けてごらんよ。なかなか似合うと思わないかい？」

「……………」

「ワンとか言っごらんよ。ものすごく可愛いと思うよ」

まあ、モモグリさんは見た目だけは美人だからね、見た目だけは。だから否定はしない。

だけどね、モモグリさんが犬耳を着けたら可愛いどころかジャツカルになるからダメだよ。絶対殺られる。

「あと、もう一つお土産があるんだ」

もう一回紙袋を見る。今度は猫の肉球をかたどったフカフカの手袋が入っていた。なんてマニアックな物を買ってんだ。

「秋子さんにすごく似合うと思うんだ」

でも猫パンチどころじゃなくなるから危険だと思う。ライオンレベルにパワーアップすると思う。

「ところでキミは秋子さんの弟さんかい？　いや、でも似てないね」
「ボクはただの居候です。親戚とかでもありません。それはそうと、

通報してもいいですか？」

「それは勘弁してほしい。タレント生命にも関わるし、秋子さんにも会えなくなる」

だったら空き巣やストーカーなんかしないでほしいです。すごく迷惑です。

「頼む！ 見逃してくれ！ もうこんなことはしないから！」

「……ホントですか？」

「マジでマジで、超大マジ！ この『ハニプリ』が嘘をつくわけがないだろう？」

「ハニプリ？」

「ハニカミ王子」

あんたハニカミ王子じゃないでしょうが。

まあ、でもこんなに必死に言うんだから一応反省はしているのかな？

「じゃあ今回は見逃してあげますから……。もう悪いことはしないでくださいよ？ あなたは一応タレントなんですし」

「ああ、モチのロンさ！ この池照ヒカル、約束は絶対を守るタイプのイケメンだからね！」

ホントかよと言いたい。

「じゃあね！ 今度来る時は普通に遊びに来るから！」

池照さんはクルクル回りながら帰った。やっぱり通報するべきだったのでしょうか？

そして残された犬耳ヘアバンドと肉球手袋は、こっそりとロゼに渡してシオダさんにあげることにした。あの人なら持っていて不思議じゃないだろうし。

っていうか、もう来ないでください。

第48話：実技試験・ついに魔物と会えるかも

「実技試験？」

すつとんきような声をあげる私、桃栗秋子です。

ある日、クロウ君がいきなり「今度試験がある」とか言い出したの。

「今頃試験？」

「別に今頃でもないよ。筆記試験とかなら、モモグリさんの仕事とかにやらされてたし」

らしいです。よくわかんないから別にいいけど。

「で、実技試験って何をやるの？ やっぱ魔法の試験なんでしょ？」

「魔法の試験と言えば魔法の試験だね」

なに、その微妙な言い回し。

そして次の瞬間、クロウ君の口から出たのは衝撃的な一言だった。

「モモグリさんも参加するんだよ」

「……なんですってーッ！」

何故に私まで試験をやらにやいかんのですか。

「今回の実技試験は、他人を守りながらの戦闘試験なんだ。だから、一般人であるモモグリさんを守りながら戦うのが試験のルール」

「待って、まだいまいちよくわからないんだけど……。っていうか戦闘試験？」

「あつ、うん、そういえば全然言ってなかったけど、ボクは学校で戦闘系の科に入っているんだ」

クロウ君が戦闘系の科に？ 似合わない！

「戦闘系の他にも色んな科があるんだけどね。それで、ボクの科は主に魔物と戦ったり、人間界で言う警察になりたい人が入る科なんだ。だから基本的なことは勿論戦いに関することを学ぶんだよ」

「はあ」

「マホーツ界にはたくさん魔法使いがいるけど、みんながみんな魔物に対抗する力を持っているわけじゃないんだ。例えるなら、そうだなあ……RPGゲームにするとボクらが戦士で、他の人は店員や神父とか非戦闘員な感じ。だから力のあるボクらがみんなを守ってあげないといけない」

「で、なんで私も試験に参加しないといけないの？」

「だから、他人を守りながらどこまで戦えるかを試すわけ。参加するって言っても、モモグリさんは何もしないでボクと一緒にいればいいだけだから問題ないよ」

とりあえず私はクロウ君の横にいればいいと。

オッケー、それならよし！

「でもちよつと待って。戦うって……何と戦うの？」

次の瞬間、クロウ君の口から出たのは驚愕の一言だった。

「魔物」

「なんですってーッ！」

魔物、まもの、モンスター。

マジ？ ついに魔物が見れるわけ？ いやっほーい！

魔物といえば思い出す……昔やってたゲーム、ファイナルファンタジイを。

年老いた爺さんが世界を救うための旅をするゲーム。

当然魔物が出てきて、幼いながらも戦闘に興奮したものだ。

それにフリージアちゃんの魔法じゃマホーツ界に行けなかったから、ついにやつといよいよ私もマホーツ界に行けるのよね！

「いや、試験は真夜中の人間界で、魔物を放して行われるんだけど

……」

……………。

……………。

ケッ！

「……って、そんなことしたら人間界のみんなに魔法使いの存在がバレるじゃない」

「それは先生達が魔法でなんとかするから大丈夫」
ふうん、まあどうでもいいけど。

試験は今度の真夜中。ちょっと楽しみかな。
このお話、バトル系にジャンル移動かしら？

第49話：実技試験・目指せ二百ポイント以上！

——あつという間に今度の真夜中。

時計が零時になったところで、秒針はピクリとも動かなくなりました。学校の仕業ね。

「時間は今から三時間。ボクはモモグリさんを守りながらできるだけ多くの魔物を退治する」

いつになくクロウ君のことが頼もしく見えます。

すると、どこからともなく眼鏡をかけた男性が現れました。瞬間移動ってやつ？ 凄いなあ。

「……今回クロウの監督をするカンムです」

あら懐かしい野郎ね。家庭訪問以来じゃない。

「……説明。クロウはパートナーを傷つけてはいけない。その場合……減点。別にパートナーと協力して戦っても構わない……が、加算される点は少なくなる。戦闘不能、もしくは時間が経てば終了。以上」

相変わらず暗いわこの野郎。

「……準備はいいか？」

「はい！」

とクロウ君。魔法使いハットを被り直し、ゴルフクラブを手に持つ。

「時間がきたら知らせる。くれぐれも気を付けるように」

カンム先生はストップウォッチを取り出し、

「試験……開始」

地味々に試験が始まったのでした。

誰もいない町の中。

街灯が朧気に道を照らす。

私はスポーツシューズを履き、軽やかなステップで魔物を探す。

「モモグリさんは極力戦わないでよ」

なんか言ってきやりました。

「私だって戦いたい」

「それだと点数が少なくなるって言われたばかりじゃない。ボクは良い成績を残したいんだ」

ふんっ、真面目君め！

ちなみにカンム先生は私の家で待機です。離れていても魔法で私達の様子が分かるらしいです。

と、その時――！

「モモグリさん、後ろ！」

「むむっ！」

民家の屋根からまん丸で透き通った謎の物体が飛び降りてきた。ぶよぶよとした体質で、触ったら気持ち良さそう。

「クロウ君、もしかしてコイツが魔物？」

「うん、ゼリインって呼ばれてる魔物だよ！　ここはボクが魔法で――」

「死ねやーッ！」

「蹴ったーッ！」

私がサッカー日本代表並みの蹴りでシュートしてやりました。ゼリインとやらは壁に激突、ぐちゃりという嫌な音をたてながら飛び散りました。

「ふっ、口ほどにもないわ……」

「ボクがやるって言ったのに！　モモグリさんは大人しくしててよ――」

うっさいバカ。

『Eランクモンスター撃退。しかしパートナーの戦闘参加により減点。クロウ、二ポイント獲得』

頭の中にカンム先生の声が響いた。テレパシーってやつかしら？

「ほらあ、モモグリさんが余計なことするから点数減らされた」

「ところでEランクって何？」

「それぞれの魔物に定められた強さのことだよ。強い順からA B C D E になってる。今倒したゼリインはEランク、一番弱いランクの魔物だから倒しても貰える点数は低いんだ」

Aランクの魔物……見てみたいわ。きっと巨大で凶暴でカッコイいに違いないわ。うーん、ボッコボコにしてやりたい！

「それなのにモモグリさんが倒しちゃうから、ただでさえ少ない点数がより少なくなっちゃったんだよ！」

「ちなみに聞くけど、クロウ君が一人で戦った場合、どのぐらいの得点が貰えたの？」

「よ、四ポイントぐらいかなあ……」

どちらにせよ少ないわよ馬鹿。

「試験を合格するためには、最低でも二百ポイントは獲得しないといけないらしいんだ」

「うわ、全然足りないじゃない！」

「だからなるべくたくさんさんの得点を稼ぎたいから、モモグリさんは引っ込んでてって言ってるんだよ」

私に向かって引っ込んでろ、ですって？

あーもう、なんて生意気なコになったのかしら。私の心の中でクロウ君に対する評価が一億ポイントぐらい下がったわ。

ま、冗談だけど。

第50話：実技試験・時の流れは早いもので

その後私達は二頭の魔物を倒した。

一頭はDランク、六ポイント。もう一頭はまたEランク、でも二ポイント。二頭共私が倒したから獲得ポイントは少ないです。

現在の累計ポイントはたったの十ポイント。少ない。

――残り時間……二時間半。

それにしても……寒い。

今の時期十二月の中頃、もうすぐクリスマス。クロウ君と出会ってから一年が経とうとしている。

一年か……。

クロウ君を見してみる。厚いコートを着て、白い息を吐きながら寒そうにしていた。今は夜中だし、今日はいつもより気温が低い日だったもんね。

ちょうど自動販売機の前を通りすがったから、何か飲み物でも買ってあげることにした。

「コーヒーでいい？」

「あ、ホットココアで」

お子様チョイスね。まあ甘くて美味しいけどね、ココア。カカオがたっぷりなココアなら苦いけど。

小銭を入れてスイッチを押す。ガコンツと缶が出てきてそれを取る。

そして、あったかい缶ココアをクロウ君の顔面に押し当ててみた。

「熱いっ！ 火傷しちゃうじゃないか！」

「秘技・インフェルノナックル」

名前は今考えてみた。

私も自分で飲むものを買った。あったかいレモンティー。果汁一パーセント入り。果たして果汁を入れる意味はあるのかしらと問いたい。

「ねえモモグリさん」

不意に話しかけてきた。

「もうすぐ出会ってから一年経つね」

「そうね。去年のクリスマスにクロウ君がやって来たのよね」

「クリスマス、来週だよ」

「そうね」

「……………」

俯くクロウ君はどこか寂しそうだった。

元々ウチに居候する期間は一年間っていうことだったし、クリスマスになったらお別れしなきゃならない。そういうことだ。

でもそんな顔しなくていいじゃない。フリージアちゃんがふらりとやって来るみたいに、またいつか遊びに来てくれるんでしょ？

それなら別に寂しくなんかないじゃない。

「まあその気持ち、わからなくもないわよ。なにせこの麗しき美女である桃栗秋子様とバイバイしなきゃいけないなんて、飴玉を舐めようと思って口に含んだら誤って飲み込んでしまいたく味わうことができなかったほどに寂しいもんね」

「例えがおかしいよ」

「下手したら喉に詰まって死んじゃうけどね」

「テンション下がるよ」

……さて、飲み物も飲んだことですし、魔物探しを再開しましょうか。

「気を取り直していくわよ！」

「モモグリさんは何もしないでよ」

私はゴミ箱に向かって空き缶を野球のトルネード投法っぽいフォームで投げた。空き缶は一直線に飛び、もう少しで入る——というところで何かにぶつかりバイーンと跳ね返った。

何かいらっしやる。

牛ほどの大きさ、ぼさぼさした黒くて荒い毛並み、そして凶暴そうな犬の顔……それが二つ。

魔物だった。

「クロウ君、この二頭を持つ犬は、もしかして地獄の番犬と呼ばれるケルベロスかしら？」

「いや、この魔物はイチロージローっていう名前だけど」
ダサッ！

「というか、正式な学名は決まっていらないんだ。地域によって呼び方が違うみたいで、ある地方ではマイケルジョニーとも呼ばれているらしいし」

もうコイツは私の中ではケルベロスと呼びます。

「イチロージローはボクが倒す。モモグリさんは下がってて」

「やーよ。私も少林寺拳法で戦いたーい」

「あなた少林寺拳法なんて使えないでしょうが」

「ハッ！ ハッ！ ハッハッ！」

「はいはい、どう見ても動きが適当だね」

「秘技・少林パンチ！」

説明しよう！ 少林パンチとは、あたかも少林寺拳法のような動きで相手に己の拳をぶつける技だ！ ぶっちゃけ見た目だけの普通なパンチだ！

「ふんがっ！ は、鼻に当たった……！」

でも普通に痛いパンチだ。

「まあいいわ。今回だけはクロウ君に任せるから」

「えっ、他人にダメージを与えておいてごめんなさいの一言もないの？」

「蚊がいたのよ」

「こんな冬場に蚊なんかいるもんか。素直に謝ってください」

ふんっ、いちいちうるさいわねえ。はいはいごめんなさいね、私が悪うございました。と、心の中で謝っておく。

さあ頑張れクロウ君。ケルベロスなんか瞬殺しちゃいなさい。フ
イト！

うん、続く。

第51話：実技試験・まだまだ続く

さて、クロウ君とケルベロスがやり合うみたいだけど……戦闘は省略！

え、あ……やっぱり見たい？ あゝ、見たいのね。まったく、面倒くさいなあ。

じゃあ戦闘の様子をダイジェストでお送りします。

・両者がみ合う。

・私は自動販売機におしるがあるのを見つけ、買うことにする。

・クロウ君、魔法の詠唱に入る。

・ケルベロスは様子を伺っている。

・私は小銭がなかったので、千円札を使おうとした……が、夏目漱石の千円札しかなかったので使用不可だった。

・クロウ君が詠唱を終えると、ゴルフクラブから物凄い衝撃波が放たれた。

・ケルベロスは激しくのけぞった。

・その隙を突き、ゴルフクラブを振り上げケルベロスの頭をがち割ろうとした。

・しかしあっけなく回避される。

・私は他に小銭がないか探すのに必死だった。

・結局小銭はなかった。

・ムカついた。

・自動販売機を蹴り飛ばした。

・自動販売機が倒れてきた。

・私は驚き飛び退いた。

・クロウ君も飛び退いた。

・ケルベロスは巻き込まれた。

・トドメとして、改めてゴルフクラブでぶん殴った。

・終了。

ということで、クロウ君の勝ちです。

『む、これは……クロウの力……なのか?』

カラムの野郎はお困りの様子。私は何もしてないわ。言うなれば、これは事故よ。そしてケルベロスは事故に巻き込まれてしまっただけなのよ。私はおしるのを買おうとしていただけで、戦闘には一切協力していないのよ！ よってクロウ君の力で勝ったのよッ！

『まあいいか……。Bランクモンスター撃破。クロウ、五十七ポイント獲得。合計ポイント数六十七』

ん、けっこう増えたわね。

得点の基準はわからないけど、Aランクを倒したら百ポイントぐらい貰えるかも。よし、頑張ろう！

——残り時間……二時間と二十分。

商店街までやってきた。

すべてのお店はシャッターが下ろされ、『本日閉店』の張り紙。建物にまわりついた配線や豆電球達は、クリスマスの綺麗なイルミネーションで照らしていたもの。

そういえばまだウチはツリーを飾っていないな。明日になったら飾ってみよう。たしか押し入れに封印してた筈。

クリスマスになったら町中はラブラブカップルで溢れかえるんだろうね。

あゝヤダヤダ、羨ましい。

美しい夜景の見える高級レストランで、ワイングラスを掲げながら「君の瞳に乾杯」とかやるに違いないわ。ぶはーっ！ 臭すぎて逆に笑えちゃうわね！

「モモグリさん、何をブツブツ言ってるの?」

「ん、ちよっとカップルに愚痴をね」

「……？」

さて、魔物でも探しましょうかね。

現在位置はさっきも言ったけど商店街。日中は八百屋や魚屋のおっちゃんやヘイラっしやい！　って賑やかなのよ。まあ、私は勤め先のスーパーで買うからいつもスルーしてるけど。

今はがらんとしていて、私とクロウ君以外は誰もいない。深夜の商店街って寂しいものね。

——と、その時だった。

シャンシャンシャン……。

綺麗な鈴の音が聞こえる。

とっさに身構える。

私の勘だと、これは魔物に違いないわ。絶対そうよ、魔物に決まってる。私の勘ってけっこう当たるんだから。

清涼飲料水のペットボトルにさ、たまにオマケでフィギュアが付いてたりするでしょ？　あれで私、シークレットを二回連続で出したことがあるのよ。

え、それはただ単に運が良かっただけだって？　うふふっ、骨だらけの鯖を食べさせるわよ？

それはともかく、シャンシャンと鈴の音が鳴る。

鈴の音といえば……。

ジングルベル、ジングルベル、鈴がく鳴る。

っていう同じみのクリスマスソングを思い浮かべちゃうわけで。

そんな私の前に現れた奴の正体は……。

赤い服を着た、白い髭を生やした老人だった。

というか、モロにサンタクロースだ。

「クロウ君、あれは魔物なの？」

「うん、三択ロースっていう肉好きの魔物だよ」

ダジャレじゃないの。命名した奴、馬鹿じゃないの？

鈴の音は、三択ロースの首に着けた鈴が歩く度に揺れて鳴っていた。猫かあんたは。

「モモグリさん、気を付けて。こいつはなかなか手強いよ」

「ふっ、その言葉から察するに、私の力を借りたいようね？」

何もするなって言っていないしね。

「ボクがやられると、かなり減点されるんだ。それなら二人で協力して戦って、少ない得点を貰ったほうが何倍もマシだからね」

「結局は得点を優先するのね」

まあ、戦えるのならなんだっていいけど。

未知の戦闘力を秘める三択ロース。

私は奴に、拳を一発入れてやる！

続く！

第52話：実技試験・三択サンタ

【突然だけど、前回までのあらすじ】

実技試験を受けることになったクロウ君。そしてそれに付き合うことになった私、桃栗秋子。

魔物をぶっ飛ばせば得点が貰えるらしいから、必死に魔物達を相手にする私達。

その甲斐あってか、開始四十分の時点で計六十七ポイントを集めることができた。チョロいもんだよ。

そして今、私達の目の前にサンタクローズのような姿をした『三択ローズ』というくだらない魔物がいるわけなんだけど――

「クロウ君、あのサンタさんもどきのどこが強いのよ？」

「今はまだ大丈夫。だけどあいつの質問に対して怒らせてしまうような回答をすると、すぐく暴れるらしいんだ」

「もしかして三択の質問？」

「うん」

ホントくだらないわ。

三択ローズは私達に近付き、早速質問をぶつけてきました。

「レア、ミディウム、ウェルダン。あなたの好きな焼き加減は？」

どうでもいいわ。

まあ、でも、とりあえず答えないとね。

きっと相手も納得のいく焼き加減を選べばいいハズ。

どれを選べばいいかなんてわからない。単純に三分の一の確率に賭けるしかない。

クロウ君が不安な表情で私を見ている。まあ任せなさい、見事切り抜けてみせるから！

レアか、ミディウムか、それともウェルダンかしら……。むむう、

いざ考えてみるとけっこう悩んじゃうものね。

「残り二十秒」

制限時間ありなのッ？ いや、もう、こいつウザイ！

私の『スーパードライテクノロジー脳内秋子コンピュータ』をフル稼働させ、やっと一つの答えを導き出した。

「ウェルダンッ！」

ババーン！ というサウンドエフェクトが鳴りそうな勢いで叫んだ。

クロウ君の額から一筋の汗が流れた。

さあ、どうよ？

辺りは緊張感に包まれ、しんと静かになった。

そして三択ロースは――

「邪道だーッ！ ミディウムレアが一番良いに決まってるだろうがあああッ！」

まさかの四択ロースだった。なんてこった。

「モモグリさん、なんてことを！」

「や、無理でしょ」

冷静に言い返す。

三択ロースはどこからともなく鹿の顔を取り出した。アレです、お金持ちの家にありそうな壁に飾る鹿です。

そしてそれを被りました。

鹿人間の誕生です。

絶句。

「クロウ君」

「なんですか？」

「こいつ……馬鹿？」

「あ、あはは……」

普通は鹿じゃなくてトナカイさんでしょうに。

「それはそうと、ここはボクに任せて。モモグリさんはできるだけ離れてて」

「強敵を目の前に黙っていられるものですか。例え傷付いても、例え辛くても、私はこの死地を駆け抜ける……！」

「なに、その気取ったセリフは？」

「シャラップ」

「ごちゃごちゃとうるさいので、秘技『ジャステイス・ハンド（ただの平手打ち）』で黙らせました。

「さあ、いくわよ！」

「ううっ……」

あ、クロウ君がちよつと泣いてる。でも気にしない。気にしてあげない。無視。

「ていつ、先手の裏拳ッ！」

「アウチッ！」

クロウ君の鼻にヒット。

「ボクに当てないでよ！」

「ごめん、わざと」

「何故ッ！」

「隙だらけだったから、つい」

鼻血が出てきたので、そつとティッシュを渡す私。ああ、私の主成分は『優しさ』で出来ているんだなあ、と実感した。いや、やっぱり『美しさ』が主成分ね。グラフにすると、八割が『美しさ』で埋めつくされていると言っても過言じゃないわ。

「じゃあ残りの二割は『悪』だね」

「残念、『可愛さ』でした」

「うわ、酷いグラフだね」

延髄チョップをかましてやりました。どうなったかはあえて言いません。

さて、気を取り直していくわよ！

——私はもしもの時のために兵器を用意した。三択ロースが強敵だというのなら、これを使わざるを得ないでしょう。

出でよ、我が兵器！

テレテッテレー（ファンファーレ）

「卵爆弾ー！」

説明しよう。

卵爆弾は、わたくし桃栗秋子が作った恐ろしい卵型の兵器である。サイズはスーパーなどで売っているMサイズ卵と同じだ。

そしてそれを投げた。卵爆弾は三択ロースに向かって一直線に飛んでいった。

ねちより。

卵が割れて、中から黄色くてドロドロしたものが出てきた。

一応黄身なんだろうけど、あれは発育途中だったヒヨコです。微妙に血管とかが見えます。グロテスクです。

三択ロースは卵爆弾の威力（ねっとり感や臭い）に悶絶し、ショックを受けた。

よしっ、今が攻撃のチャンス！

まず私が全力で駆け出した。拳を握り、攻撃の準備。

狙いを定めて、クロウ君の魔法——対象者に強い衝撃を与える魔法を使ってもらう。

対象者は私。魔法を受けた私は、衝撃の勢いを走る速さに上乗せさせた。これでさらなる勢いが生まれる。

そしたらあとは——

「いっけえーモモグリさん！」

殴るだけ！

「必殺『ダブルインパクト』！」

技名は適当です。でもあえて言うなら、インパクトじゃなくてインパクトって言うのがポイントです。

協力して繰り出した強烈な拳は、三択ロースの頬にめり込んだ。そして勢い良く壁に吹き飛ばされて

「んふうんっ！」と、セクシーかつ苦しそうな声をあげ動かなくな

った。

相手が完全に息絶えたのを確認すると、カンム先生の声が聞こえた。

『クロウ、Aランクモンスター撃破。しかしパートナーの戦闘参加により減点。さらにパートナーを傷付けたために減点。三十点獲得』

「はあ？ 私は怪我してないわよ」

『頬』

言われた通り頬に手をやる。するとかすり傷があって、わずかに血がにじみ出ていた。

あのサンタ野郎、いつの間に……！

現在九十七ポイント。果たしてどれだけのポイントを集められるかしら？

第53話：実技試験・頑張れ急げぶっちぎれ

それから私とクロウ君は魔物を探すも、何故かランクの低い奴しか見つからなくてあまりポイントが稼げないという事態に陥っていた。

そして残り時間五十分というところで累計ポイントは百二十点。少なすぎる。

焦るクロウ君。不安が隠せない様子。

自分には関係ない、と缶ジュースを飲む私。コーラが美味しい。横が

「真剣にやってよ!」とうるさいですが、華麗に無視しました。面倒です。

ぶっちゃけますと、飽きたのです。

なんていうかさ、白熱しないのよね。どいつもこいつも弱すぎて話にならないのよ。

唯一この私に傷を付けた三択ロース、あの程度のレベルでAランクよ? これじゃあ他の奴らもたかが知れてるわ。

「モモグリさん、あそこに魔物が!」

「あゝ、頑張って倒して」

「やる気無さ過ぎ!」

さっきまで私には手を出すなどか言ってたくせに。矛盾してんのよ。

「眠いわ」

「ちょっと、しっかりしてよ」

「だってもう夜中の二時過ぎよ? この時間帯、いつもの私ならぐっすりと眠っているの。グッナイ・グッドスリーピングなのよ」

「何故に英語なの」

「なんとなくよ。いちいちうるさいわね」

訳すと『良い夜・良い眠り』。何のこっちゃ。

「突然ですが、オリジナル子守歌を歌います」

「歌わなくていいです」

「作詞作曲、共にわたくし桃栗秋子。題名は『寝れ』です」

『寝れ』

作詞…桃栗秋子

作曲…桃栗秋子

歌…桃栗秋子

ねんねんころりよねんころり

坊やおやすみねんねこり

今夜は満月、野良犬吠える

羊が一匹、羊が二匹

羊が三匹ラム肉大好き

夜空を見上げて何を思うの

きらりと瞬くShooting star

良い夢見なされGood night

今神の元へGo to heaven

「どう？」

「そんなしてやったりな顔で言われても」

「何点よ？」

「じゃあ百点」

「パンチ」

「はうッ！」

私の鉄拳がクロウ君の顎に当たりました。

「なんで百点なのにぶつんですか！」

「明らかに嘘臭いから。『とりあえず高評価しておけばいいんじゃない？』という魂胆が丸見えだから。あとムカついたから」

「最後の理由が酷いんですけど」

「じゃあうざったいから」

「ごめんなさい、どっちもどっちです」

ああ言えばこう言う。ホント生意気に育ったものだわ。私が親だったら、十三型のテレビで殴ってるところよ。もちろん冗談だけどその時だった。カンム先生の慌てた声が聞こえた。

『緊急事態だ。今すぐ避難しろ』いつもと違う、緊張した声。

「一体どうしたっていうのよ。まさかノストラダムスの予言にあった恐怖の大魔王が今頃現れるとか？」

『そんな馬鹿なことは決してない』

「先生、モモグリさんは馬鹿です」

「クロウ君」にこりと笑い、無言で殴る。

「で、真面目にどうしたのよ？」

『実は、かくかくしかじかなんだ』

「な、なんですって！」

って、かくかくしかじかじゃ何言ってるのかわからないわよ馬鹿。『では改めて……。この試験の魔物は、マホーツ界と人間界を結ぶ空間を通じて、マホーツ界から送っているわけだが――』

話が異様に長かったので、わたくし桃栗秋子が短く分かりやすく話します。

――魔物達は、魔法で作られたトンネルをくぐり抜けて人間界にやって来ているそうです。ちなみにトンネルは学校の先生達を作ったものらしいです。

程よい強さの奴らしか送ってない筈なんだけど、どういうわけかなんかヤバいぐらい危ない魔物が紛れ込んでトンネルをくぐってしまっただけらしいです。

三択ロースなんぞカスと呼べるほど危ないらしいです。

『ということで、逃げろ』

「嫌に決まってるじゃない」

『なに……?』

最高じゃないの、強い魔物だなんて。やっぱりお決まりのこういう展開ってあるものなのね。

「倒したら何ポイントくれるわけ?」

『いや、只今我々教師がなんとかしようとしているところだ。余計なことはしないでもらいたい』

「それにしてもカンム先生、あんたよく喋るわね」

『非常時だからだ』

まあ、先生の喋りっぷりなんてどうでもいいけど。

「で、何ポイントくれるわけなのよ?」

『ダメだ、危険だ』

「そうだよモモグリさん、危ないことはよしなよ」

ふん、私はあの、その……なんだっけ?

あれよ……あれ。

そう! 半ケツのチャンプ! 半ケツのチャンプさえ私には敵わなかったんだから、楽勝よ!

「モモグリさん、『鮮血』ね。鮮血のキャップ」

「わざとよ、わざとに決まっているじゃない。鮮血のキャップね」

「額から変な汗が出るけど?」

「汗じゃないわ。これは……そう、汁よ。未知の魔物に対する武者震いみたいなもんよ。言うなれば『サムライ汁』よ」

「は、はあ……?」

さて、グズグズしてられないわ。早く探さないと時間になっちゃう。万が一の事態に備えて急がないと。

『待て、危険だと言っているだろ!』

「モモグリさん!」

私は二人の言葉を聞かないで駆け出した。

強い奴は私が倒す!

死亡フラグなんかへし折ってやるわ!

第54話…実技試験・日本人をナメるな

「きつとあいつね」

町中を走っていると、小学校の校庭で巨大なクモを見つけた。体長が三、四メートルはあろう特大サイズ。

ローブを纏った人達が周りを取り囲んでいる。あれが学校の先生とやらね。

なにやら魔法を使って巨大クモの動きを鈍らせようとしているみたいだけど、クモが自身の巨大な足を振り回して暴れるものだから詠唱に集中できない様子。

「む、君達は試験中の者か。危ないからこの場から離れなさい！」
先生のうちの一人に言われた。でも逃げる気なんて微塵もない。そもそも目的がこの巨大クモを狩りにきたわけだし。

放っておいたらすぐにでも逃げ出しそんなクロウ君の首を絞めつつ、私は言ってやった。

「ふっ、困っているみたいじゃない。私が手を貸すわよ？」

「何を言ってるんだ。貴女は普通の人間じゃないか。そんな人を危険に晒すわけにはいかない」

「でもだいぶ手を焼いているようだけど？」

「うっ、まあたしかにそうだが……」

教師と話し合っていると一人の老人が私の前に現れた。髪の毛が一本も生えていない、要するにハゲ。もしかしてこの人は……。

「ライト校長先生？」

「いかにも。私がライトだ」

ああ、本当に頭が光りそう。そのぐらいピカピカなハゲ頭。

「ウチの生徒のクロウがお世話になってます」

「いやいや、ホントお世話してます」

「桃栗殿、貴女がああ魔物をなんとかしてくれると？」

「モチのロンです」

「……正気ですか？」

「私はいつも正気で正常で美人です。二つ名は『麗しき美女』です」
「そうですか……」

ちよつと呆れられたオーラを感じた。でもそれは気のせいだと思う。

「では、貴女に任せてみます」

ライト校長はすぐにそう言った。

勿論周りの教師は大反対。普通の人間である私に任せるのが不安で仕方がないみたい。

「もし桃栗殿がああ魔物をなんとかできたら、この試験をトップレベルで合格にしましょう」

「当然よ。そして私にも何かお礼の品をちょうだいね」

「……では桃栗殿には魔ヨネーズを一年分——」

「このハゲが、魔ヨネーズごときで私が期待以上の働きをすると思うなよ」

「……二年分——」

「量の問題じゃないでしょうが」

私は親指と人差し指でそつと丸い形を作り、ライト校長に見せた。
「ああ、そっちを望んでいるのですか」

「多少の額なら校長の権力でなんとかなるでしょ」

「わかりました、では桃栗殿にはドーナツのお礼をさせていただきます」

や、ドーナツじゃなくてお金よ。マネー、お金。

まあいいわ。……本当は強い奴を相手にできるだけで充分なんだけどね。お礼なんてどうでもいいのよ。言えば何かくれるかなと思って試しに言ってみただけ。ドーナツでもなんでもいいからくれるだけありがたいものよ。

魔ヨネーズはフリージアちゃんが来た時に散々食べさせられたからもういない。

……さて、クモを相手にするのは何年振りかしら。『虫取り界の

コマネチ』と呼ばれ恐れられていた頃以来かな。

「いくわよクロウ君、こいつに勝てばあんたの成績はイヤッホウ！なことになるんだから頑張ってちょうだいね」

「成績より命のほうが大事なんだけどな……」

「何か言った？」

「き、気のせいです！」

「オッケー！ それじゃあ張り切っていくわよー」

とりあえずフィールドの確認。

ここはとある小学校の校庭、要するにグラウンド。広いし地面は馴らされているから戦うには何も問題ない。

つまりアレね、好き勝手に暴れられるわけね。テンション上がるわあ。

どうやってこいつを痛め付けてやろうかな。うーん……。

などと考えていたら巨大クモがこっちに近付いていた。

「モモグリさん、逃げて！」

既にある程度の距離を取っているクロウ君が叫んだ。

まあしかし、間近で見ると本当に大きいクモね。同じクモでもタランチュラが相手だったら一発でKOよね。

「モモグリさんっ！」

巨大クモは足を振り上げた。

ああ、私を踏み潰そうとしているのね。

でも甘いわ。ただ踏み潰すだけじゃ、この私を倒すことなんてできないのよ。

――振り下ろされて地面に突き刺さったクモの足を、私は軽々と回避していた。

ふと上を見上げると、別の足が第二撃を放とうとしていた。

……まあ、それすら私にとってはなんてことない攻撃なんだけどね。

「日本人をナメるんじゃないわよ！」

第二撃も難なくかわし、叫びながら顎（口があったからその下の

部分）に跳び蹴りを放った。

顎にめり込んだ足から伝わる柔い感触、嫌な感触。

でもけっこう効いたみたいで、巨大クモは怯んだ。

ついでに肘うちも一発入れて、間合いを取ることにした。

「モモグリさん、余計な心配をかけさせないでよ」

「ちょっと遊びたかっただけ」

「次は真面目にやってよ」

「モチロンのロンよ」

ん、なんか違う。まあいいか。

……あ、今イイ倒し方を思いついた。これ、昔から気になってたのよねえ。いっちゃやってみますか。

「クロウ君、たしか物を鋼鉄にする魔法が使えたわよね？」

「うん。でも、それをどうするの？」

「いや、とりあえず確認しただけ。もしかしたら後で使うかもしれないから、いつ使えてもいいように頭の片隅に入れておいて」

以前魔法で鋼鉄化した新聞紙でゴキブリ退治していたのを思い出した。だからその魔法が戦いに使えるんじゃないかと考えた。

問題は何を鋼鉄にするか、だ。私はできるだけ平らで、尚且つ薄いものがないと考えている。

だけどここはだだっ広い校庭。それらしきものは見当たらない。

「モモグリさん、また来てるよ！」

「うん？」

巨大クモはなにかと私を狙ってきた。まあたしかにね、私の美貌に夢中になるその気持ち、分らないこともないわ。だけどね、正直言っておりがた迷惑なのよ。クモに好かれるのも、なんかねえ……。

とにかく、クモの攻撃を避けるほうに集中しちゃって物を探すことができない。どうしたものか。

と、その時、ある物が目に留まった。

（校章……）

校舎に高々と掲げられた、この学校の校章だった。柊だか何かの葉っぱが二枚、中央に学校名が書いてある丸い形の校章。

アレだわ！

「クロウ君！」

一人だけ離れて様子を伺っていたクロウ君が

「何？」と返事をした。

「あそこにある校章を取ってきて！」

「校章を……？ そんな無茶な！」

「魔法使いでしょうが！ なんとかしなさい！」

「ええー……っ」

ったく、今のクロウ君は究極にやる気がないわね。そんなに巨大なクモが怖いのかしら？

文句を言いつつ校舎の中へ向かったクロウ君。私はそれを見届けると、改めて巨大クモと向き合った。

あとはクロウ君が戻るまで待つだけ。時間を稼がなくちゃ。

——次の瞬間、巨大クモは口から糸を吐き出した。

まさか口から糸を吐くとは思ってなかったから完全に不意を突かれた。瞬時に反応し、体をひねってなんとか直撃は免れたものの、右足に糸が絡み付いてしまった。

「し、しまったああーッ！」

巨大クモが不気味に微笑んだ——ように見えた。

私の右足とクモの口は糸で繋がっている。

逃げられなくなってしまった。

でも、赤い糸じゃないのが唯一の救いだった。

巨大クモが勢いよく糸を引っ張り、私は派手にスッ転んだ。後頭部を地面に強打してしまい、すごく痛かった。これ以上脳細胞が殺されて馬鹿になったらどうするのよ。や、私は馬鹿じゃないけど。私は馬鹿じゃないけど！

そしてクモは前足を器用に使って糸を手繰り寄せ、自らの元へと引きずり込ませる。ズルズル、ズルズルと。

このままだと食われる。桃栗秋子、生涯最大のピンチ！ どうせならイケてるメنزに食われてから死にたかった……。

——なんて、私がネガティブになると思ってるの？ ナメるんじゃないわよ！

「せいやーっ！」

掛け声と共にハンドスプリングで無理矢理起き上がる。一見無理なことも簡単にやってのける私、スゴくない？

引っ張られるぐらいなら、逆にこっちから近付いてやるわ！

大きく一步、二歩と踏み込み、三步目で地面を強く突き放し、跳ぶ。四歩目、手繰り寄せている前足がいい感じの所に上がっていたのでそれを踏む。さらなる跳躍、五歩目はクモの頭を踏みつけてもつと上を目指した。

私は今、鳥になった。

「必殺、『鳥が急降下するかの如し素晴らしく勢いのある膝』！」
ぶっちゃけ、ただ膝から落ちるだけ。

でも私の膝はクモの頭にダイレクトヒットした。脳が揺れてしまえ。

着地。クモは今の攻撃を受けて完全に意識が朦朧としているようだった。

ふっ、どんなもんよ。

「モモグリさん、校章持ってきたよ！ スゴく重い！」
ちようどいいタイミングでクロウ君が戻ってきた。

「じゃあそれを魔法で薄っぺらくして！」

「薄くするのッ？ が、頑張ってみる！」

「薄くしたら、鋼鉄化の魔法でガッチガチに固めて！」

「わかった！」

急がないとクモが動き出しちゃうから早くしてよね、まったく。

「出来たよ！ 次はどうすればいい？」

「私に頂戴！」

校章はすっかりと薄っぺらい円盤に成り果てた。それを受け取り、

両手で勢いよくぶん投げた。

狙うは奴の足。私はクモの足をすべて切り落としてやろうと思っていたのだ。ほら、虫って足がなくなっても生きていたりするじゃない？ だから足がなくなったらどういいう動きをするのかなあと気になって。

でも、悲しいことが起こった。

手元が狂った。

円盤は綺麗な弧を描き、クモの顔に刺さった。サクッと。

「……………」

「……………」

いや、まあ…………うん。

結果オーライ！

最終話：忘れないよ

クロウです、こんにちは。

この前の実技試験は、巨大なクモの魔物を倒したおかげで最高の成績を残すことができました。こればかりはモモグリさんに感謝しない。

そんなモモグリさんは、今戦っています。

「馬っ鹿じゃないのあのハゲ校長！ マジでドーナツを一年分送ってくるとかあり得ない！」

大量に送り付けられたドーナツを相手に。

さて、今日は十二月二十四日——クリスマスイブです。明日はモモグリさんと出会ってちょうど一年の日で、別れの日でもあります。ボクはマホーツ界に帰らないといけません。

「クロウ君、私はちよつと紺ちゃんと和夫にドーナツを分けてくる（無理矢理渡す）から、帰ってくるまでに準備は済ませておいてよね」

「あ、はい」

準備というのはつまり、今日は別れの日前日だから遊園地に行こうという話になったのだ。行くのはボクとモモグリさんの二人だけなんだけどね。

出掛ける準備はとくにできているから、明日この家を出ていく荷物の支度をおこう。

着替え、生活雑貨品、日記やドリルなどの宿題——

「クロウ」

「うわっ！ あ、カンム先生、いきなり後ろから現れないでください！」

っていうか不法侵入だ。

「いよいよ明日だな」

「はい。一年経つって早いですね」

「寂しいか？」

「そりゃあ寂しいですよ。当たり前じゃないですか」

「そうか。それはそうと、最後の試験だ」

それはそうとって随分と適当だなあ。

……って、試験？

「試験なんて聞いてないですよ？」

「そりゃ言っていないから当然だ」

「はあ……。それで最後の試験ってなんですか？」

「これだ」

カンム先生が取り出したのは長さ三十センチくらいの木の杖だった。

「杖……をどうするんですか？」

「桃栗さんに振りかざせ」

「それだけですか？」

「それだけだ」

なんだ、えらく簡単な試験じゃないか。

「簡単な試験だと思うなよ」

「はい？」

「その杖は、相手の記憶を消す能力が備わっている」

「……もしかして？」

「桃栗さんの魔法使いに関する記憶を消すのが最終試験だ」

えっ、それってつまり……。

「当然クロウ、お前のことも忘れてしまうけどな」

「そ……んな……！」

続けてカンム先生は話してくれた。

人間界に魔法使いのことが知られていないのは、この試験があるからこそなのだ。

戦う魔法使いになりたいのなら、いつか必ず酷な選択肢を強いられる時が来る。これはその時のために免疫をつけておくものなのだと。

「先生……もしモグリさんの記憶を消さなかった時、ボクはどうなるんですか？」

「留年。ちなみに期間は今日中だ」

わったしっはビューティー桃栗秋子ー。ふんふんふーん。道行く紳士はみんななぎ倒すー。

いやあ、ドーナツの処理ができたわ。紺ちゃんと和夫にあげても大量に余っちゃったから、職場に置いてきちゃった。たぶんみんなで食べてくれるでしょ。

さて、早く帰って遊園地に行こうかしらね。クロウ君を待たせちゃったから、急がないと。

「ただいまー！ 行くわよー！」

玄関で叫んだけどクロウ君は来なかった。ありや、待ちくたびれて寝ちゃったかしら？

中に入ると、クロウ君はぼーっと突っ立ったままの状態だった。

「何してんの？」

「……………」

「コラ、聞いてるか？」

「……？ うわ、モグリさん！ いつ帰ってきたの！」

「今、ついさっき、数秒前。それより早く行くわよ。支度は出来るでしょ？」

「う、うん……」

なにか様子がおかしい……？

ということで、遊園地に到着。

入口付近によくあるパンダの乗り物を見つけた私は、嫌がるクロ

ウ君を無理矢理乗せた。そして写メールを撮りまくった。よし、あとで紺ちゃんに送ってあげよう。

「モモグリさん、ヒドイ……」

「なかなかよろしい画が撮れたわよー。で、なんのアトラクションに乗ろうか？」

遊園地といえばコレでしょう、ということでコーヒーカップにやってきました。

「い、いきなりヘビーなものをチョイスしたね……」

「コーヒーカップのどこがヘビーなのよ？」

「嫌な予感がプンプンするよ」

コーヒーカップ、始動。

私はさも当然かのようにハンドルを回しまくる。ぐるんぐるん。

「目が、目が回る！」

「まだよ、まだ力は残されているハズ！ もっと遠心力を！」

ぐるんぐるんぐるん。

ぎゅるるるる。

「出る！ 胃から何かが込み上げてきた！」

「それはきつと熱い闘志ね！ クロウ君も必死にコーヒーカップと戦っているのね！」

「別の意味でね！」

「じゃあ回転速度アップ！」

「いやあああ……ッ」

楽しかった。満足。

でもクロウ君は真っ青な顔でベンチに寝てます。

「大丈夫？」

「大丈夫そうに見えますか……？」

「ピクピクしてるわね」

「大丈夫じゃないんですよ……げふうっ！」

すかさずエチケツト袋を差し出す。

「ま、これもイイ思い出として心に残るでしょ」

「思い出……」

「そ、あの時コーヒーカップでゲロったなあ……って」

「そんな思い出なら忘れていいかもなあ……」

それから私達は遊園地と思う存分遊びまくった。ジェットコースターに乗ったり、メリーゴーランドでクロウ君を轢いたり、お化け屋敷でミイラ男にジャーマンスープレックスをかましたり、係員に怒られたり、色々やった。

気が付いたら陽が暮れかけていた。だから次のアトラクションを最後にしようと思う。

「ラストといったら、やっぱり観覧車でしょ。彼氏と一緒にだったらムード溢れる展開になっていただろうになあ……」

「モモグリさん、彼氏なんていないじゃない」

「シャラップ。なんとなく言ってみただけよ」

観覧車はゆっくりと回り続ける。

遠くを眺めると、私達の住んでいる町が見渡せた。夕陽に照らされて、少し綺麗に見えた。

「私とクロウ君が出会って、明日がちょうど一年ね」

去年のクリスマス、変な子供が来たなあと思った。まさか魔法使いだとは思わなかった。いや、普通ならそう思うことないけど。

「なんだかんだで、けっこう楽しかったわよ」

二人で買い物に行ったり、お出かけしたり。喧嘩したり、からかったり。

クロウ君がいなくなったら暇になるな。寂しいな。

「私、クロウ君のことは忘れないからね。いつかまた会えるでしょ？」

「……………」

「クロウ君？」

泣いてるの？

私、なにか泣かすようなこと言ったかしら？

あ、わかった。私と別れるのが寂し過ぎるから泣いちゃったのね。
可愛いトコあるじゃない、このこのー！

「モモグリさん……」

「なに？」

「ごめんなさい……ッ！」

クロウ君は木の杖をゆっくりと振りかざした――けど、すぐに杖を落とした。

そしてボロボロに泣き崩れた。

「やっぱり……できないよ！」

「クロウ君？」

「モモグリさんの記憶を消すなんて……ボクにはできない！」

「……………」

私はクロウ君の元へ行き、優しく頭を撫でてやった。

「合格！」

「……………え？」

満面の笑みを浮かべたモモグリさんの口から出たのは

「合格」という言葉だった。

「いや、合格ってどういう意味での合格……？」

「最終試験の合格に決まってるでしょ」

「……………」

はあッ？

「なんでモモグリさんが試験のことを知ってるの！」

「カムム先生から聞いた」

そ、それってまさか……。

「私と先生はグルよ」

う、うわぁ！ ヒドイ！

——試験の真相はこうだ。

パートナーのことを本当に想っているのなら、記憶を消すなんてことはしないハズ。だからこの試験は、木の杖を使わなければ合格らしい。ちなみに杖を使った場合は、本当に記憶がなくなっていたらしい。それでも合格らしいけれど、評価は低いらしい。どうやら信頼感みたいな、他人を思いやる気持ちのようなものを試されたらしい。

どっちにしても、この試験は絶対に合格するみたいだけど。

「いやあ、でもクロウ君が木の杖を取り出した時は焦ったわあ。ぶっ飛ばしてやろうかと思ったもん」

「……………」

「って、また泣いちゃったの？」

「だって、だって——」

「あーもう、よしよし。私が悪かったから泣かないでよ。本当に悪いのはこんなことを計画した学校側だけだね。カンム先生に会ったら一発殴らせてもらおうわ」

——十二月二十四日……クリスマス。

いよいよ別れの日がきた。

ボクは荷物を背負い、玄関でモグリさんに見送ってもらう。

「頑張って凄い魔法使いになるのよ」

「うん」

「私からのクリスマスプレゼントは大切にしなさいよね」

「う、うん……」

モグリさんからクリスマスプレゼントを貰った、赤味噌とちゃんこを。日本の文化を伝えなさいとか言ってたけど、正直微妙だ。

「そろそろ行かないと」

「おう、元気でやりなさいよ!」

「モモグリさんは結婚相手が見つかるといいね」

「なにを生意気な」

「あははっ」

さて、そろそろ本当に行かないと……。名残惜しいけど、仕方ないよね。

「じゃ、モモグリさん……。さようなら」

「うん」

「……元気でね」

「じゃ、またね!」

……………ッ!

「うん、またいつか! 必ず!」

外では既にカンム先生が待っていた。頭をさすっているのは……まあなんとなく理解してください。

「挨拶は済んだか?」

「はい」

「荷物はちゃんと持ってるな?」

「大丈夫です」

「つと……。でもコレだけは置いていけ」

「えっ、コレは宿題じゃ……?」

「学校側に出すものではないからな」

「はあ……」

「それと、最後の宿題だ――」

クロウ君がいなくなった我が家は、なんだかいつもより広く感じた。私としたことが、しんみりしちゃった。

よし、紺ちゃんと和夫でも誘って飲みに行こうかな！

と思ったら、床に一冊の本が落ちていた。

これは……クロウ君の日記だ。たしか宿題のやつ。

ちよっとちよっと、なに大切なものを忘れてんのよ。取りに戻ってきたらビンタしてやるわ。

……でも、ちよっと中を覗いてもいいかな？ 何が書いてあるか気になるし。

12月25日（晴れ）

ボクはモグリアキコさんという人のお宅に居候させてもらうことになりました。住む所があっさり見つけてよかったです。

モグリさんは自らのことを『美女』だと言ってます。たしかに美人だと思います。それは認めます。

しかし、性格がおかしいです。どこかバカっぽいです。っていうかバカです。パンケーキにポン酢をかけて

「和風！」

っていうのはどうかと思います。

あ、懐かしい。クロウ君の宿題を初めて邪魔した時の文章だ。

この後に私に対する良い評価が書いてあるけど、たしか私が無理矢理書かせたのよねえ。あっはっは。

あとみんなで温泉に行ったことや、色々と遊んだことが丸一年分書いてあった。

どれもこれも懐かしくて、つい時間を忘れて読み更けてしまった。
そして、今日の日記――

――
(今年の) 12月25日(晴れ)

今までありがとう。

ボクはモモグリさんのことが大好きでした。
モモグリさんのこと、絶対に忘れないよ。

――
……………。

ふん、直接言ってくれればよかったのに。まったく、これだから
クロウ君は……………。

さて！ ティッシュはどこに置いたっけかな。

桃栗さんのあとがき（前書き）

「こんな後書きはナシだろ」 っていうツツコミはナシで。

桃栗さんのあとがき

っていうことで、マジカルハイテンション！をお送りしました。
いかがでしたか？

正直言って微妙？ うん、オッケーオッケー、微妙なら仕方ないわよねー。

つまらない？ じゃあなんでこんな所まで来てんのよ。もしかしてアレかしら？ あとがきを先に読むタイプ？

あとがきまでもがまともだと思うんじゃないわよ！ 最後までこのテンションでいくわよ！

うん、そうね、言わないといけないことがあったわね。

最後まで読んでくれた方、どうもありがとう。

っていうか、よく付き合ってくれたわよね。五ヶ月更新の放置をしたり、度々更新の放置をしたり、更新の放置をしたりしたのにな。それよりも、初期の段階から読み続けてくれた人がいるかさえ不明よね。いたら褒め称えるわよ。

まあでも、更新の放置した原因の一つはやっぱりプロットを全然作らなかったのが大きいわね。いつも思い付きでお話を書いてたから、確実に詰まるわけよ。ノープランは辛いわ。

だからせめて次回作はきちっとプロットを考えるわ！ っていうか続編とか書く気ないけど！

とりあえず、質問が来そうなことを今から勝手に答えるわよ。

Q 結局桃栗さんは結婚したの？

A ご想像にお任せします。

Q クロウ君と再開できたの？

A ご想像にお任せします。

Q 桃栗さんって本当に美人なの？

A 麗しき美女です。

Q 本当は不細工なんじゃないの？

A ぶつわよ。

Q 性格が不細工なんじゃないの？

A 脊髄を損傷させるわよ。

Q ナルシスト？

A ポジティブです。

Q リファとロゼはどうなったの？

A 生きてます。

Q そういうことじゃないです。

A クロウ君と同じように合格して帰ったそうです。

Q なんで最終話だけ中途半端にシリアスなの？

A 最終話ぐらいシリアスにさせなさいよ。

Q 本当にノープラン？

A ノープランです。

そんな感じ。

適当に答えるなって？ 適当じゃないわよ、大雑把なのよ。

さて、それじゃあお別れね。

いなくなつて清々するって？ 生意気な。

じゃ、さようなら。

またどこかで会いましょ。会おうと思えば会えるハズだから。それじゃあお元気で。さよなら。

最後は私自作のエンディングテーマでお別れをしましょっか。

しつこい？

最初に言つたわよね、このままのテンションでいくつて。じゃ、歌います。

『Gooby』

作詞…桃栗秋子

作曲…桃栗秋子

歌…桃栗秋子

コーラス…下暮温泉の従業員の方々

グッバイ、さようなら

また会いましょ（会いましょ）

グービーと読むな

タイトルは“グッバイ”（紛らわしい）

いつか見た夢

柿の種をさらに揚げる（意味ない）

そんなことない、カリッと感が増すから（だからどうした）

いつかまた会えるよ

座葉だつてたまに押し戻されるから（リバーズ）

だから“さようなら”じゃないでしょ

“またね”でいいでしょ
グッバイ、グッバイ（グービー、グービー）
またね、いつか会えるその日まで

桃栗さんのあとがき（後書き）

読んでくださった方々、感想や評価をくださった方々、皆さん本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3222b/>

マジカルハイテンション！

2010年10月20日22時40分発行